

---

# 「アコウクロ」

強者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「アコウクロ」

### 【Nコード】

N3114V

### 【作者名】

強者

### 【あらすじ】

小説傀儡の登場人物 綾瀬 千佳の物語

## アコウクロ

「傀儡」のサイドストーリー

「綾瀬 千佳」の物語

壮絶な生き様をした、第2の傀儡 「綾瀬 千佳」

本編の「傀儡」とは違うもう一つの物語

思い続ける事の大事さを願った主人公、「哀川 京介」

明かされていく過去、千佳の死を京介がどう捉えているのか・・・  
そして、そこにあつた本当の想いとは・・・

尚、本編の「傀儡」とは別個のストーリー構成で描かれています事  
をお知らせします

「傀儡」哀 編まで読んで頂けると内容は繋がるようになっていま  
す。

## 第一章 1

京介はちいからの手紙を手にし

哀しみの淵に陥った・・・

「京介さん、本当にありがとうございます。千佳は幸せです。頑張って皆に自慢出来る様な お嫁さんになります。」

どうか これからも よろしく御願います。そして・・・私の事は どうか 「ちい」って呼んで下さい。

ほら、その方が 仲良い感じがするでしょう（笑） 私は 京ちゃんって 呼びたいの・・・いつの日か そう呼び合おうね・・・「

『京ちゃん・・・不安で・・・苦しくて・・・恐かった・・・』

『ちい　ちい　』

『どう・・・しても　謝りたかった・・・ごめんね・・・私・・・こ  
んなんで・・・』

『ちいー ちいー』

『今・・・やっと・・・素直に 京ちゃんが見れる・・・ありがとう・・・  
だから もう 泣かないで・・・』

涙は 止まらなかった・・・

『御願い・・・私が・・・私であるうちに・・・殺して・・・』

『そんな事・・・出来ない・・・』

ちいは笑顔で言った・・・

『そうすれば・・・やっと 自由になれる・・・ 京ちゃんの心  
ですと 何も心配しないままで 一生 一緒にいれる・・・』

『ちいいー』

『そんな事 言つなああー』



ちいは京介の両腕を取り自分の首に付けた・・・

『 お願い・・・ あなたと 出会えて 私は幸せでした・・・ 』

『じゅおおおおー』

・・・京介のその後の記憶は消え去っていた・・・

最後に・・・ちいの・・・言葉だけが

脳裏に焼き付いてた・・・

『ありがとう……ごめんね……京ちゃん……わたし……し……  
……こんなん……で……』



・ ・ ・ ・

『京介さん（＊、＊）』

『なんだ？』

『ねえ京ちゃんって、呼んでいい？』

『ああ、じゃあ俺は「ちい」って呼ぶな』

『うん（＊、＊） そっ言っの・・・好き・・・』

『ハハハ』

ちいは京介の心の中で育っていった・・・

誰にも見えない・・・京介にしか見えない「ちい」がそこにいた・・・

京介は独り言が増え、何かに取り付かれたようになった・・・

『ちい 今日 星でも見に行くか？』

『うん（\*、\*）』

『俺な・・・今まで本当に素直になれなくて・・・』

『知ってるよ（\*、\*）』

『そうか（笑）ちいは何でも知ってるんやな』

『うん（\*、\*）』

京介はちいの鞆を持ち出かけた

はたから見たら女物の鞆を持つ、一人の男が星を見ている・・・

そんな風に見えていた

『ねえ 京ちゃん。ちいはね本当に嬉しかったんだあ』

『何がや?』

『だってえ 世界一大好きな人のお嫁さんになれたんだもん』

涙があふれ出た

『俺もだよ・・・ちい・・・幸せになろう もう、繰り返さない・・・』

『うん・・・京ちゃん・・・好き・・・愛している・・・』

『ああ・・・俺も愛している・・・』

星空を眺めながら京介は言葉を失い始めた・・・

ちいの好きな星空・・・

少しの孤独感を理解した・・・

帰りにブライダルサロンの前を通った・・・

店内に大きく飾られた、ちいのウエディングドレスのパネル・

「ああ・・・ちい そんなところにいたんや・・・」

急いで サロンに入った

パネルの前で ちいを眺めた・・・

一歩も動かず、ちいだけの事を考えていた・・・

デザイナーのめぐが京介を見つけた

『京介さ・・・ん・・・』

『・・・めぐさん・・・』

『どうされました？・・・やはり・・・まだ・・・』

『えっ？』

『いやね・・・ちいは本当によくやってくれていますよ、昨日もね・・・』

『



京介はめぐに、ちいの死を話した事を記憶から消していた・

現実を受け入れられない・京介の弱い心が傷を埋めていた

『昨日……ですか……』

『そうそう、でね、ちいがね、星が好きで……それで……』

めぐは涙が込上げた……受け入れられずにいる京介を哀れに感じ  
た……

『そう……ですか……じゃあ喜んでますね……』

『ええ 本当にちいは……ちい……は……』

突然黙りこくってしまった……

『さあ、京介さん、これを奥様に・・・』

そう言い ブーケを渡した

『これは？』

『女の子はブーケが好きなんですよ（\*、\*、\*） 持つのも幸せ、  
投げて受け取る人も幸せになれる 魔法の花なんですよ まだ 買  
ってないですね？』

『・・・はい・・・』

めぐからブーケを受け取り、部屋に戻ることにした

『ちい・・・喜ぶかな・・・』

部屋に帰ると、そこに、ちいはいた

『ただいま、ちい ほらブーケだよ』

『あーん 京ちゃん（\*、\*） 嬉しい』

『買い忘れてたもんな・・・』

急にちいの形相が変わった・・・

『今頃・・・なんだよ・・・こんなもの・・・』

『おい どうしたんや?』

『お前のせいで 私は・・・私は・・・』

言葉が良く聞こえなかった

『サタンか・・・』

『・・・』

その形相は一瞬で消えた・・・

『（＊、＊）ダイジー』

『 (\*、\* ダイジー) 』

『 (\*、\* ダイジー) 』

『 (\*、\* ダイジー) 』

繰り返される ちいの言葉・・・

京介はブーケを持ちながら倒れた・・・

『  
ち・ちい  
・  
・  
・  
・  
・  
』

## 第一章 3

しばらくの間、京介は気を失っていたようだった。。。

気がつくと目の前には、めぐから貰ったブーケがあった。

無意識に持ったのであろう

ちいの衣類を抱きしめていた。

「すうー・・・はあ・・・」

匂いをかいだ・・・

『ちい・・・は・・・もう・・・いないんだな・・・』

天井を眺めてしばらく 黙り込んだ・・・

体を起こし

台所に行き冷蔵庫を開けた

今考えると、京介は冷蔵庫なんて開けたことがなかった。

「こんな事すら知らない事なんだな・・・」

「ガバツ」

冷蔵庫には京介の好きな

ブラックコーヒーが大量に買い込んであり

その他にも、ちいが作り置きしたものがあつた。

「ああ・・・俺はなんて事をしてしまったんだ・・・」

些細な幸せ



些細な気遣い

相手を笑顔が見たい・・・

そう言う、ちいの気持ちを

ちいを亡くしてから気づかされた・・・

「残された者の運命・・・しなければならぬこと・・・プランなんて・・・どうでもいい・・・」

俺はちいを知らな過ぎてのかもしれない・・・

・  
・  
・  
・  
・

京介はHEAVENS CAFEのシークレットルームへ向かった

ジャニスに作らせた冷凍保存のガラスケースを眺めた・

そこには、変わらぬ姿でいる、ちいの姿があつた・

ガラスケースの中の　ちい・・・。

ウエディングドレスを着たまま・

そこには、沢山の希望や願いがあつたのだろう・・・

壁中に貼られていた京介の写真

二人で写した写真は数枚しかない

殆どが京介一人の写真であった。

その写真、には口紅らしきものがうつすらと付いていた。

ちいは京介と会えない日・・・

朝、帰宅後、寝るとき、写真にキスをしていた

「・・・」

目をつぶった

ちいの事が深く知りたい・・・

出会い・・・

別れ・・・

数々の思い出や言葉・・・

生い立ち・・・

本当のちい。

互いの傷跡に気づき、そこにあった本当の意味を考えた

『夢・・・あいつの夢はお嫁さん・・・って言ってたな・・・こんな俺の  
どつが・・・』

京介は思い出した・・・

沢山の写真の中にあつた一枚の写真がった

夕焼けの写真・・・

「じれは・・・」

京介の知る、ちいは星が好きだつたはず・・・

京介の写真のほかに貼れてた一枚の写真。

「この夕焼けは・・・どこだ・・・」

生まれた場所や今までの生きてきた道も・・・何も知らなかった。

京介はその写真を持ち、ちいのガラスケースの前へ行った

『ちい この夕焼けが好きなのか？』

目を瞑ったままのちいが微笑んでいるように感じた。

『・・・同じ景色を探しに行くよ・・・ちい・・・』

ちいを知るための旅に出ようと決意をしていた・・・。

その晩から京介に異変が始まった・・・。

## 第一章 4

少し頭痛がする・・・。

極度のショックからくるフラッシュバックだった・・・

「なんだ・・・この痛みは・・・」

ジャニスを呼んだ

『京介さん、どうしました顔色がわるいですが・・・』

『ああ・・・少しフラッシュバックも大きくなって・・・』

『彼女の件のですか・・・？』

『ああ・・・ちいの死は受け入れた・・・だが、まだ見えるんだ・・・彼女が・・・』

『幻覚ですか？』



『いや違うと思う・・・想像・・・そこから来るものだろう・・・』

『そうですね・・・良い子でしたよね・・・』

『ジャニス・・・俺はしばらく旅に出る・・・頭痛が酷いんだ・・・薬をもらえるか?』

『うちは薬局じゃないですよ(笑) 普通の薬でしたら市販のものをお勧めしますが・・・』

『市販? フツ・・・そんなんでフラッシュバックを止めれるのか? 痛み止めだ・・・早くしろ』

『分かりました・・・ですが・・・これも・・・飲みすぎには注意ですよ・・・』

『白か?』

『そこまでは・・・ただ・・・効果が・・・』

『分かった・・・』

ジャニスから薬を受け取り店を出た。

一度、千佳の部屋に戻り出かける準備をした

「多少の着替え」

「夕焼けの写真」

「ちいの写真」

「ちいの服」

今となり、一つ、一つが大切なものを感じた

携帯を出し、美央に電話を入れた・・・

「プルプル・・・」

『社長 ご無沙汰してます』

『ああ、京介君 どうしたの?』

『あの・・・お聞きした事があるんです』

『私で分かる事ならいいわよ』

『社長のところにいた秘書の子いるじゃないですか・・・』

『ああ・・・もう 辞めたわよ どうかしたの?』

『昨日、駅で見かけて・・・』

『駅?ああ・・・じゃあ、実家に帰ったんじゃないかな・・・』

『ああ・・・そうですね・・・どこなんですか?』

『なんで?気になるの(笑)』

『いや・・・元気が無かった様なんで・・・少し気になったんです』

『そう・・・確か・・・九州の方だと思ったよ・・・』

『そうでしょうか・・・遠いんですね』

『京介君は今どこ？』

『東京です、実家の京都の方へ行こうと・・・』

『えっ？京介君って関西の人なの？』

『はい、あっ・・・そろそろ時間なんで、また掛けなおします・・・』

電話を切った

「そうか・・・九州か・・・取り合えず・・・向ってみる価値はありそうやな・・・」

美央からの情報を得て京介は駅へ向かった。

駅に着く前に ウエディングサロンの前を通った・

大きなパネルの前に、これから結婚を迎えるカップルがいた

サロンの担当だった、「めぐ」は京介に気づき軽く会釈をしながら接客していた。

京介は軽く頭を下げ、その場を立ち去ろうとした

『待って！哀川さん』

めぐが走ってきた

『結構な荷物ですけど、どこかに行かれるんですか？』

『ええ・・・ちいの生まれた所に・・・』

『・・・そうです・・・か・・・お気をつけて・・・』

『ありがとう・・・』

京介はブライダルサロンを後にした・・・

ちいの写真は幸せを与える象徴かのように飾られ

反面、現実を拒否してるかのようにも感じた

色んな事を考えた・・・

「人生に・・・もし・・・なんて 無いよな・・・」

京介の頭の痛みが激しくなってきた．．．

## 第一章 5

激しい頭痛が京介を襲った・・・。

現実を否定したい思いと現実を理解し始める、心から来るものだった

「時期に・・・この頭痛も慣れてくるもんなやろか・・・」

馬鹿な事を呟きながらジャンスから渡された、薬を手にした。

見た目は、ちいに渡していた薬と見た目は一緒だった

「・・・」

薬を飲むと頭痛は治まり始め、



呼吸も整い始めた・・・

「この感覚は・・・ちいも味わっていたのだろうか・・・」

自我・・・本体の意識の中の葛藤や交差は想像を絶するものだったに  
違いない・・・

ちいの事ばかり考える、女々しい自分に気がつき始めた・・・

「今更・・・何を考えているんだ・・・俺は・・・」

駅に着いた・・・

新幹線のチケットを買いに 窓口へ・・・

窓口は人が大勢並んでいた

「皆、何所に行くのだろう・・・」

「俺には時間が沢山ある・・・行き先も何となくしか分からない・・・のんびり向かうか・・・」

最後列に並んだ・・・

しばらく離れる東京・・・

自分が東京へ出てきたばかりの事を思い出した・・・

関西に居れない状況になり身を隠すように関東へ出てきて小さな会社  
社に就職・・・

それでも、尚、関西のしがらみで纏わりつく黒い影

その中でしか 意気揚々としか出来なかった。

そのうち、過去は理解され、和解し

関東の闇にのめり込んでいった自分・・・

闇の世界で生き続け、裏の力も金も好き放題にし、いくつもの「傀儡」を作り犠牲者をだした・・・

そのこと自体にも罪悪感もなく使い捨ての人形的にしか思ってた  
った

心など必要無い・・・

感情など無意味だ・・・

いつの日か思い込んでいた

ちいとの出会・・・

最初はプラン進行の為の「傀儡」としか考えていなかった・・・

羞恥を与え、そこに絶対的なものを植え付ける・・・

薬、催眠などを使う、一番ハードな「禁じ手」をぶつけていた事に

今更ながら気が付いた・・・

感覚麻痺・・・プラン遂行の為の行動・・・

最初の頃であつたら、この手法は躊躇してであらう・・・

心を理解し始めると自分が破滅する・・・

分かっていたはずだ・・・

ちいは恐らく京介を理解し始めたのであろう・・・

最後・・・

『ありがとう・・・こんなんで・・・じめんね・・・』

傀儡を作り、取り込まれていたの自分……。

いや違う……ちいは傀儡なんかじゃない……

全て俺が悪いんだ……全て……

過去を振り返るとちいとこの時間のフラッシュバック

後悔と切なさどうしても「IF」を考えてしまう……。

それがフラッシュバックや頭痛の原因でもあった……。

「今更……」

新幹線のチケットを購入し新幹線乗り場へ向かった

人込みに揉まれながらホームへ……

京介は新幹線を混雑の為一本遅らせた

「急ぎの用ではない・・・からな・・・」

先立つ新幹線をぼんやり眺めていた・・・

「・・・」

京介は新幹線の中の、ひとりの女を見ていた・・・

「ちいと同じくらいの歳かな・・・髪型、服装・・・似てるな・・・」

遠目で見える女は、本当にちいに似てるかどうかは分からない

・・・いないはずのちいを無意識に探していた。

新幹線が出る時、その女は窓際へ座った

女は視線を感じたのか京介の方を見た

発車の合図と共に新幹線は走りだした・

「グオオオー・・・ガタンガタン・・・」

ゆっくり走り始めた

新幹線の女は目で追うように京介を見ていた

京介も、その女を眼で追っていた・

「ジロジロ・・・見すぎてたかもな・・・」

京介は夕焼けの写真とちいの写真を眺め、次の新幹線を待った





## 第一章 6

数十分後、京介の乗る新幹線が到着した。

「あれやな・・・」

チケットを見ながら 席に座った。

西日本へ向かう新幹線は時間帯のずれのせいか乗客は少なめだった

窓際の席に座り出発を待った

頭痛の為に飲んだ薬のせいかな、少し睡魔が襲ってきた・・・

「どうせ・・・終着点まで、乗るのだから少し休むか・・・」

出発を前にウトウトし始めた。

・ ・ ・

『京ちゃん！ 京ちゃん！』

目の前には満面の笑みのちいが居た

『似合う？』

ウエディングドレスを着ていた

『ああ 似合うよ』

『ホラ！ ミニにもなるんだよお（\*、\*、\*）』

ちいは白くて 長い脚を 見せてきた。

『このドレスは世界に一着、ちいの為の生まれたドレスだもんな（\*、\*、\*）』

『ねえ 似合うよ可愛いわ。』

『ああ 似合うし 可愛いよ）＊、＊（』

『そうじゃなくて！』私』と『私』、どっちが似合うのよ！』

『どっち・・・？』

『どっちの千佳に似合っつて聞いているの！』

ちいは自我と本体のどちらが似合っつているかと聞いてきた

『どっちも似合うよ・・・』

『嫌なの！嫌なの！私だけを見て！私だけを見てっつてば！京ちゃーん・・・』

本体のちいは泣きながらしゃがみこんでいた・・・

『ちい・・・おい、ちい・・・』

『く……くすり……は……はや……く……』

ちいの顔は青ざめ……震え始めた……

『待て、今渡す！』

京介は鞆の中を薬を出そうとした

『無い……無い……薬が……』

ちいは大声で叫びながらうずくまった……

『いやあああああー』

『ちい……！』

京介は汗だくになり、ちいの名を叫びながら目を覚ました・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

何が起きたのか、直ぐには理解出来なかった・

激しい頭痛が　一瞬襲った・

「ズキン」

「うっ・・・」

痛みで、先程まで見ていた光景を現実のものではないと理解した・

「・・・ゆ・・・夢か・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・」

痛みが少しずつ弱まり、景色が目に入り始めてきた

「ここは・・・何処だ・・・」

数時間、眠り込んでいるうちに新幹線は名古屋まで来ていた

「名古屋か・・・」

徐々に頭痛が激しくなってきた・・・

「フラッシュバック・・・のせいか・・・」

ジャニスから渡された薬を再度出した・・・

「飲みすぎは危険です・・・」

ジャニスの言葉が頭を過ぎった・・・

「ダメだ・・・途中下車して休もう・・・薬を飲んで我慢すよりはいいだろう・・・ちいの為にもあの景色を・・・」

京介は痛みを堪え、生まれ故郷である京都で途中下車した・・・

o



## 第一章 7

新幹線は京都に到着した

途中下車のチケットの払い戻しをして駅の外に出た・・・

「振り返り、何年ぶりの京都だろう・・・関東に上がる時は京都では無く大阪に方にいたからな・・・」

懐かしくも新しくもある京都・・・

少しの思い出もあった・・・

取り敢えず、宿を探すことにした

実家はもう無く、親も双方他界していた

「・・・」

駅付近では無く、四条通り付近まで移動した。

大きな百貨店が並にあるホテルに泊まることにした。

チェックインの手続きをし部屋へと向かった

部屋に入ると、だだっ広くひとりで泊まるには、少々広すぎる・・・  
そんな感じがした。

「疲れたな・・・少し横になるか・・・」

ベットに横になり、頭痛が治まるのを待った・・・

高い天井・・・

片手を上げ、手を開いてみた・・・

「何を掴みたい・・・」

「何を成し遂げたい・・・」

自分へ自問自答した・・・

そんな事を考えているうちにいつの間にか眠りについた

どの位寝たのかは分らないが目が覚めた

「ここは・・・ああ、京都か・・・」

起き上がると頭痛は消えていた

「今回は夢を見なかったな・・・」

だが・・・

京介の目の前にはちいがいた

何も言わず、心配そうな顔で京介を見ていた・・・

京介が手を伸ばすとちいの姿は消えた・・・

「フラッシュバックか・・・分かってるんだが・・・」

「・・・」

外の景色を眺めた・・・

「久々に帰ってきたんだ少し歩いてみるか・・・」

ホテルをフラッと出た。

「アイツ・・・まだ店やってんかな・・・」

友人の店へを向かった

河原町を歩き、少し懐かしい感じがした

「まだ、やってんねんな」

友人の経営する居酒屋は今もあつた

エレベーターに乗り、「4階」を押した

「ガー」

扉が開いた

『いらつしゃいませー!』

若いスタッフが駆け寄り

『お一人ですか?であれば・・・カウンターでもいいですか?』

『ああ・・・』

カウンターに座ると、キッチンの奥からオーナーシェフが顔をだし  
てきた。

『あれ？京介はん？・・・ひっさしぶりやねえ！』

『憶えてくれたんか、久しぶりやな』

オーナシェフの名は「下村」

下村は懐かしさのあまり京介の目の前のカウンターまで出てきた。

『何、どうしたん？東京に出たって聞いてとったで・・・』

『まあな・・・でっ、誰から、聞いたん？』

『そら、祇園のおねーさま達に（笑）』

『祇園か・・・行ってみるか・・・気晴らしになるかも知れんからな・・・』

『なんや、なんか元気ないな、何かあったん？』

『少し疲れてんねん』

『そうか・・・ほんだらごゆっくり』

スタッフが注文を聞きにきた・・・

すると、再び下村が顔を出し・・・

『おい！京介さんの注文はわかつとる、聞かんでもいい・・・』

「あまり誰とも話をしたくなさそうだ・・・」

そう感じて下村は気をまわした・・・

下村はニッコリ笑い

『いつもの？で、いいやんな？（笑）』

『フツ（笑）・・・ああ・・・』

気の利く男、下村・・・

心から感謝をした。

店の外は鴨川が流れ祇園の艶やかなネオンが薄ら見えた・・・

京都に住んでいたころはよく遊んだ鴨川・・・

成人を迎え、闇の道に入り大きな金を掴み毎日のように祇園で宴を繰り返していた

そんな馬鹿な自分を思い返していた・・・

「既に・・・あの頃から狂っていたのかもしいないな・・・」



外の景色を眺め続けていた

・  
・  
・  
・  
・

『下村、お愛想』

『おおきに。何、もう帰りはるの?』

『どこか 行くか? (笑)』

『いいねー、ほな、ちょい待ってな』

店は、店長に任せると言い

下村は急いで外出の準備をした

「一人でいると頭がおかしくなりそうや・・・たまにいいよな・・・  
ちい・・・」

下村と祇園に向かう事にした・  
・

## 第一章 8

久しぶりの祇園、

昔、羽振りの良くて恐いものが何もなかった強い自分を思い出していた。

「金の無い奴は愚民」

何だかんだ言っても金の力が一番強い

「金で買えないものは何一つ無い」

金があれば人は寄ってくる

「女」も関わる「人間」すら違う・・・。

成り上がりの人間が大きな金を持つと誤解をする

いい例であったかのように自分を思い返していた。

だが、後悔はしていなかった。

それも経験、人は常に自分が主役でありたい・・・そう思うものだ・・・

『なあ下村・・・ワシがおらんようになってから京都はどうやった？』

『そやな・・・最初の数か月は羽振りのいい人間がいなくなっただって話題になっただで。』

『そやない・・・もっと本音の話があるやろ？』

『例えば？』

『逃げたとか追われてると？』

『・・・あつたな・・・でもなあ・・・皆が皆そう思ってた訳ちゃうで』

『（笑）・・・そうか？いいんだよ別にどう思われようと現に、ここに居るからな・・・俺は・・・』

『そやな・・・あと・・・あの子、大分堪えたみたいやっただで・・・』

『あの子？誰や？』

『ほんま冷たい男やのう（笑）覚えてないんか？ほら・・・』

京介が数年前まで京都に住んでいた時に付き合った女の事だった。

京介自体は特に特別な思い入れなどなかったが相手は相当惚れこんでいた。

『ああ・・・あいつか・・・どうせアイツも切欠は金や・・・』

『クールやなあ・・・相当好きみたいやっただで・・・そこ行こうか？今』

『好きにしる』

二人は、よく通っていた 『リンドクラブ』 に向かった・・・。

店に入ると ボーイが現れすぐにVIPルームへと通された。

『下村・・・変わってない場所もあるんやな・・・』

『ああ・・・』

ママが挨拶に現れた。

『あれ・・・京介はん、お久しぶりで御座います。下村はんよう連れてきてくれはったわ』

『へへ、ママ、今日は宴や頼むで！』

下村はとても楽しそうにしていた

ママは懐かしむような顔をし、喜んでいた

京介は遠い記憶を読み返した・・

以前みたいに強引で大威張りした自分を・・

そう演じるべきか・・

今のままでいるべきか・・

『京介はん、今、梨花ちゃん来はりますから』

『・・・』

『失礼しまーす!』

梨花がテーブルに着いた

『梨花ちゃん、懐かしいお客様よ』

『えっ・・そうな・・』

梨花は驚いた顔をした

『京介さん！！・・・心配したんだよ・・・急に居なくなるから・・・』

梨花は涙目だった

今なら気持ちは分かる・・・

その当時の自分には梨花はどうでもいい女だった・・・

『そうか・・・悪かったな』

『まあまあ、長い人生、生きてれば色々あるて！』

下村は場の空気を変えるように乾杯の音頭を取った

『カンパイ！！』

「チーン」

それぞれに話しをしながら数分が経った



『ねえ、何で急に居なくなったの？』

梨花は疑問を投げかけてきた

下村、ママも本当の理由を知らない・・・

敢えて聞いてこないのだろうと・・・思った

素直な梨花の質問に答える事にした

『おられんようになつたんや・・・』

『なんで？』

『危険やってん・・・関西にいたんでは、いつか殺される・・・そんな状況やってんや、それで逃げたんや』

「逃げた」・・・そんな言葉が京介の口から出るとは誰も思わなかった・・・

『逃げた・・・って・・・そんなん違いわ、それは守るためやるさ、  
なあ京介はん』

下村は慌てるように言ってきた

『いや・・・逃げたんや・・・』

『京介はんで逃げるんやったら、そりゃあワシかて逃げるがな!!  
なあ ママ』

『えっ・・・ええ、うちかて逃げますわ(笑)』

『もうええって(笑)あの時のワシちゃうねん・・・もう・・・今だから  
素直に言える事もあんねん、金も今はもうそれ程ある訳でもない。  
・なんの魅力もない男や』

『何を言いはるの？魅力的ですよ』

『金が無くてか?』

『お金なんて 関係ありません』

『金が無いとここにも来れん、そのうち忘れられ、色んな噂がたつ・そんなもんちゃうんか？人なんて』

そんな事を言う京介を見て梨花が言った

『違うと思う・最初は確かに羽振りがいい、若いのにお金持ち・そういうイメージで興味がわいた。でも、それは切欠でだんだんに見えてくる本質が心が動いた・・・』

『・・・梨花・・・そうかもしれない、でもな、それすら狙っていた行動なんや。ワシはそんな人間やってん・どんなに良い女でも金では動かない。そう言う女でも金を使い始めると簡単に落ちた・・・そう言う人間の弱き部分に付け込んだゲームをしていたんや・・・』

『そんな・・・私への気持は嘘やったん？』

『・・・ああ、偽りや・・・』

梨花は絶句した

『だがな・・・そう言う代償は必ず返ってくる・・・あの時は悪かった・・・今は幸せなんやろ?』

『・・・はい、大事にしてくれる彼氏がいます。』

『そうか ほんだら 過去なんて振り返るな、今を大事にな・・・』

下村が言った

『なんか・・・京介はん変わったな・・・調子狂うわ・・・でも、前より付き合いやすい感じやな』

『そうか・・・』

『京都にはいつまで?それともずっとおるんか?』

『明日には出る』

『関東か？』

『いや、探し物があつてな・・・そこに行けばきっと何か分かる・・・そして変わる・・・そう思っているんや・・・』

『どこに向かいはるの？』

『・・・夕陽・・・それを探しにな・・・』

『また、相変わらずキザね。そう言うところも直しに行くん？』  
笑)

ママが笑いながら言った

『・・・そやな・・・』  
笑)

o

## 第一章 9

『夕日・・・を探しに行くんや・・・』

梨花は聞いてきた。

『ああ、そうや・・・大事なものを失くしたでな・・・そこに行けば、きつと何か分かるような気がしてな・・・』

『そつか・・・見つかるといいね』

『・・・そやな・・・』

『もし・・・無駄足だったら？』

『無駄な事は無い、そこに・・・いや・・・何でもない』

『なに？気になるやん』

『ハハ・・・そやな。ごめん』

『梨花ちゃん。ほら 折角の再会なんだから 沢山 ごと馳走になり  
さうい(笑)』

ママが言った

『えっ・・・はい(笑)』

『・・・下村・・・この勘定はお前持ちや・・・(笑)』

『えー・・・かなわんわ・・・(笑)』

現在と過去、その人間しか分からない感情・・・

誰に理解される事もなく、理解されたくもない

特別な時間と後悔・・・。



全てが特別で・・・

全てが新鮮だったのかもしれない・・・。

その想いは、誰も知る由もなく、目の前の人間たちは再会と称し酒を飲み楽しくはしゃぐ

俺は皆に合わせはしゃいだフリをした。

「今が良ければいい・・・」

宴は続いた・・・

店の閉店を迎え、その後、朝までやっている店へと・・・

途中、下村は明日の仕事があると帰る事と言った

ママも下村と共にタクシーへ乗り込んだ。

『京介はん。また』

『おう、またな』

『連絡するさかい、ちゃんと電話受けてな』

『ああ、またな』

二人を乗せたタクシーが走り去った

梨花は変わり果てた京介が気になっていた

『しかし、ほんま久しぶりやね京介ちゃん』

『・・・そやな・・・』

『で・・・どうするの？今日、ホテルは取ってるん？』

『ああ、心配無い、お前も、もう帰れ・・・ワシは大丈夫や』

『でも・・・なんか見てられんわ・・・うちで良かったら、まだ付き合  
うし』

親切にされる事を嫌った・・・

『帰れ・・・目障りだ・・・』

『なんなん？元氣ないと思っただけなのに！』

梨花は京介の急変した態度に怒りだした

『もういい・・・一人にして欲しいんや・・・頼む、帰ってくれ梨花・・・』

梨花は何も言わずに、後ろを振り返る事もなくその場を立ち去った。

その後、ひとりでブラブラ歩き、気がつくと鴨川のほとりへいた。

辺りは明るくなり始め少し肌寒い感じがした。

橋の上まで歩き 川の流れをぼんやり 眺めた・

「ちい」

「どづしたの？京ちゃん？」

「どづもせんわ」

「昔の彼女に会って、少しセンチな気分？」

「馬鹿かお前、そんなん違つわ・・・」

「それなら元気だしなさいよ、京ちゃん」

「出せるか・・・お前がおらんに俺はこうして生きている・・・お前  
がいないのに空気を吸い、飯を食べ、伸びた爪を切る・・・お前がお  
らんに・・・」

ちいの姿は見えなくなった・・・

「ちい？・・・なんだ・・・もう・・・終わるか・・・」

頭痛がしてきた・・・

割れる様な痛み・・・

「薬はホテルか・・・仕方ないな・・・」

「敢えて、この痛みも心地がいい・・・」

「自分が責められている・・・そんな風にも感じられた」

「橋にうなだれながらタバコに火を点けた・・・」

「フゥー・・・」

目の前が真っ暗になり 頭がグラグラしてきた・

「少し飲みすぎた・・・か・・・」

「戻らないと・・・」

ホテルまでの距離は差ほどでは無かったが何時間も歩いた様な気がした。

部屋に着くと見えると思っていた、ちいの姿は無かった

頭痛は痛み増し、割れるような痛みが全身に伝わるような気がした

「く・・・薬・・・」

薬に手をかける瞬間に京介の意識は堕ちた・

深い闇へ・・・

「京介ちゃん（＊、＊）ダイジー」

「ちい、おいで」

「ダイジー　ダイジー」

胸に飛び込んでくる　ちい



「身に甘えてくる、ちいを抱きしめた・

「ちいちい 可愛いよ」

ちいも京介をきつく抱きしめてきた

どどん力が増し、痛いみを感じてきた・

「ダイジ・・嘘！ 大事 本体 わたし 違う！」

「うう・・うう・・」

涙を流す・・その表情に京介は悔しさと無念さを感じた

「それで気が済むのなら・・そのままそうしてくれ・・許してもら  
えるなんて思っではいない・・」

「いやああー 大事！大事！だいじいいいー」

o

## 第一章 完結

『ちいいー！』

ちいの名を叫びながら 目を覚ました・

床にうつ伏せに倒れ込みながら

手を伸ばしてる先には薬が散乱していた。

体は痛みで動かない・

「ベットが目の前にあるのに・・・こんなところか・・・」

夢かフラッシュバックなのか・・・よく分からない・

しばらく、そのまま床に寝ていた・

体の痛みも取れてきた・・・体を起こし薬を取ろうとした。

「許さない・・・」

振り返ると、ちいが薬を持っていた

「ちい、それを渡してくれ」

「いや・・・あなたも苦しめばいいのよ、もっと・・・もっと・・・苦しめばいいのよ」

体は金縛りにあったように動かなくなった。

ちいは京介の首に手をかけ絞めてきた・・・

「ち・・・ちめろ・・・」

「自分だけ・・・自分だけ・・・」

「・・・そ・・・そうか・・・そら・・・そう・・・思っよな・・・」

ちいの手は京介の首を尚も絞めつけた

「なんでえ・・・なんでえ・・・私は、私は・・・あんなにあんなに愛していたのに・・・」

「ちい・・・俺も そっちに連れていってくれ・・・もう 十分だ・・・」

ちいの姿は消えた・・・

京介はベットに寄りかかりながら 大粒の涙を流した

「ちい・ちい・ちい」

大きな声でみっともない位に大泣きをした・

散らばる薬を拾った

「はあ・・・」

水を取りに行く際に鏡の前を通った。

すると京介の首には、絞められたような痕が付いていた。

「これは・・・フラッシュバック・・・程度のものではないな・・・俺を恨んでいるんだな・・・」

薬を増やして飲んだ・・・

「ゴクッ・・・」

京介は考えていた。

ちいの本当の気持ち

本体と呼ばれた人格

自我と呼ばれた人格

サタンと呼ばれた人格

どれも愛せる・・・そう思っていた。

故に、ちいに殺されるなら本望だ・・・そう感じていた



鞆の中から、ちいの写真と服を取り出した

写真の中のちいはドレスを着て甘えていた

「・・・」

ちいの服を抱きしめて匂いをかいだ・・・

癒されるような、包まれるような気持ちになった・・・

「ちは・・・死んだんだ・・・」

「いや・・・俺が殺したんだ・・・」

かけがえの無いもの・・・

失ってからじゃないと気付けなかった愚かさ

今頃、気づく愛の深さ

「だいじ・・・か・・・」

「いつも そう言ってたな・・・」

一点を見つめながら呟いた。

そのままいつの間にか眠りに落ちた

夢の中・・・

京介は海辺にいた・・・

「これがあの夕焼けだよ・・・」

「ああ・・・これが・・・これが・・・」

誰かと話をしていた

それはちいでは無く別の人間だった・・・

顔は見えず声だけが聞こえ目の前には

写真と同じような景色があった。

「これからだね・・・」

「あぁ・・・」

とても暖かく優しい世界のような気がした

何かもが穏やかで時間の流れがとてもゆっくりで

誰にも邪魔することの出来ない永遠の時間にも感じた・・・

o

アコウクロ 第二章 1

暖かい光に包まれながら自然に目が覚めた

夢の中を思い出していた

「あれはいつたい誰だったんだろう・・・」

懐かしい香りがした様な気がした・・・

ちいでは無いそれだけは分かっていた。

毎日繰り返される様なフラッシュバック・幻覚 どれが夢でどれが現実なのか・・・

頭の中で混乱しそうだった。

ちいの服を抱いたまま暫くの間、動かずに顔を服に押し当てた

まるでそれは 母親に抱かれるような安堵にも似た安心感があった。

「母性の強い子だったな・・・ちい・・・」

夢で見た夕焼け、「これからだね」の意味・・・

何かこれからに關係するような気がしてやまなかった。

シャワーを浴び出かけようとした時、首の痣を見た。

あの時にはくつきり出ていた痣が消えてなくなっていた。

「やはり 夢だったのだろうか・・・」

現実とフラッシュバックの境界線が崩れ始めていた

どれが幻想でどれが現実なのか・・・

シャワーを浴び終え出発の準備をした。

京都駅に向かう途中、昼の賑わう街並みをのんびり眺めながら 歩いた。



しばらく歩くと以前住んでいたマンションが見えてきた。

よく朝まで飲み何度もフラフラになりながら帰宅した。

そんな事も懐かしく感じた。

「たまには故郷もいいもんだな・・・」

駅に着き、新幹線のチケットを購入した。

「そう言えば 梨花ともよくここには来たな・・・」

ちいの事ばかり考えていた、京介は自分の過去に付いて少し思い出していた。

故郷と言うのはそう言うものなのか・・・

住んでいる時は何も感じなかった。

こんなつまらない街は早く飛び出してもっと違う場所へ・・・

生き急いでいたかの様に感じた。

ホームに向かう時 声を掛けるものがいた

『京介ちゃん！』

声をする方を振り向いた

そこには梨花がいた。

『なんや？お前』

『偶然やし（笑）』

梨花は京介が今日旅立つと聞いていたので待っていた。

『じね』

『何？』

梨花はあるものを手渡した

それは御守りだった。

『なんやねん・・・こんないらんわ』

『そんな言わんと持っていき、誰かの為に行くんやろっ。』

『・・・ワシ、そんなん言つてたか？』

『あと、これ・・・』

京介は夕陽の写真を出す時に何枚か持ち歩いてきた、ちいの写真を落としていた。

『なんでお前が？』

『昨日、店で・・・』

『そうか・・・ありがとな』

『大事な人？』

梨花はにこやかに聞いてきた。

『ああ・・・愛しているんだ・・・誰よりも、誰よりも・・・』

『ム力つく（笑）うちの時もそんなん言ってくれたら良かったのに・・・』

『ああ・・・そうやな・・・ごめん・・・』

『冗談やん（笑）』

『もう・・・いな・・・』

『えっ?』

『もう……この子はいないんや』

『いないって？』

『死んだんや……』

『そうだったの……ごめん……』

『ええねん……ワシが殺したようなもんや、だからな……だからこそ……行かな……あかんねん』

『そつなんや……それやったらお守り、意味あるやん無事に着かんとね』

『そやな……おおきに』

『それとね 報告!』

『なに?』

『うち・・・子供出来てん。幸せなる』

梨花は笑顔で京介を見送った

京介は一度振り返り手を振った

梨花もそれに答えるように大きく手を振っていた

新幹線に乗り夕陽の写真を見た

「どこかの景色なんやろな・・・」

「・・・海・・・海かもしれんな・・・」

夢で見た浜辺を思い出した。

写真の裏を見てみた

「2007 8・7」 と書いてあった・・・

「・・・と」名前の部分が薄くなり読み取れなかった。



「裏にこんなものが書いていたのか・・・」

「ちい・・・必ず行くからな・・・」

。

## 第二章 2

京介は新幹線の中、写真を見ていた。

日付と名前・・これが何か意味があるような気がしていた。

ちいと出会う前の過去。

自分の知りえる、ちいは昔とはかけ離れていたであろう・

コントロールの為、本来の性格に大きな負担を掛け

消し去ろうとした制でちいの本当の本質を完全に知ってるとは思っていなかった。

部屋に貼られていた写真はほぼ京介の写真だった。

その中でこの夕陽の写真が一枚。

知り合ってから貼ったのであれば本体の人格が貼ったとしか考えれなかった。

自我・本体と呼ばれる人格の共通点は京介

それ以外・・・

「ちいは星が好きだった・・・」

何か特別な思い入れがあるのかもしれない・・・

それはちいの本質・・・が行動したのだろう・・・

ちいの事をあまり知らない自分を悔やんだ。

数ヶ月前・・・

『京介君、紹介するわ、うちの秘書の綾瀬 千佳さんよ。』

「？ M I O」の社長の「竹内 美央」に紹介された

『初めまして。(＊、＊)よろしくお願いします。』

「なんか・恐そうな人お・嫌だなあ・」

ちいは京介の第一印象をそう思っていた。

日に日に、マメに営業に来る京介に対し

見た目と違い紳士的な対話に興味が湧いてきた。

純粹に 「この人って 魅力的だ・」そう感じていた。

京介は美央社長と仲が良い自分なんて相手にされるはずがない。

そう思っていた。

そんな中、京介の策略にはまり言いなりとなってしまうた。

最初は屈辱的な事を餌に脅迫をされ恐れだけだった。

再三に渡る、屈辱的行為の快樂の罠の深みにはまったのだった。

尚も必要以上のコントロールを虐げられ、薬の投与、催眠

傀儡製造の中でも最も危険な手段を取られてたのだ。

消えていく 自分・・

言うことを利くために作られた新しい人格

どんどん自分の心が奥底へ沈められた

完全に消されなかったのは記憶が欲しいゆえ

自我と呼ばれる記憶が本質を残した。

自我として動いている時の自分は眠りに着く様な感覚だった。

昼の仕事中も 一日の流れをDLダウンロードされ

一度、教えたらそのまま 奥底へ・

そんな感じにも似た感覚があった。

採算に渡る投薬により薬の効き目も徐々に薄れ始めた・

だが京介はその事に気づいたのは随分後の事になってからだった。

「ねえ 私 それじゃ京介さん 喜ばないよ」

「だいいじ。どひつて」

「ほら、京介さん、いつも朝、起きたら コーヒー飲むでしょう？」

「うん」

「ブラック。ちいは飲めないけど、朝は苦いのいいみたいだよ」

「苦い 嫌い」

「うん。でも、京介さんは？」

「苦い 好き(\*、\*、\*)」

「うん。じゃ コーヒー作るうか」

「うん 教えて」

「うん じゃあ・・・」

最初・・・自我と本体はとても上手くやっていた・・・。



o

## 第二章 3

ちいは自我との共通点に気がついていた。

京介への想い。

本体は何故こんな事になったのかは催眠と薬のせいで記憶が薄れていた。

微かにあるの京介と出会う前の記憶・

それと自分の中にあるもう一人の自分

ちいはその事に対しても不安感があった。

だが京介と居るときは何か不思議な安堵があった。

自我のちいはキッチンのあちらこちらを水びだしにしながらも

一生懸命コーヒを作っていた。

「出来ない・・・ちいが やって・・・」

「頑張つて！出来る！大丈夫。ほら あと冷蔵庫に入れて」

「だいじい・・・」

泣きそうになりながらも、本体と一緒に何かをする事が好きだった。

「できた。」

「良かったね。」

自我はひとつの事に夢中になるタイプで成し遂げると心の中にひっこんでしまい

子供の様に眠るようだった。

その後、本体が自我の汚したキッチンを掃除したり部屋を掃除したりしていた。

そして京介の帰りを待つ。

退社した後のちいの生活はこんな感じだった。

本体のちいは成人的な部分も多かったが京介への依存的な想いはどんどん深まっていた

その中で自分はいつの日か・・

いや、いつまでも京介とともに暮らし、そして死にたい・・・そう願うようにもなっていた。

京介に尽くす本体のちい。

甘えてばかりの自我のちい。

京介自体も満更でなく悪意に満ちた気持ちが少しづつ浄化されていた。

子供の様なちいはいは可愛くて仕方がない

自分に尽くすちいはいは愛しくて仕方がない

そんな気持ちであった。

そんな中、薬に徐々に蝕まれていったのだ・・・。

本体は自我の独占欲がどんどん強くなっていくのを感じていた。

最初は共存で共に暮らせれば上手いく・・・

そう思ったが体の限界も感じていたのだろう

自我も本体には時間を与えたくない・・・

そして少しずつ成長をしていた。

その中でも「サタン」の人格が本体に対し大きなダメージを与えていた。

新たに加えられた「自我」・「サタン」この二人の人格に比べれば  
本体の力はひ弱なものであった。

故に「呪文」が本体に必要であった。

呪文さえあれば、本体に近いニュートラルでいられる。

二人を抑えても出てくれる。

その事が分かってしまった・・・

その為にはあの薬・・・そう思い

本体のちいは破滅の道へと向かったのだった・・・

・  
・  
・  
・

「カリーン」

二人は カフェにいた。

「窓際がイイ。」

「そうか そうするか（\*、\*）」

座ると直ぐにマスターが注文に訪れた

「俺はブラック、アイスで・・・ちいは・・・」

「私も・・・ブラックで・・・」

「かしこまりました・・・。」

「なんだ・・・苦いぞ いいのか？」

『同じの・・・飲みたい・・・。京ちゃんに・・・近くなりたい・・・』

『アホやなあ・・・苦くても我慢して飲みや(笑)』

『うん(\*´、\*´)同じ 大事。』

直ぐにコーヒーは運ばれた

『飲んでみ(笑)』

「ゴク・・・ゴク・・・」

『にがい(´>`)<(´>`)...だいじいー』

『(´)笑(´)』

苦いコーヒーに、時折渋い顔をしながら舌を出してみせる千佳・・・



幼い子供が初めてコーヒーを我慢して飲むようにも見えた。

ちいは少しでも京介を近くに感じ

同じもので同じに感じたい・・・そう願っていた。

## 第二章 4

ちいは部屋に一人でいた。

本体と呼ばれる人格でいた。

京介の事ばかり考え何も手が付かない状況だった

「そつだ・・・」

ちいは部屋で、じやれながら京介の写真を撮ったことを思い出した

「焼き増ししたら怒るかな・・・でも・・・寂しすぎる・・・」

ちいはカメラ屋に向かった。

保存してあるSDカードからプリンターに繋ぎ数枚をプリントアウトしてもらった。

『「・・・これ、引き伸ばしてもらえますか・・・」』

『ええ、良いですよ少しお待ちください。』

店主はニコニコしながら快く引き受けた。

その間、ちいはデジカメの画像を何度も何度も眺めていた。

数分後・・・

店主が話しかけた

『お待たせいたしました。彼氏さんですか？とても仲がよろしいですね。』

数枚の写真を渡してきた

『はい大事な彼なんです（＊、＊、＊）』

他人から見ても仲が良い

皆に認めてもらうようで嬉しかった・・・

ちいは店主が聞きもしないのに夢中になり京介の話をし始めた。

店主は店が暇であったためちいの話に付き合っただけ。

『じゃあ、この写真は部屋に貼るんですね？』

『はい。( \*、 \* )』

『じゃあ これ差し上げますよ』

大きなファイルを渡してきた。

『これを使えば写真はそのままの状態で飾れるじゃないかな(笑)』

『( \*、 \* ) わあー 大きい ありがとうございます』

ちいは写真を大事そうに抱きしめながら部屋へ向かった。

部屋に着き、写真を並べ眺めていた。

カメラをしまおうと引き出しを開けた

そこに昔、撮った写真が数枚あった。

「あつ・・・なんか懐かしい・・・」

ちいの心を揺さぶるように過去の記憶が少し頭の中に流れてきた

誰かと居る・・・

会話が聞こえない・・・

女の子だ・・・

「ねえ 行こう」

夕陽が見えていた・・・

「必ず、ここに来るんだ・・・」

「うん・・・私も・・・」

・・・

「ハッ・・・なんか思い出せない・・・でも 特別な場所・・・」

そう呟き、京介の写真と一緒に夕陽の写真を壁に貼った

o



## 第二章 5

「特別な場所……」

誰かと行っていた場所……

「必ず ここに来る……」

「私も……」

この言葉が頭に残った。

「あつ…… そつか…… あの場所か……」

京介と知り合う前によく行った場所が思い浮かんだ。

「場所は分かったけど……なんの約束だったんだろう……」

夕陽の写真をしばらく眺めた。

何故か懐かしい気持ちになっていた。

「また・・・見たいな・・・東京ではこんな夕陽、見たことないな・・・」

ちいの携帯が鳴った・・・

「逢いたくて・・・逢いたくてあなたに・・・すぐに・・・」

(千佳着信音 早春物語)

「あつ！京ちゃんかな(\*´、\*´)?」

携帯にはメモリーされていた番号と名前が表示された

「誰?・・・わかんない・・・」

恐る恐る携帯に出た・・・

「はい・・・」

「あっ・・・ちいちゃん？どうしたの全然連絡が取れなくて心配したんだよ！」

電話の先の人間はいきなり大きな声で言ってきた

「だれ・・・？あなたはだあれ？」

「ちよつと ちいちゃん 大丈夫？」

「だれよ・・・だれなの・・・怖い・・・ちい こわい・・・」

「え？・・・え・・・？ちよつと ち・・・」

話の途中で電話を切った・・・

携帯の電源をおとした

「ちいの事・・・知ってる・・・誰？・・・分からない・・・」

考え込んでいると自我が目覚めてきた・・・

「あつ・・・交代か・・・」

そう呟くと自我の意識が話しかけてきた

「いまの電話」

「あつ・・・聞いてた？・・・分からないの誰か・・・」

「・・・身内の人だと思うよ・・・」

自我が答えを出した。

「えっ？分かるの？」

「ちいの記憶、全部ちいが持つてる・・・だから分かる・・・」

「・・・あああ・・・」

自分の記憶は自分で思い出せるのはほんの僅か・・・

自我は子供じみてるが記憶は制御されている事を示しつけられた。

「だいじ・・・」

「うん・・・もう・・・私、眠りたい・・・あとはお願いね・・・」

「まって」

「お願い・・・一人になりたいの・・・」

本体は心の奥底へ沈んだ。

自我は悪気は無いが本体の心までは読みきれぬほどでは無かった。

京介の帰りを待つ間

壁に貼られた写真に大喜びし、部屋の中をぐるぐる回りながら帰りを待った。

京介はそれから、直ぐに帰宅してきた。

『ただいま』

『\*、\* だいじい!』

『おお・・・自我か(笑) おいで』

自我のちいは飛びつくように胸へ飛び込み甘えてきた

『いつもはこの時間帯は本体だろ?今日はどうした?』

『本体、眠い、寂しそうだった』

『どうしてだ?見てたんだろう言うてごらん』

『電話』

『電話?』

京介はちいの携帯を見た。

メモリーからの着信があった。

『ちいと同じ苗字だな・・・身内か？』

『うん』

『分からなかったんだな・・・誰か・・・』

『うん』

『そうか・・・可愛そうな事をしたな・・・』

『大丈夫！眠いって言った』

『・・・そうか・・・悪いな・・・』

『ん？』

『我・・・最強なり・・・』

ちいの体は反応した・・・

「ビクン・・・」

『ちい・・・』

『あっ・・・あああ・・・京ちゃ・・・ん・・・』

『ただいま』

ちいは少し哀しげな表情ではあったが呼び出された事が凄く嬉しく感じていた・・・



o

第二章 6

『ちい。』

『京ちゃん……。』

『ただいま)\*、\*、\*(』

『お帰りなさい)\*、\*、\*(あの・・もう一人の私は?』

『少し・・寝てもらったよ・・。』

『そう・・。』

多く語らないようにした・・

京介によって自分の記憶が消されたの事実。

だが、その事を問い詰めることはしなかった。

寂しげな表情をしながらも元気に振舞う。千佳がいた。

『京ちゃん。ご飯・・・まだだよ？』\*、\*、\*

『ああ』

千佳は急いで食事を作り始めた。

料理が出来、運びながら千佳は聞いた。

『京ちゃん、何で呼び出したの？ご飯？』(笑)

『聞きたい事と話があったからや・・・』

『そう・・・』

悟られている感じしながら、千佳は苦笑いをした。

『取敢えず飯にするか』\*、\*、\* (ちい』

『待つて、もう一人の私、おなか空いてるみたいだから食事の間は・  
』

『分かった』

ちいは目を瞑ると上を見上げた

「スーッ」という感じに入れ替わった・・・

『（＊、＊）ダイジ！』

『ちい、お腹空いてるんやろ？作ってくれたで・・・』

『（＊、＊）わーい！おなか空いたの！ちい』

『召し上がれ（笑）』

本体の千佳・・・

自我のちいのバランスはとても良かった。

お互いに協力してるかのように見えた

子供の様に、こぼしながらも美味しそうに食べる千佳を眺めていた。

『（\*´、\*）オイシィー』

『そうか（笑）』

『京ちゃんも食べる！ちい食べさせる！』

スプーンで料理を口に運ぶ 千佳・

『分かったよ（笑）』

パクパクと食事をする千佳を見ながらも考えた。

こんなに子供めいた所があるのに制御はキツチリしている……

これは演じているのか・・・？

自分が傀儡化してるのではないか・・・？

食事を終わると千佳は甘えてきた。

食事の後片付けを京介がして座ると、千佳は膝に頭を乗せてきた

頭を撫でると自我は言った・・・

『呪文』

『呪文？』

『本体待ってる・・・入れ替わりあっちから簡単には出来ない、とても苦しい』

『そうか・・・優しいんだな・・・ちい・・・』

『（＊、＊）ダイジー』

そのまま目を瞑り呪文を待った

『我・・・最強なり・・・』

「ビクン・・・」

本体のちいは目を開けた

だが動く事無く京介の膝にしがみ付き涙を流していた・・・

第二章 7

京介の膝で涙を流した・・・

何も言わず、何も聞かず・・・

そのまま 頭を撫でた・・・

千佳は声を殺し泣いているのを見られないように  
膝のした方に顔を向けた

『ちい・・・。』

『はい。』

ちいは京介に抱えられるように起こされた。

『・・・ほら・・・』

ハンカチを渡した



『えへへ（＊、＊）（泣）．．あれ．．おかしい．．泣いてないのに．．泣いてな．．』

『ちい．．星でも 見に行こうか．．』

『うん』

二人は星の見える公園、希望ヶ丘に向かった

手を繋いだ．．

二人は無言で空をしばらく眺めた

京介は千佳の横顔を微かに見た

空を見上げる千佳の頬には涙の痕があった

『ちい．．』

『うん？．．なあに京ちゃん．．』

『色々と・・・ごめんな・・・』

ちいは京介の胸にしがみ付いた

『謝らないで・・・謝らないで・・・』

京介には抱きしめる事しか出来なかった・・・

『私には京ちゃんしか無いの・・・だから謝らないで・・・私は今の私が私なの・・・』

胸を締め付けられる想い

取り返しの付かない事をしてしまった・・・

一つの考えから千佳の人生を狂わしてしまった・・・

自分と知り合わなければ、それなりの幸せもあったらろう・・・

自分の身勝手さを痛感した・・・

『ちい・・・携帯の件・・・』

『ああ・・・悪戯電話が多いの最近・・・（\*´、\*）大丈夫だよ京  
ちゃ・・・ん・・・』

『だって・・・メモリーに・・・』

『悪戯電話が多いから分かるように名前を入れたの・・・自分で入れたの・・・信じて京ちゃん 本当なの（泣）・・・』

『・・・』

京介は空を見上げて涙を堪えた・・・

『そうか・・・その方が分かりやすいもんな・・・ちい・・・』

『・・・う・・・ん・・・』

あえて聞かず・・・

あえて問わず・・・

これが二人にとって一番優しい方法だと思った・・・

『ちい・・・俺で良かったら・・・一生一緒に居てくれないか・・・』

『京ちやあああん・・・』

千佳はしがみ付くように抱きついてきた

『誕生日の日、デートしような・・・』

『はい（\*、\*）』

この時間が永遠であればいいのに・・・

夢なら覚めないで欲しい・・・

ここで時間が止まればいいのに・・・

千佳はそう願った・・・



o

## 第二章 8

京介はちいの言葉にしない気持ちがあった。

その分、一生、千佳の為に残りの時間を使おうと思っていた。

千佳の健気な想いは幸せを掴もうとしていた。。

・  
・  
・  
・  
・  
新幹線・・・。

京介は京都からの新幹線の中、外の景色を眺めながら今まで千佳と過ごした日々を思い返してた。

このまま、目的地「九州」まで行き何か本当に分かるのだろうか・

それで、ちいと約束を果たすことが出来る・・・そう思い込んでい  
るだけではないか・



色々考えた・・・。

連日のようにあるフラッシュバックが心の迷いを誘っていた

幻想なのか・・・

実態的な霊なのか・・・

うすつら首に残った痣・・・

これは何を物語っているのか・・・

もしや・・・行って欲しくないのではないか・・・

いや、優しいちいも存在していた・・・

頭の中が混乱していた

多数入り込んだ　ちいの人格から来るものなのか？

どれが本音なのだろうか・・・

再び、頭痛が激しくなってきた。

最初は我慢をしていたが目の前がグルグル回り眩暈がしてきた・

「ダメだ・・・薬を・・・」

そこへカートのお店が現れた

京介は水を購入しようとした

薬を出し

小銭を用意した・・・

売店の人間に声を掛けようと立ち上がると

何か生暖かいものを唇に感じた・・・

「なんや?」

顔に手を当てると鼻血がダラダラと流れてきていた・

「うわっ・・・どうしたんや・・・」

立ち上がり固まっている京介を売店の人間が気づきカートを押しながら戻ってきた。

『お呼びですか?・・・あっ・・・ちょっと待ってください!』

急いでポケットティッシュを数枚だし渡してきた

『ああ・・・すみませ・・・えっ・・・』

京介の目には売店の女性が千佳に見えた・

『ちい・・・』

『えっ？何ですか？』

『ちいだろっ？』

『いえ 違いますけど』

売店の女性は 千佳 とは似ても似つかない女性だった

すると、ハンマーが何か殴られたような衝撃が頭に走った・・・

『・・・』

頭を抑え、白目を向き倒れこんだ・

## 第二章 9

車内は騒がしくなっているようだった・

耳からは音は入ってくるがどうにも動けない・

意識も朦朧とし深い眠りについてしまった・

「なあ・・ちい・」

二人は外を歩いていた・

「なあに？」

「あの夕陽の写真なんだけど・」

「夕陽？」

「ああ 壁に貼っていたらろう？」

「ああ・・・うん・・・」

「あれは何処なんだ？」

「・・・うん・・・京ちゃんの知らないところだよ・・・」

「教えてくれないか・・・」

「・・・うん・・・いいよ、あそこはね・・・約束の場所なんだ・・・」

「約束？誰かと 約束してたのか？」

「うん」

「俺は・・・そこには行かない方がいいのか？」

「ううん・・・いいよ・・・京ちゃん」

「あそこはね・・・」

急に真っ暗な世界に落とし込まれた・・・

「どっつ?・・・闇に陥る気分は・・・フッフ」

そこにはサタンの人格のちいがいた・・・



「ちい・・・」

「お前のせいで私は一つの体に閉じ込められ・・・体が破滅的な道へ進んだ・・・」

「ああ・・・その通りだ・・・」

「本体を消す・・・自我と私で体を守る・・・」

「何故、本体なんだ」

「お前のせいだろ・・・キャハハハ」

「頼む、本体は残してくれ」

「自分勝手だね・・・お前も苦しめばいいんだよ」

「ちい！ちい！ 我 最強なり 我 最強なり」

京介は呪文を何度も唱えた

「今更・・・そんなの効かないよ・・・京ちゃん・・・ニヤリ」

憎悪に満ちた怒りの千佳が首を絞めてきた

京介はちいの腕を掴み体を押した

「辞める！」

「んんん」

ちいは壁にぶつかった

「きゃん・痛い・京ちゃん・ごめんね・私・ごめんね・」

本体が出来ているように見えた

「ちい・ごめん」

倒れる千佳を起こそうとしたとき・

「甘いんだよ・」

ちいは京介の腹に刃物を刺した・

「ブス・ズズズ・」

刃物はゆっくりと押し込まれていった

「はう・・・ちいい・・・」

涙を流しながら京介に刃物を突き刺す・・・千佳

顔が霞んで見えた・・・

「だ・・・い・・・じ・・・」

『うわあああー』

大声を出しながら起き上がるとそこは見知らぬベッドの上だった

辺りを見渡すと、どうやらどこかの病院に居る様であった・・・

「そうか・・・新幹線の中で・・・」

点滴がさされ、パジャマの様なものを着せられていた

京介は点滴を抜きベットの脇にあった服を着て病室を出た・・・

「こんなところで道草なんて食ってられないんや・・・」

早く、ちいの約束の場所を目指したかったのと・・・

院内でジャニスから貰っている薬に付いて問い詰められるのを恐れていた・・・

違法処方薬・・・

傀儡作りに使う薬とは違うが、一般社会では禁じられている薬剤を含んでいたからだった・・・

いかにも見舞いに訪れた客の様に振る舞い

さりげなく歩きナースステーションをクリアした。

病院を抜け外に出た・・・

時計を見ると新幹線に乗った時間から6時間以上経っているようだった・・・

「ここは一体 何処なんだ・・・」

タクシーに乗り、場所を確認することにした

『すいません駅に・・・』

『駅ね・・・新大阪でいいですか？』

『新大阪・・・なんだ・・・乗ってすぐやったんか・・・いや梅田に・・・』

『梅田ね、はいよ』

京介は昔の友人のところで少し休ませて貰おうと考え梅田に向かった。

「プルルル・・・」

『はい』

『久しぶり・・・ワシや』

『京介さん？』

『今日 時間あるか？』

『大阪？』

『ああ・・・少し休ませて欲しいんや・・・』

『う・・・ん・・・いいよ・・・じゃ来て』

『悪いな・・・』



第二章 10

京介は大阪、梅田を目指した。

タクシートの運転手は距離が稼げると思い上機嫌で走っていた。

『お客さん 大阪の人じゃないでしょう?』

『・・・ああ・・・京都や』

『ずっとかい?』

『いや・・・関東に仕事で数年・・・』

『大変やね・・・大阪は良い街ゆっくりしてってくださいな(笑)』

『・・・ああ・・・』

数十分走るとタクシーは梅田に着いた

京介は金を渡し

『釣りはタバコ代にでも・・・』

『悪いね、にいちゃんまた乗ってな（笑）』

タクシーを降りた

京介は携帯を取り出し連絡を取った。

『今、梅田に着いた』

『こっちに来れる？』

『少し飲みたい気分なんや・・・出て来れないか？』

『・・・うん。いいよ 待ってて・・・』

京介は少し目眩がして歩くのが辛かったのが本音だった。

歩道のベンチに座りタバコを吸いながら空を見上げた。

「今日は・・・星は 見えへんねんな・・・」

少し頭痛がしてきた・・・下を俯いていると相手は現れた・・・

『しはらく・・・』

『ん・・・お・・・悪いな・・・』ひとみ「ひとみ」

「佐々木 ひとみ」が目の前に居た

『うづん・・・何かあったん』

『なんも無いわ・・・』

『相変わらず・・・嘘が下手ね』

『フツ・・・お前だけや・・・そんなん言うのは・・・』

京介は立ち上がった。

『晩ご飯は？』

『まだや・・・少し気持ち悪くてな食べたないねん』

『もう、休んだら？』

『・・・ええねん・・・飲みたいねん』

京介とひとみは十数年前に付き合いがあった

京介のよき理解者であった

二人は軽く食事を済ませると、京介は薬をだして飲んだ。

『なんの薬？』

『・・・風邪薬や。』

『そう・・・顔色悪いよ』

『そうか・・・？まあええやないか、ほら行くつや・・・』

ショットバーに入り、酒を飲み始めた

『関西に戻ってきたの？』

『いや・・・違う』

『仕事？』

『仕事は辞めたんや、今は無職や・・・』

『・・・』

少しの沈黙があった。

『京都には？』

『寄ってきた・・・』

『それで私に会いに？』

『いや・・・そういう訳では無かったんだが・・・新幹線の中で具合が悪くなってな・・・それで大阪で降りたんや』

『どこまでいくの？』

『九州を目指している・・・とは言っても詳しい・・・目的地は分からない・・・だが、行かなくちゃならないんだ・・・』

『・・・そっか・・・じゃあ体をちゃんと万全にして向かわないとね』

『そやな・・悪いな（笑）』

『ううん、いいの久しぶりだし』

『・・・』

『・・・』

『何も聞かないのか？』

『何を？』

『どうして九州とか・・・』

『言いたくないんでしょ（笑）』

『まあな・・・（笑）』

京介とひとみは数時間バーで酒を飲んだ

『辛そうちゃん・・・もう戻るっ』

『せやな・・・悪いな・・・』

ひとみの部屋へと向かうことにした。



o

第二章 11

ひとみの部屋に着いた

部屋に着くと京介は部屋の中をぐるっと眺めた

『なあに（笑）懐かしい？』

『・・・ああ・・・ここも変わりの無い場所なのかもな・・・』

『少しくらいは変わったわよ、部屋も・・・私も・・・』

『そうか・・・』

『休んだら？』

『なんかな・・・ここに着たら少し落ち着いてきたわ・・・少し話をし  
ようや』

ひとみはニコツと笑い、冷蔵庫からお茶を出した。

『・・・聞いてもらいたい話があるんでしょっ？』

『・・・今は・・・まだ話したくないんや』

『そう・・・なら聞かない(笑)』

二人は他愛も無い話をした・・・

『なあ・・・俺がお前の前からいなくなった時・・・辛かったか・・・』

『うん・・・死にたいくらいに辛かった・・・でも、その反面・・・ああ・・・  
やっぱりいっっちゃうんだ・・・そう思ったかな・・・』

『何故 止めなかった・・・』

『言っただけ聞くような人じゃなかったわ・・・あなたは・・・』

『そうか・・・確かに当時の俺はそうだったかもしれないな・・・』

『もう、いいじゃない(笑)終わったのよ私達は・・・そして・・・もう始まらないの・・・』

『ああ・・・』

『あのな・・・俺は人を殺してもうたんや・・・とても・・・大事な大事な人を・・・』

ひとみは言葉を返せなかった・・・

何かに苦しんでいる・・・そう感じた

『・・・』

『俺は関東に出てからもしがらみから抜けきれず取り込まれた・・・だが、そう世界の居心地がとても良くてそこに留まった・・・そんな中、一つのプランを動かしているうちに・・・』

『・・・そう・・・』

『事件になったの？』

『いや・・・事件にはなっていない・・・やらなければ成らない事があるんや・・・それを終えたら報いは受けるつもりや・・・』

『まだ・・・そんな事してたっただね・・・』

『お前は俺と離れて正解やったな、一緒に居たらお前が犠牲者だったかもしれない・・・』

『きつと、同じ事になったかもね』

『俺は・・・そいつの事がとても大事で・・・愛していた・・・』

『写真は無いの？』

『ある・・・』

ひとみにウエディングドレスの千佳の写真を差し出した

『・・・羨ましい・・・とても幸せそう・・・』

『ああ・・・』

『こんなに幸せそうなのに・・・なんで・・・』

京介は答えなかった・・・

言葉にするのには難しい気持ち

いきさつ・・・

胸が締め付けられるようになり苦しかった・・・

『色々あるんだね・・・いいよ、無理に言わなくても』

『殺したくなかったんや・・・ほんまに殺したくなかったんや・・・』

大粒の涙を流しながら声を震わせた

ひとみは京介の表情を見て、色々考えた・

『彼女が・・・望んだの・・・？』

『ああ・・・俺が悪いんや・・・全て・・・』

『きつと・・・彼女も辛かったのよ・・・あなた以上にね・・・』

『ちいいい・・・ちいいい・・・ちいいいいい』

『京介ちゃん・・・あなたは死んだらダメよ・・・絶対に・・・絶対に・・・』

『俺なんて 生きる価値なんてないんや・・・毎日見えるんや・・・ち  
いが俺を恨んでいる・・・死ねばいいと思っている・・・』

『違う・・・きつと 違うよ・・・』

『お前に何が分かるんや！！・・・ちいはもつどこにもいない  
や・・・』

『居るわ！京介ちゃんの中にいるでしょう！だから苦しいんじゃないな  
い・・・だから生きなきゃダメなんじゃない』



『ちいいい・・・許してくれ・・・ちい・・・』

ひとみは京介を抱きしめた

震えながら悲しみのどん底に落ち込む強い男を・・・

『あなたは諸刃の剣ね・・・弱い自分に気づいちゃったんだね・・・』

京介はひとみの胸の中で泣いた

『私が京介ちゃんに出来ることは、こんな事しかないけど・・・最後まで頑張って・・・ねっ。』

『ちいい・・・』

京介はそのまま眠りに付いてしまった

ひとみは京介を横にさせタオルケットを掛けた

テーブルに置かれた写真を手に取った

ウエディングドレスの写真

二人で映る写真

彼女だけの写真

夕陽の写真

写真の中の彼女はとても甘えん坊で幸せそうだった

京介もそれを満足そうにしている・・

「私といたときにはこんな笑顔見たこと無かったな・・」

夕陽の写真を手にした

「これは・・アコウクロウ・・ここに行きたいのかな・・」

京介の顔を見た

ひとみは写真の意味に付いて少し考えた・・

「なんで・・この写真なんだろう・・」

窓の外を見ると外は朝日がうつすらとし、一日の始まりを知らせようとしていた・・

ひとみは京介の隣に寄り添い

頭を撫でながら眠りついた・・

第二章 12

いつの間にか寝てしまった京介……

懐かしい香の中、目を覚ました。

ひとみは京介の頭を自分の胸に抱えるように抱いて寝ていた

一瞬、自分がどこにいるのかわからなかった。

「ちい……？……いや 違う……」

手をそっとよけた。

京介は起き上がり、窓を開けてタバコを吸った……

「そつや……病院を抜け出して、ひとみとおつたんや……」

振り返るとテーブルには写真が一枚づつ並べてあった

「・・・」

ひとみは、窓の外の空気を感じ目を覚ました

『京介ちゃん・・・起きたの・・・』

『ああ・・・』

『今、コーヒー入れるわ』

『ああ・・・』

『ブラックでしょう（笑）？』

京介は少し微笑み写真を眺めた

ひとみはブラックコーヒーを二つ持ってきた

『京介ちゃん・・・何か訳ありそうね・・・』

『・・・罪滅ぼし・・・いや・・・戒め・・・いや・・・誤魔化した  
いのかもしれん・・・』

『・・・そう・・・』

『なあ、ひとみ・・・』

『何？』

『この子の名前は、千佳って言うんや・・・関東で、この子の人生を  
めちゃくちやにしてしまったんや・・・』

『・・・』

『でもな・・・気づいてしまったんや・・・』

『本当の気持ち？』

『・・・そうかも知れん・・・ちいのささやかな願いを最後に叶えた・・・でも同時に失った・・・しかも・・・自分の手でちいの首を・・・絞めたんや・・・』

『京介ちゃん・・・』

『それから、現実を受け止めれなくて・・・ちいの幻覚を見るようになり・・・』

『・・・ちいちゃんの遺体は？』

『そのままの姿で冷凍保存してある・・・』

『早く・・・帰ってあげないと可憐そうね・・・』



『ちいは俺を恨んでいる・・・死ねばいい・・・そう思ってるはずや・・・』

『何でそう思うの?』

『俺は・・・普通の生活をしてた彼女をマインドコントロール化し、薬を投与した・・・俺と出会わなければ・・・死ぬこともなかったんだ・・・』

『・・・勝手な言い分ね・・・』

『事実・・・そうだろう・・・』

『でも、彼女は貴方と出会えた事に感謝してたかもよ・・・どんな人生であれ、それも運命・・・なのかもしれない・・・』

『慰めはよしてくれ・・・』

『そうかもね・・・』

二人は無言になった・・・

ひとみは夕陽の写真を手を取った

『ここに行きたいの・・・？』

『ああ・・・ちいの写真と一緒にあったんだ・・・裏には薄ら何かが書いてある・・・きつとそこに行けば何か・・・』

『そう・・・ねえ、この夕陽なんて呼ぶか知ってる？』

『夕陽は夕陽じゃないのか？』

『うっん・・・違うの・・・これは方言で・・・「アコウクロウ」って言うのよ』

『アコウ・・・クロ・・・』

『そう・・・夕陽が沈む時の光と、夜の暗さと混ざる時間・・・赤と黒・・・そう言う意味らしいわ・・・』

『アコウクロ・・・ウ・・・』

第二章 13

『アコウクロウ・・・か・・・』

京介はひとみの言う「アコウクロウ」と言う言葉を初めて聞いた・

『方言って、言ったな・・・どこの方言なんや?』

『よく分からないけど・・・九州とか・・・沖縄とか・・・そっちの方だ  
と思ったよ』

『そうか・・・ここに来て、思わぬ情報が得られた・・・ありがとう・  
』

『どこの場所が分からないで探しての?』

『ああ・・・ただ、ちいの故郷を目指しさば何か分かるかと思ってな・  
』

『そう・・・夕陽自体は、どこでも同じような景色はあると思うけど・  
彼女が持っていた写真なら 故郷の可能性は高いもんね』

『ああ・・・明確な目標が出来てよかったよ・・・』

『いつ向かうの？』

『そやな・・・ここにいつまでも世話になるわけにはいかないから  
な・・・金も・・・尽きる前に・・・』

『ゆっくりして行っていいわよ。私は構わない』

『そうか・・・』

『顔色も悪いし・・・急いでないなら万全にして向かったら？生活は  
一人も二人も変わらないわ それに・・・』

『それに・・・なんだ？』

『そんな寂しい顔で向っても・・・ちいさんは喜ばないわ・・・』

『そう言う訳にはいかないんだ・・・』

『無理したらダメよ・・・』

『うっっっ』

『どうしたの？』

京介の頭痛が激しくなり始めてた・・・

ジャニスから薬を多めに貰ってはいしたが、残りの数が心配だっ  
た・・・

長居をしてしまうと・・・薬が足りなくなる・・・

手がかりを掴んで、再度関東に戻るのは無駄だと考えた。

『大丈夫や・・・なあ、ひとみ』

『なに？』

『俺は・・・もう少し休ませて貰う・・・夢で魘されていたとしても』

構わないで欲しいんや・・・』

『どうしてっ？』

『戒めや・・・』

『・・・イヤよ・・・起こしてあげる』

『・・・そうか・・・』

京介は何か言いたげにしたが頭痛のせいもあり、言葉を少なめに眠りについた・・・

ひとみは少しでも元気になってもらいたい・・・

そう思いながらも、少しどころから来る不安を感じていた・・・

京介の飲んだ薬のカラを手に取り、眺めた

『えっ・・・何これ・・・本当に風邪薬・・・？』

異常な数の錠剤やらカプセルやら京介の鞆から見えていた・・・

どう使い分けているのだろう・・・

京介の体に起こる変化・・・

幻覚的なものを抑えるためのものなのか・・・

精神安定剤みたいなものなのか・・・

薬の出所が　とても気になった・・・



o

第二章 14

ひとみはこっそり薬のカラをしまい込んだ……。

「後から調べてみよう……もし変な薬ならばやめさせたい……」

・  
・  
・  
・  
・

『京介さん……この薬はご存じの通り……飲みすぎは不味い事になります……どうかあまり飲みすぎないようにして下さい』

『分かっている……ジャニス……ちいの二の舞……そう言いたいのか？』

『彼女のとは少し成分が違います……京介さんには麻薬を多少使っています……』

『痛みを抑える分……幻覚が酷くなる……と言う事が……』

『100%とは言えませんが、その可能性も高い……と思います。』

『フラッシュバックが・・より加速する可能性がある・・な・・』

『ええ・・ですから・・』

『ジャニス・・ありがとう・・でもな、俺は目標を達する事が出来るならば、それで廃人になってもいいんや・・』

『・・・・そこまで言うのなら・・分かりました・・』

『悪いな・・ジャニス・・』

・  
・  
・  
・  
・

京介は目を覚ました・・

部屋には誰も居なかった

『出掛けたんか・・・』

テーブルに手紙が置いてあった・・・

「起きたら連絡下さい。昔、よく行っていたカフェにいます」

「・・・」

京介は窓から外を眺めた

数年前、ここから同じ景色を何度も見た・・・

その時の風景とは少し違っていた・・・

「大阪も変わり始めたな・・・いつものカフェか・・・あそこにもよく行ったな・・・」

京介は顔を洗い荷物を持ちカフェへと向かった。

「プルルル・・・」

「今、起きたの？」

「少し前や、今そっちに向かってる。少し大阪を離れていただけなのに大阪も変わったな・・・」

「うん・・・でも変わらないものある・・・待ってるね」

「ああ・・・マスターおるんか？」

「うん、待ってたよ」

「そうか（笑）」

のんびり歩きながら カフェへ 着いた。

『Paranoia Cafe』

昔、ひとみとよく来た場所だった・

「カリーン・・・」

『マスター 来たわよ』

『おお・・・京介さん、元気やったん？』

『マスター・・・相変わらずや・・・』

『少しやつれているんちゃうか？』

『ちよっと・・・風邪をこじらせてな・・・それで・・・』

『・・・』

ひとみは敢えて聞いてないフリをした・

『ねえ、京介ちゃん、昔、頼んでたいつもので良いよね？』

『うん？ああ・・・そやな久しぶりに頼んでみるか・・・』

『ここに来て』

ひとみはカウンターの席に来るように言った。

『懐かしいイス・・・相変わらずボロイ店や・・・』(笑)『』

『もう、私は毎日のように来てるのよ、そんなん言わないで』(笑)『』

『あれから・・・ずっとか・・・』

『うん・・・あなたが急に居なくなった日・・・ここに来れば・・・』

いつか会える・・・そう思ってた・・・んだ・・・(笑)今はもう違うけどね、今はここは私の隠れ家なんだから(笑)』

『そうか・・・(笑)』

マスターは食事を運んできた

『はい、京介さん、お待たせ懐かしいやろ(笑)』

『ああ・・・相変わらず不味そうや・・・』

『(笑)』

食べ始めた・・・

『京介さん・・・食べながらで良いから話を聞いてくれるかな?』

『・・・ああ』



ひとみはマスターが何を言うのか気になった・・

『京介さんが居なくなつて・・それから毎日ひとみちゃんはここに  
来てくれるようになった・・』

『辞めてよ、マスターそう言う話は・・』

『ひとみちゃん・・言わないと分かんないんだよ・・コイツは・・』

『・・』

マスターは京介より年上で、昔から世話になっている兄貴的な存在  
でもあつた・・

『・・毎日・・ここに来て何時間もここで待ってたんやで・・』

『・・』

『そう言う人の気持ち・・無碍したらあかんで・・』

『 ああ・・・ 』

『 辞めてったら！・・・もう、いいのよ・・・ 』

『 俺はひとみちゃんを頼って来てくれたことが嬉しい反面・・・凄くムカついてる・・・ 』

『 だろうな・・・ 』

『 ううん・・・そんな事ないよ京介ちゃん・・・マスターも何も分からないくせに、憶測だけで彼を責めないでよ・・・ 』

『 ひとみ・・・マスターの言う通りや・・・どんな理由があるにせよ・・・ダメな事はダメなんだよ・・・ 』

『 京介さん、もうこれで俺の気はすんだ（笑）今日は沢山食べて飲んでいってくれ、店も閉めて 再会の祝いや！ 』

ひとみは安心した・・・

『マスター・・・そう言つの苦手だつて・・・知つてて言つてるんやろ？』

『ハハ、バレたか（笑）・・・まあそれはそうとして、大阪には永住か？』

『いや・・・直ぐに発つよ・・・』

『なんで？来たばかりなんやろ？』

『ああ・・・』

その時、ひとみは京介が既に出発の身支度をしてきている事に気がついた・・・

『このまま・・・いっちゃつて・・・？』

『・・・ああ・・・』

『ダメよ！せめて体調を完全にしてから・・・』

『完全？・・・それは・・・無理やる・・・』

それから数時間・・・

少ない会話が繰り返された・・・

『じゃあ・・・そろそろ・・・行くわ・・・』

『なんで・・・どうして・・・いつもそうなの・・・』

『いかな・・・あかんねや・・・』

ひとみの頭の中に・・・

千佳のウエディングドレスの姿が過った・・・

『・・・うん・・・分かった・・・必ず連絡してね・・・』

『悪いな・・・世話になったのに・・・いつもこんなんでな・・・』

厨房に居たマスターが出てきた・・・

『京介さん、どこに行きはるの？』

玄関に向かって歩いていった京介は立ち止まり・・・

振り返って言った……

『アコウクロヤ……』

扉は懐かしむ時間を惜しむように閉められた……

o

## 第二章 完結

京介は大阪を旅立つことにした・

大阪・・沢山の思い出があった・

「ひとみ・」

もう二度と会う事はないだろう・・京介はそう感じていた・

その日は頭痛が激しくなり大阪を出る事が出来なかった

ひとみの所に戻るのも嫌だった・

「駅の近くのホテルにでも泊まって明日の朝一で出るか・」

京介は普段乗りなれない、バスに乗って駅を目指した・



バスに乗ると高校生や社会人が思い思いの話をしていた・

昨日の見た、TV番組、学校や友達の事・・・会社での愚痴・・・

そうかと思えば疲れきって寝てる中年・・・

同じ時間、違う場所で同じような会話がなされているのだろうか・・・

数年前、ちいもこうして友達と楽しそうに話をしながら、通勤や通学していたのだろうか・・・

考えれば考えるほど、ちいの事を知らない自分がいた・・・

新大阪が近づきバスは停まった。

ホテルに向かった・・

チェックインし部屋に荷物を置き、窓から空を見上げた・・

辺りは既に暗くなり始めていた・・

「ちいと星をよく眺めたな・・」

京介は目をつぶり・・

千佳の事を思い浮かべた・・・

## アコウクロ 第三章

千佳は「？ M I O」に就職し数年が経っていた・・

最初は普通の事務として採用されたが

美央が社長に就任する際に抜擢を受け秘書と言うポジションを任命されていた・・。

『失礼します』

『社長、体調良くなったみたいですね！笑い声が秘書室まで聞えましたよ（\*、\*、\*）』

『そう？（笑）だってね京介君が私を口説こうとしてるから』（笑）

『えっ・・？京介さん・・社長を口説いてたんで・・す・・か・・』

千佳の中の自我が即座に反応した・・。

急に全身の力が抜け倒れこんだ・・・

『ちよつと！！千佳ちゃん！！大丈夫？』

美央は慌ててちに駆け寄ると

千佳は子供ようになっていた

『わたし・・・怖い・・・嫌われる・・・怖い・・・いやだ・・・壊れた  
くない消えたくない・・・』

美央は慌てて京介の方を見た・・・

『大変・・・どうしよう・・・京介君・・・』

『目が虚ろですね．．少し寝かせて様子を見て病院に連れて行きま  
すか』

『救急車 呼ばなくても大丈夫？』

『先程、変なことを口走っていたようですから落ち着かせてからの  
方が良いのでは？医者にあのまま見せたら、千佳さん精神病棟行き  
ですよ．．』

『私がこちらに寝かせますね．．』

そう言い自分の座っていたソファーに寝かせると言い立ち上がり千  
佳を抱きかかえた

千佳は京介の顔を見て涙をポロポロ流し、しがみ付いてきた

『だいたい・・・だいたい・・・(泣)』

「京介君に口説かれた」

この言葉がどうしようもない不安に包まれ

制御が出来ないでいるようであった。

小声で・・・

『大丈夫・・・ちい・・・愛しているよ・・・』

我・・・最強なり・・・』

そう言いソファーに寝かせた。

千佳は呪文に反応した・・・

少しの間、眠りに落ちた・・・

『京介君、ごめんね・・・最近、千佳ちゃん精神的に不安定で、時々・・・別人なんだよね・・・』

『そうですか・・・普段も今みたいに？』

『今回みたいのは初めてだけど・・・壊れるとか消えるとか・・・なんなんだろう・・・』

薬の配分がやはり多かった・・・

このままではプラン進行を早める事が余儀なくなる・・・そう感じた。



『精神的なトラウマでしょうね・・・何か・・・言葉で反応したようにも感じました』

『えっ？』

『口説く・・・これですかね？』

『えっ？口説くが？』

『分かりませんが・・・ナンパか何かで怖い思いでもしたのでしょう・・・』

『そう・・・かなあ・・・』

千佳が目を覚ました

千佳は事の事態を把握出来ていなかった

『・・・あれ・・・あっ・・・えっ?・・・』

『千佳ちゃん・・・大丈夫?』

『すみません・・・急に目眩がして・・・もう大丈夫です・・・』

『そう・・・それならいいけど・・・病院行って来たら?』

『はぁ・・・今日・・・薬、飲み忘れたからかも知れません・・・大丈夫です』

『千佳さん、病院に行ってるんですね・・・なら、安心です。お薬飲んできたらどうですか?』

「お薬飲んできたらどうですか・・・」

京介の言葉が呪文のように響いた・・・

『そうします・・・』

美央は千佳の為に水を用意した

『すみません・・・社長・・・お客様の前で・・・』

『いいのよ、貴女が大丈夫なら　ねえ京介君』

『はい、その通りです。ちゃんと薬を飲んで早く治してくださいね・・・』

千佳は京介の言葉に操られるように薬を飲んだ・・・

数分後

千佳はシツカリといつも自分に戻り、持ち場に着いた

『・・・少し驚きましたが、ちゃんと病院に行ってるみたいで安心しましたね』

『ほんと・・・びっくりよ・・・あの子には・・・あっ・・・京介君、この事は誰にも言わないでおいでくれるかな？』

『勿論です。絶対に他言はしません、誓います』

『ゴメンネ・・・京介君（\*、\*）』

『いえいえ、ではそろそろ会社の方に戻ります』

『資料の方よろしくね！』

『はい』

京介は社長室を出て千佳の所に行った・・・

『ガラスの破片・・・』

千佳はビクンと体が反応し京介を見た

『きょ・・・う・・・すけ・・・しゃさん・・・』

『短めに言う本体に伝える・・・』

『はぁ・・・い・・・』

『一時間後・・・早退して部屋で待ってる・・・』

『は・・・い・・・』

『我・・・最強なり・・・』

そう言い ? M I O をあとにした . . .

### 第三章 2

その後の千佳はどんどんもう一つの人格に覆われるようになってた・・・。

薬や呪文の効果により自我と呼ばれる人格が強くなり始めた・・・

その反面、京介の知らない所でも自我と本体の人格のせめぎ合いがあった・・・

やがて、千佳は「M I O」を退社をせざる負えない状況まで体が薬に蝕まれ始めた・・・

そして京介に異常な執着をし始めた・・・

『きょうすけしゅん・・・きょうすけしゅん・・・』

千佳は退社後、部屋で一人で過ごす事が多くなっていた・・・

千佳の普段は自我がメインで動く様であった・・・。

部屋をキョロキョロして京介の存在が無いと

壁に貼り付けている写真を眺めては名を呼んでいた・・・

「京介しゃん・・・大事・・・」

京介の千佳への意識が多少変化してきたのもこの頃からだった・・・

微妙な自我と本体の兼ね合いが

京介の心を動かし始めた感じであった・・・

自我はつまらなかつたり、空腹になると本体に体を渡すようにしていたようだった。

在職中は本体をキープしながら自我で制御をしていたはずだが

それも薬の量を増やしたことにより、自我自体も少しブレが出始め



ていた・・・

そこを見越し退職をさせたのも事実であった・・・

・  
・  
・

千佳は時計を見た

「夕方・・・だ・・・」

「ご飯・・・作る、ちい作る・・・」

本体を呼び出した・・・

自我と本体の会話ができるのは本体の人格の時だけであった・・・

「何が食べたいの？」

「はんぱーぐ」

「昨日も作ったばかりだよ・・・京介さん・・・いやかも・・・」

「ちい、はんばーぐ・・・」

「そう・・・じゃあ・・・ハンバーグと何か作ればいいね」

「うん だいじい」

「（笑）うん」

自我はまるで子供だった・・・

会話は本体の人格・・・

制御は自我の人格・・・

本体の千佳はとてもやるせない気持ちになる時もあった・・・

でも・・・自我を怒らせると自分は消されるかもしれない・・・

会社を辞めてしまった今、自分の記憶や存在価値は必要無いかも知れない……

そう言った恐怖感も拭いきれないうでいた……

『ただいま……』

『あつ。京介さん（\*、\*）』

『どうだ？体調の方は？』

『薬飲んだから……今、食事を作ってます。あの……もう一人が……どうしてもハンバーグって……だから、今、違つのを作るところだから……待ってくれますか……』

少し申し訳なさそうに千佳は言ってきた

『ハンバーグか（笑）昨日と同じだな……余程、気に入ったんだろ  
う（笑）　　いいよハンバーグで』

自我と本体の付き合い方・・・

京介は手探りで探るように対応していた・・・

ただ単に優しくするのでは無く・・・

「知る」と言う事を重要視していた。

千佳は台所に向かい料理を始めた・・・

夕食の準備が終わるとテーブルに運び食事を始めた・・・

『もう一人に変わります・・・』

『ああ』

『きょうすけちゃん）＊、＊（おかえり！だいじーはんばーぐ  
！おいしいー！』

『そうか良かったな（笑）ハンバーグ好きなんか？』

『本体！料理じょうず。はんぱーぐ好き』

『仲良くやれそうか？』

『うん（\*、\*）』

『そうか 安心したよ』

『うん（\*、\*）』

・ 自我の千佳は夕食を美味しそうに食べるとゴロゴロ甘えしてきた・

『千佳・・・』

ゆっくり頭を撫でると自我は子供様な寝顔でスヤスヤと眠りはじめた

そんな千佳を見ていると京介は時としていたたまれない気持ちにも

なつた・・・

「自我・・・本体・・・怒り（サタン）・・・か・・・」

禁断の傀儡術。

薬物と呪文でのマインドコントロール・・・

本来の千佳の姿は本体が一番近い・・・

だが、必要の無い記憶はほぼ消された状態・・・

記憶喪失にも似た状態に、新たに人格を形成した形であった・・・

最後は破滅的な結末を迎えるであろう・・・究極の傀儡・・・

何故、こんな禁じ手を使ったのか・・・

それすらも分からなくなっていた・・・

傀儡に取り込まれる傀儡師・・・

さもそんな感じであった事に京介自体が気づいていなかった・・・

千佳は数分後目を覚ました・・・

o



### 第三章 3

『あつ・・・京介さん、ごめんなさい』

『ええよ そのままで・・・』

『ありがとう・・・もう少し・・・このままで・・・』

『ああ・・・』

目覚めた千佳は本体の人格だった。

数分間、京介の膝枕で千佳は甘えていた・・・

『もう。大丈夫（＊、＊）京介さん、今コーヒー入れます』

千佳は立ち上がりコーヒーを持ってきた。

『千佳・・・話があるんだ・・・』

『何ですか（\*、\*）？』

『自我はもう寝た感じか？』

『はい。多分・・・今日は昼の時間が長かったから、疲れて起きないと思います・・・』

『そうか・・・自我とのやり取りは上手くいってるのか？』

『・・・はい・・・』

『・・・そうか・・・なら いいんだ・・・なら・・・』

千佳は涙ぐみながら言ってきた

『京介さん・・・私、消えたくない・・・』

『ああ・・・大丈夫だ・・・自我のバランスも崩れている・・・時期に消えるのは自我だろう・・・』

『え・・・』

『それが・・・望みじゃないのか・・・？』

『でもお・・・それじゃ・・・可愛そう・・・』

『どちらにせよ・・・薬でのコントロールは体に対する副作用が大きすぎる・・・』

『でも・・・薬を飲んだら・・・今の私でいられる・・・』

『薬が無くても、自我に頼めば出れるんじゃないのか？』

『・・・呪文・・・それが一番・・・効きます・・・』

『・・・そうか・・・』

『ごめんなさい・・・でも、私たち上手くやっていけると思います・・・』

『・・・』

京介は千佳の顔を見た・・・

そして思い出すように言った。

『そうや！千佳！誕生日にサプライズがあるんだ！（＊、＊）』

『私のですか？』

『ああ、飛びきりのサプライズだ』

『ええ・・・何かな・・・』

『楽しみにしとけ、ニヤリ』

『はい。（＊、＊）』

『それと・・・千佳・・・いつもありがとうな・・・おいで・・・』

京介は両手を広げ千佳の方を向いた

『きよ・・・京介さん・・・(泣)』

千佳は京介にしがみ付き声を殺しながら・・・大泣きをした・・・

どうにもならない現実・・・

自分の体が自分でコントロール出来ない悔しさ・・・

京介だけが自分の理解者であること・・・

『京介さん。もうプランとかいいの?』

『千佳・・・全てはそこが間違いの始まりだったんだ・・・そんな事は気にしないでいい・・・』

『ああ・・・京介さ・・・ん・・・』

千佳の人格の構成が落ち着き

いつの日か「共存」もしくは「本体」が残るだろう・・・

京介はそう考えていた・・・

千佳の人格を壊しこんなにしたのは自分・・・

このままでは千佳の人生は破滅的な終わり方をする・・・

そうさせてはいけない・・・

いつの間にか千佳を愛しく感じ、心から必要としていた

『ちい。俺の事好きか？』

### 第三章 4

（過去の会話の回想）

近くにある星の見える丘に歩いて向かった。

『ちい……これからは、ずっと二人で居れるといいな……』

『（\*、\*）だいじ。』

ちいは空を見上げて星を眺めた



京介はベンチに座りタバコを吹かすと

千佳は固まったように動かなくなっていた・・・

『おい ちい？』

『はい・・・』

千佳は泣いていた・・・

『どうした』

『星・見てたら、涙、止まらない・・・なつかしい気持ち・・・』

『星・・・』

『本体・・・星好きだった・・・うれしいと・・・かなしい・・・ふたつある・・・』

『・・・そうか・・・』

京介は思い出した・・・

ちいは星が好きだった・・・

ちいはふりかえり・・・

『ありがとう。京介さん……』

本当の千佳を感じた瞬間……だった……

京介は夜空を見ながら沢山の事を振り返った……

自分の犯した過ちを悔むかのように……

・ ・ ・ ・ ・

後日

千佳は再度下を向き2秒……

正面を向いた。

『はい……。』

『本体のちいか?』

『はい……。』

『少し、聞きたい事がある……。薬の常用状態。不安定になった時の自分……。』

『……。そんなに長く出ている事は出来ません……。薬は……。日に10袋……。』

『10……。?……。』

『寂しいとき、自殺しようとするから無理矢理・・・止める・・・』

『それは誰が・・・止めるんだ？』

『・・・私が・・・私を止める・・・』

ちいは沢山の涙をこらえた・・・

「自殺したいのは・・・私の方・・・」

そう思って何度も考えた・

実際は・・・自殺をしようとしていたのは自我では無く本体であった・

『薬も止められなかったのか？』

『・・・薬なんて・・・薬じゃなくて・・・』

物静かに語るちい・・・

その先にある本当の気持ちと言えなかった・

『ちい・・・ごめんな・・・辛い思いばかりさせて・・・死んじゃダメだ・・・必ずお前を幸せにする・・・』

『京介さん・・・気付いてくれた・・・私、寂しかった・・・今・・・嬉しい・・・』

本体への侵食も始まっているのか・・・戸惑いを感じた・・・

どちらも本当の千佳・・・

京介にしてみればどちらも大事にしたい・・・

そう思うのは本心であったが、本体の気持ち考えると

何とかしなくては・・・何とかしたい・・・

元々は本体の体であり、意思であるのだから・・・

胸を締め付けられる様な想いであった。



その夜、千佳を抱きかかえながら京介は眠りに着いた・・・

### 第三章 5

翌日 2人は出掛けていた。

『ちい、今日は楽しい一日なるかもだぞ（笑）』

『（\*、\*、\*）ダイジ』

京介は古くからの友人の店へ向かった。

ここは京都での知り合い、下村の弟が経営している系列店であった。

店に入り席に着くと 直ぐに下村の弟が現れた

『京介さん、ご無沙汰しました』

『しばらくやのう、今日はプライベートや兄貴は元気か？』

『ええ、会いたがってましたよ（笑）』

『よろしく言つといてや、近いうちに顔出すさかい』

『はい、料理の方は私へ任せてくれますか？飛び切りのを用意します。』

『ああ、頼む』

総料理長「下村」が直々に料理を運んできた。

『お待たせいたしました。こちらの素敵な女性は彼女さんですか？』

ちいは真赤な顔で京介を見た

『ええ、とても大事な彼女や』

ちいは小さな声で

「だいじい

と言った。。。

『わあー（\*、\*） 素敵。美味しそう』

ちいは下村の代表作『雪のしずく』 に大喜びした。

『おおきに。。。下村はん。。。』

『いえ。。。昔からの仲じゃないですか。。。』

下村は、その後二人を眺めながら少しの違和感を感じていた・・・

楽しいはずのデート・・・

何故か京介の表情が寂しげな感じがしたからだ・・・

『京介さん・・・ありがとう、私、今とても幸せ。あなたとずっと一緒にいたらいいのに・・・』

千佳の言葉は自我では無かった・・・

『ああ・・・一緒だよ・・・ずっと・・・永遠に・・・』

『\*(、\* (・・・うん。』

千佳は本体の意識と自我の意識が入り混じる感じではあった

周りから見ると「甘えん坊な彼女」に見えたのだろう。

『ちい。そろそろ誕生日だな』

『はい（＊、＊）』

『今日はプレゼントの予約を入れる』

『ええ・・・何かな（＊、＊）』

『着る物だよ』

『洋服？最近、買い物してないから嬉しい（＊、＊）』

『好きなもの買ってあげるよ、その他にサプライズがある』

『ひとつでいいです・・・大事にします。本当は・・・何もいらない、一緒にいれればそれだけで・・・（＊、＊）』

『まあ、いいやないか、食べたら行く』

『ぶん（\*、\*）だいいい』

食事を終え「月の蘇」を出た。

京介と千佳は都内で有名な百貨店に向かった。

色んな服を試着して着てみせる千佳……。

『どじっ？京ちゃん（\*、\*）』

『可愛いよ。』

その言葉を聞く度にモジモジしながら真赤な顔をしていた。

数着の服を購入すると千佳は直ぐに着替えたいと言いトイレに行った

こっしてみると……

一番最初に出会った時の千佳そのものであった。

可愛らしく普通の女の子・・・

そう感じた・・・

千佳としてみれば大事なデート、ちゃんとしていたい。

そんな思いから薬をデートの前にせがんだのだろう・・・

薬で何とか自我を抑えたい・・・その思いが強かった

鏡の前・・・

『うん！可愛いし綺麗だ。』

「ピキーン・・・」



『あつ・・・あああ・・・』

自我が我慢出来なくなってきているようだった・・・

千佳は慌てて京介の元に駆け寄った

『きょうちや・・・ん・呪文・・・御願い・・・』

・  
千佳は自分から「我、最強なり・・・」を唱えるよう言って来た・・・

ガクガク震えながら袖にしがみ付く千佳・・・

苦しむ、ちいを見ていられなかった・・・

『我・・・最強なり・・・』

「ガクン・・・」

下を俯いたまま、数秒間大人しくなった。

『はあ・・・はあ・・・もう一人の私も京ちゃんに甘えたいみたい（苦笑）』

苦しげな表情で千佳は言っていた

京介はいた堪れない気持ちを抑え、千佳を抱きしめた

『無理・・・するな・・・別にどんなお前でも変わりはない・・・  
原因は俺にあるのだから・・・』

『・・・そんな風に言わないで 京ちゃん・・・ちいは・・・ちいは・・・  
今・・・幸せです・・・』

『ちい・・・。』

言葉にならなかった・・・

そこまでして・・・俺を想う事・・・

ちいの気持がとても傷をえぐられる様な気がした・

『さあ・・・行くつか・・・』

『・・・はい。・・・』

京介はちいを連れてある場所へ向かっていった。

### 第三章 6

京介は千佳の手を握った

『（＊、＊）だいじ』

『ああ・・・大事だよ』

千佳は繋ぐ手を何度も見ても微笑んでいた

『ちい、ここや』

『こじって・・・』

『ドレス選ぶんだ・・・』

『えっ・・・』

千佳は嬉しくて仕方無い反面、胸が張り裂けそうなほど苦しくなった

『京ちゃん・・・』

京介はほほ笑んだ。

千佳は、ただただ大粒の涙を流した

「本当なんだ・・・私・・・幸せになれるんだ・・・」

心から京介の愛を感じた・・・。

店の中に入ると華やかなドレスが二人を迎えた

京介は千佳の好みや好きな色を知りたいと思った

千佳は京介の好みの物を選びたいそう思った

『お好みのものはありますか（\*、\*）』

ブライダルアドバイザーの「恵」が現れた。

千佳は京介の後ろに隠れた

そんな姿を微笑ましく思い恵は話しかけた

『奥様でよろしいですね（\*、\*）？』

『はい（笑）』

笑顔で返答する京介を見て、千佳は嬉しく感じた

『ちい、こちらの方に色々相談するといい、俺は待ってるから』

『はい（\*、\*）』

千佳は恥ずかしそうに、恵のところに行った。

色々話してて気が合うのか、カクテルドレスの試着を始めた

そして京介の所に駆け寄ってきた

279

『その・・・あの・・・何色が似合う？・・・じゃなくて・・・えっと何色が好きなの？』

『何色でも良いよ（笑）好きなの選びな』

『でもお』

『そっか、じゃあ淡い色が似合うと思うよ。（\*、\*）』



『じゃあ そつする)\*、\*』

千佳は嬉しそうに恵の元へ戻った

数分後・

カクテルドレスの候補が決まったようだが千佳は迷っていた

京介の所に来て

『あの・・・どれがいいかなあ・・・』

『全部似合ってたで)\*、\* (全部買おう』

『ええ・・・そんなのダメだよ・・・お金かかるもん』

『気にしなくてもいい、一生に一度の事、綺麗に着飾るのに無駄なんてない』

『・・・でもお・・・』

『じゃあ・・・薄黄色と水色が良いとおもつで（笑）』

『うん！（\*、\*）』

京介は恵にドレスの買い取りの話をした

『・・・お値段・・・はりますよ・・・』

少し遠慮気味にそう言ってきた

『彼女が喜んでくれるのならそれでいいんです・・・』

『はい。分かりました！！奥様が羨ましいです（笑）』

その言葉を聞いて千佳は京介にしがみ付くように抱きついた

『京ちゃん・・・ちい嬉しい・・・幸せ・・・』

『俺もや・・・ちい・・・』

『幸せすぎて・・・怖い・・・』

『アホ・・・(笑)』

『うん。。。(。)ノ。ゝ。(。)。  
京介ちゃん・・・ずっと・・・一緒に・・・  
居てね・・・。』

『ああ・・・約束する』

『御主人、それはそうと・・・ウェディングはレンタルでよろしいですか？』

『オーダーも出来るんですか？』

『出来ますよ！もし・・・良かったら私にやらせてもらえませんか！お二人を見てると既製品じゃ申し訳なくて（笑）　こちらをご覧ください』

店内を見渡すと恵のデザインしたウェディングドレスが飾られていた

283

『わあ・・・素敵・・・』

『ちい。どうする？作ってもらおうか！』

『奥様だけの世界にたった一つしか無いウェディングドレスを作らせて貰えませんか！！勿論色々とサービスさせて貰いますから（＊  
（ ）』

『うわぁぁん・・・幸せすぎる・・・京ちゃん・・・京ちゃん・・・』

『ほら、恵さん困つとるやろ（笑）是非、お願いします』

『はい！承知しました！素直で可愛らしい奥さまですね！』

恵も少しもらい泣きをした

恵と千佳はオーダードレスの打ち合わせを楽しそうに始めた

女同士でないと分かりあえない部分もあるのだろう・・・

京介はそう思い、二人のやり取りを眺めた

時折、千佳は京介の視線を感じては嬉しそうに手を振ってきた

京介は千佳を見て感じた・・・

入り混じる感情のせいで少し自我が出てきているように感じた・・・

『ちい・・・。そろそろ・・・薬の時間やで・・・』

いつもの半分の量に減らした薬を差し出した

すると・・・千佳は京介の顔を見上げ・・・

『京ちゃん・・・。愛してる・・・。』

薬を手に取り飲み込んだ・・・

恵は千佳の言葉を聞き、少し啞然とした・

『もう（笑）ヤケちゃうなあ！本当に仲が良いんですね（\*、  
\*）』

京介も千佳の反応に驚いていた・

何故・・真顔だったんだ・・

そして・・何故、愛しているんだ・・

『ちい・・・どうしたん・・』

『ううん・・どうもしない。ただ伝えたい・・凄くそう思ったの・・』

京介は恵の前だという事を忘れ、千佳を抱きしめた・・

「ガバツ」

『京ちゃ・・ん・・大事。でもお・・少し恥ずかしいよ・・・・（）／  
／／／（）』

『あつ・・・。そやな・・ごめんごめん』

『でも・・ありがとう・・』

小さな声で呟いていた

それから数分程でドレスの打ち合わせは終わった。



『御主人！楽しみにしててくださいね！奥様の魅力を沢山引き出す最高のドレスを作ります！！』

『はい、楽しみにしています』

『へへえー（\*´、\*）ダイジ』

### 第三章 7

京介はドレスの仕上りの日取りを聞いた

『ドレスの方は10日後・・・いや・・・一週間後って出来ますか？』

『うーん 頑張ります！間に合わせます！式の日取りですか？』

『彼女の誕生日なんです・・・』

『（＊、＊）ダイジ』

『御主人、楽しみにしてくださいね！最高のドレスを作りますので！』

ふたりにとって、とても癒された時間だった・・・

その後、千佳と京介は喫茶店に入り幾つもの会話をした

『京ちゃん……。私……。私でいいの……。』

『アホ、何言うとんねん、ちいしかおらんやろ(笑)』

『京ちゃん 私……。頑張る!』

『何も頑張る事はない、今のままで居てくれればいい。二人の時間はこれから始まるんや焦る必要はないで』

『でもお……。』

『大丈夫や、なっ!ちい』

『うん(泣)』

『注文しよか……。何飲む?』

『ブラック……。』

千佳は少しでも京介に近づきたい・

もっと・・・もっと・・・

好きななりたい

好きでいられたい

そう想った・・・。

『ブラック？大丈夫かいな（笑）？』

『同じの飲みたい（\*´、\*）』

『残しても飲んでやらんで（笑）』

『ちいだって飲めるもん！』

『そうか（笑）』

コーヒーの豆の香り・・・

ほろ苦い豆の味・・・

全てを共有したい・・

コーヒーが運ばれてきた

千佳は早速飲んでみた・・

「スス・・」

『うーん・・苦い（。・　　）でも・・大事』

少しずつブラックを飲んでいた

京介はそんな千佳を見て微笑んだ

まるで、子供のようだな・・

そう感じた

コーヒーを飲み終わり店の外に出た

『さて 帰るか』

『京ちゃん！あの丘に行きたい』\*、\*、\*（）』

『希望ヶ丘か？』

『うん（）\*、\*、\*（）』

二人は星の見える、希望ヶ丘へ向かった

星が空一面に広がり、街が一望出来る

千佳の大好きな場所

夜空を見上げながら、千佳は言った・・・

『京ちゃん・・・ありがとう。ちいは世界一・・・いえ、銀河系一幸せ・・・』

静かな口調だった・・・

言葉では言い表せれないほどの想いが伝わってきた

『ちい・・・一生、一緒さ・・・』

『ねえ 京ちゃん・・・少し恥かしい事していいかな・・・』

『ん？なんだ』

千佳は夜空に向かって叫んだ

『あのねー！・・・私、京ちゃんと結婚するのー！私、私！幸せになるのー！』



涙交じりの声と顔・・・

千佳が愛しくて仕方が無かった瞬間でもあった・・・

『ちいを幸せにするぞー！！！！』

思わず、無意識に京介は叫んだ

二人の時間はとても緩やかだった・・・

『これが映画だったら・・・ここで終わって欲しい・・・』

『ちい．．．。』

千佳を抱きしめた．．

今までの事を振り返る事もなく．．

これからの二人の為に．．

どんな事があるうとも．．

どんなことが起ころうとも．．

お互いを大事に想いあえるように．．．。



### 第三章 8

千佳はウェディングドレスの出来上がりが待ち遠しかった。

めぐに、こっそり連絡をしてデザインや小物関係の事を打ち合わせしていた

京介を喜ばせたい、その一心だった

楽しい日々が続いている

楽しい日々が続いている

千佳はそれを強く願った

京介の居ない時間、千佳の中では本体と自我のせめぎ合いが続いていた。

実際は自我の力が強くなりつつあるように感じていた・・・

本体の意思の主導権はとても弱く薬が無ければ・・・そう思っていた。

その事を京介に悟られたくない・

千佳は自分の身を削る様な程の努力をしていた・

自我とのバランス・・・

朝、昼、夜、時間的な配分を考え薬を飲んでいた。

なるべくならば京介の、前では本体のままでもいい・・・それが本音だった。

だが・・・日増しに薬の効き目の時間の感覚が短くなってきていた・・・

そんなある日

京介は薬の残量を見ようと思い薬箱を開けた。

『やけに薬が減っているな・・・』

薬箱から視線を外すと、目の前には千佳が居た。

『ちい・・・薬飲み過ぎてないか?』

『・・・少し・・・飲み過ぎているかも・・・』

『どっちだ・・・?』

京介はどちらの人格が薬を飲んでいるか聞いた

『私です。』

千佳は本体の人格を意味して答えた。

『・・・そうか・・・飲まないと辛いんか・・・?』

『眠る前に・・・一袋多く飲むと朝、普通でいられるから・・・』

『朝?』

『朝ご飯とか作るの自我だと・・・』

『そんなの気にしなくていいんだ・・・昼間はどつなんだ？』

『昼は自我はあまり出てこない・・・いつもって言う訳じゃないけど・  
あまり自我は出てきてないです』

『・・・そうか・・・分かった。今日、薬を準備してくるな・・・。』

「少し変だ・・・」

京介は違和感を感じた・・・。

『あ・・・お願いが・・・』

『なんや？』

『睡眠薬を少し欲しいと思って・・・』

『どつしてだ？』

『なんか・・・眠れなくて・・・それと・・・自我を少しでも抑えられるように・・・』

『睡眠薬がどのような効果があるかジャニスに相談してみたら・・・』

『はい・・・』

千佳はとても不安に思っている事があった。

主導権が自我に渡り自分との入れ替わりが出来なる事を恐れていた。

薬で押さえこまれている自我の怒りがきつとそうしてくる・・・そう感じて病まなかった・・・

自分で言う呪文は効果が無い・・・

ならば薬で止めるしかない・・・

千佳はこの時、既に感覚的に自分の体の中で起こっている変化に気



づき始めていた・・・。

・  
・  
・

ウェディングドレスが仕上がる日がめぐから連絡が入った。

その前日に ちいは行動を起こした。

京介の不在の間にやってしまわないと・・・そう思った・・・

『・・・あっ・・・あった うん。似てる大丈夫。』

そこには昔、病院で貰った風邪薬があった。

その薬を隠すようにしまい込んだ。

京介から渡された薬も出来るだけギリギリまで飲まないようにしてみた。

薬の効果が薄れている・・・

体が薬に慣れてきている・・・

薬を飲まないでいると人格の入れ替わりの時とても苦しい・

そして激しい頭痛に襲われる・

・  
・  
・

その日も頭痛が激しくなり始めて意識が遠のいていった・

『もう・・・・ダメ・』

千佳は倒れ込んだ・

「ビクン・・・・ガクガク・」

白目をむいたまま、千佳は起き上がった・

『きょうすけ・・・・しゃん・・・・きょうすけ・・・・しゃん・・・・』

自我で目覚めた千佳は京介を探し始めた・・・

部屋の中をウロウロと探した

『いない・・・きょうすけしゃん・・・』

自我の千佳の目の前にいつも飲んでいる薬があった・・・

自我は入れ替わる前、本体が薬を持って何かをしていたのを思い出した

『・・・これ・・・いない・・・きょうすけしゃんにあえない・・・これいない・・・』

自我の千佳は薬をキッチンで薬の袋を破りそして蛇口をひねった・・・

「ジャー」

薬は水と共に排水溝へ流れていった・・・

薬が流れていく様を不敵な笑みで千佳は眺めていた・・・

「ズキン!!」

その時・・・激しい頭痛に襲われた・・・

『  
いたい・・・いたい・・・きょうすけちゃん  
きょうすけちゃん  
』

自我の千佳はたうち回りながら携帯を取り京介に電話をした・

「プルルル・・・」

もしもし『・・・ちい？・・・どうしたん？』

『いたいいいい・・・いたいいいい・・・』

『ちい！ちい！どうした 大丈夫か？』

京介は声のトーンの違いやしやべり方で自我である事を感じた

『いた・・・』

電話越しの千佳の声が途切れた・・・

『ちい！今すぐ戻る！！』

そ携帯を切るうとした時、ちいの声が聞こえた・

『……………』

『ちい！』

『早く来いよ！お前のせいで！私は……………私は！』

激しく怒りに満ち大きな声を張り上げていた

「サタン……………の人格か……………？」

『……………殺してやる……………』

このままでは危険だ・・・そう感じ、電話越しに呪文を唱えた

『すまん・・・ちい・・・。』

『あぎやあああ - 殺す！殺す！』

『我・・・最強なり・・・』

『うわああああ・・・あっ・・・ああ・・・』

千佳は嘆きにも似た声を張り上げながら携帯を手元から落とした

。

『ちい！ちい！大丈夫か！！ちい！ちい！』





### 第三章 9

京介は急いで部屋に向かった

「ハアツ、ハアツ・・・」

「タツタッタ・・・」

「ガチャ」

『おい！ちいー！』

キッチンで倒れ込む、千佳を抱き上げた

『あ・・・あああ・・・京ちゃん・・・』

『大丈夫か！！ちい！！』

『うん……。だいじ……。』

力無く答えて来た

『京ちゃん……。お願い……。くすりを……。呪文に抑えられている私  
が中で……。うっ……。』

『ああ……。分かった』

急いで薬を飲ませた

千佳は京介の腕の中で小さく丸くなり、ゆっくり目を開けた……

『きよ・・・京ちゃん・・・』

『今日、薬飲まなかったのか？』

『うん・・・限界まで我慢してたら入れ替わっちゃって・・・』

『無理はするな・・・』

『うん・・・でも・・・限界のコツがわかったから・・・明日は大丈夫・・・』

『でも、無理はあかん。明日は大事な日やかな薬が必要な時は直ぐに言っただぞ』

『うん）＊、＊（・・・だいじ』

京介の首に手をまわし顔を近づけ頬にキスをした。

『ちい……。』

『そうや、薬と睡眠薬を貰って来たぞ、体をゆっくり休ませたい時に飲むといい、ジャニスがそう言っていた』

『はい）＊、＊（ありがとう・・・そうします。』

千佳の心音は高鳴ってきた・・・

『ちい・・・あまり人格の事は気にするな、どんな「ちい」でも俺の想いは変わりはない』

『うん。ありがとう京ちゃん・・・明日、楽しみにしててね』

『ああ 楽しみや』

『世界に一つだけのウェディングドレス。京ちゃんだけの・・・ちい。』

『ああ、そして、ちいだけの俺や』

千佳は目を潤ませ微笑んだ・・・

『あっ・・・京ちゃん・・・ごめんなさい・・・ご飯まだだよね？』

『・・・そやな・・・無理せんでもええで』

『大丈夫（＊、＊）少し待ってね!』

千佳は普段と変わることなく夕食を作った

そして京介は、いつもと同じ様に美味しそうに食事をした

そして、食後にブラックコーヒーを飲み始めた・

千佳が食器を片付けていると、京介の声が聞こえた

『・・・なんか 安心したせいか眠くなってきたわ・・・』

『・・・無理しないで寝たら?』

京介はいつの間にか静かな寝息をたてはじめた

千佳は夕食の中に睡眠薬を混入していた・

『しめんなさい・・・京ちゃん・・・薬が・・・薬が必要な・・・』

慌てるように京介の鞆を漁り出した・

『はあっ・・・はあっ・・・あ・・・あつた・・・薬・・・これさえあれば・・・  
今のままで居られる・・・』

千佳は準備していた、昔病院から貰って余っていた



風邪薬と交換し、再び鞆へ終い込んだ。

『京ちゃん・京ちゃん・ずっと、ちいだけの京介ちゃん・・・』

千佳は泣きながら子供のように甘え、いつの間に眠りに着いた

・  
・  
・  
・  
・

目覚めると千佳は京介の腕枕寝ていた

時折

『うーん・うーん・・・』

と言いながら隙間の無いくらい体を押し付けてきた

『はは・・・まるで 子供やな・・・(笑)』

ふと時計を見ると時刻は「AM10時」になるうとしていた。

『ちい。ちい。おはよう、そろそろ起きなあかんで』

『うっっっん？おはよう』\*、\*、\*（京ちゃん）』

ちいが起きたので腕枕を外し起きあがった

『ん？・・・なんで・・・裸なんだ・・・（笑）昨日・・・したか？』

『・・・しちゃったあ（// //） だって・・・』

『・・・まあ・・・そんな時もあるわな（笑）』

『うっん（\*、\*、\*）』

そう言うと千佳は起き上るつとした、京介をベットへ引つ張り押し倒した

『もつとお（\*、\*）』

『ちい・・・（笑）』

・  
・  
・

P M 12時

二人はシャワーを浴び 出かける準備をした

『これ渡しとくな』

京介は鞆から薬を2つ出した。

『あっ・・・はい（\*、\*）ありがとう』

『今 飲んで行くか？』

『うん、途中で入れ替わると・・・困るからそうする』

ちいは差し替えておいた、薬を飲むふりをして本物薬を飲んだ

「少し・・・自我が可愛そう・・・」

心の中でそう思った・・・

『京ちゃん、いちお・・・呪文もお願い・・・』

『今、必要か？』

『・・・お願い・・・』

『分かった・・・』

・  
・  
・  
『我・・・最強なり・・・』

千佳は目を瞑り呪文を聞いた・・・

体の中で熱くなっていた

何か静かに消えていくような気がした。

『よし！行こう！京ちゃん）\*、\*（\*』

『ああ。』

ブライダルサロンへ向かう間、終始、千佳は京介を見つめた

『なんやねん（笑）』

『いいの！見たいの！』

『アホやな（笑）』

『一秒でも多く京ちゃんを見ていたいの！』

・  
・  
・  
・  
・

「この時のちいの言動に気づいていねば……」

京介は数ヶ月後、そう思っていた……

o

### 第三章 10

『ちいは甘えん坊やな(笑)』

『(＊、＊)』

甘えん坊の自分を知る京介に憂いを感じた

二人は店に着いた

店内に入ると直ぐに担当の「恵」が来た

『お待ちしてました！最高の出来ですよ！！御主人』

『そうですね。ちい』

『はい(＊、＊)』



地下は店内を眺めていたった

『何か良いドレスでもあったのか?』

『違うの京ちゃん、どれが似合うかなって』

『俺は何でもいいよ、主役はお前やんか(笑)』

『ダメ!一緒・・・じゃないと・・・』

不安げな顔をして目に涙を溜めた

『奥さん!大丈夫ですよ!御主人のも御作りしておきましたので!』

『えー!本当!』

『ええ(＊、＊)』

『(＊、＊)(ダイジー)』

『大事ですね（\*、\*）フフ』

京介は千佳恵のやり取りを見て笑っていた

『じゃあ、御主人、奥様のファッションショーをご覧ください（\*、\*）』

『はい（笑）』

数分後、千佳と恵が現れた

『御主人、天使さんの登場ですよ（笑）』

薄ピンクをあしらったウエディングドレス

光が反射して白からピンクへ色が変わった

首元、胸元は濃い色のピンク色のレース

所々が花柄模様になっていた

足元は足首から膝までテープ調にクロスに巻かれ

可愛らしさとセクシーさをアピールされていた

足もとのヒールはそこがクリアーになっていて花びらが中に入っていた

京介は言葉を失い千佳を見つめた・・

自然と涙が溢れ出た・・

『ど・・・どうかなあ・・京ちゃん・・変かな・・』

『綺麗だよ・・・ちい・・・』

涙が込み上げた

千佳を抱きしめ・・・

『今すぐ抱きたい・・・愛してる・・・ちい・・・』

千佳は真っ赤な顔になった

『京ちゃん・・・京ちゃん・・・』

『もう、お二人さん(笑)そう言うのは二人きppりの時にしてください(笑)』

『あ・・・すみません(笑)』

千佳は泣き顔のまま・・・

『えっ えっ・・・京ちゃん・・・』

『ホラ、めぐさん困ってるやないか』

『うん。。。(ノ)。(ノ)。。』

『奥様、例のポーチも出来てますよ!』

ウエディングドレスの色に合わせて作り、蝶の模様がが付いていた

『これは？』

『お薬入れ（\*、\*）』

『そうか（笑）ありやな』

『そやな（\*、\*）ダイジー』

ちいは大阪弁を真似て見せた

### 第三章 完結

恵は千佳と並びニコニコしながら言った

『御主人！まだ取っておきがあります！！ねえ奥さん』

『うん（＊、＊）』

『取っておき？』

そう言うと、フワッと広がるスカートに手を掛けスカートを外すように脱いだ。

ウエディングドレスはミニスカートに早変わりした。

『奥様は色白で綺麗な足をしてるので思いつ切って（＊、艸、）清楚で可憐　そしてセクシーでキュート　奥様のイメージにしてみました』

『めぐさん・・・褒めすぎ・・・恥ずかしい・・・でも嬉しい（\*）  
、\*（\*）』

『めぐさん、ほんまにありがとう・・・ほんまに・・・』

『じゃあ、撮影と行きましょつか！』

『撮影？』

『あまりにも素敵なのでうちの店にも飾らせて下さい！その分料金もサービスしますので』

二人は顔を見合わせた

『どつするっちい』

『お願いします・・・二人の大事な時間・・・』

その後、京介もタキシードに着替え、数枚の写真を撮った。



『あのお・・・めぐさん、ちょっと変わったのも撮ってもらえますか？』

『ええ、良いですよ』

千佳はそう言つと京介へ抱きつきキスをせがんだ。

『京ちゃん。抱きしめて』

ウエディング写真には有り得ないような写真を数枚撮ってもらった。

『本当に素敵なご夫婦ですね・・・(泣)』

恵は目を潤ませた

・ ・ ・ ・

『あのねー 私、幸せになるんだー・・・』

京介の頭の中で何度もこの言葉が繰り返された・・・

とめどない想い

先の分からない現実

想い描く様に生きればどれだけ幸せだったろうか

自己満足でしかない、旅

千佳を失った代償はとても大きく

京介自体、生きる希望を無くしていた

『ちい・・・俺は早くお前の所に行きたい・・・もう・・・生きてても  
辛いだけや・・・』

京介の中で繰り返されるフラッシュバック

千佳の死を受け止めているはずなのに過去を何度も思い出す

どれが夢でどれがフラッシュバックなのかも分からない・・・

ただ・・・千佳の事が恋しく

忘れる事なんて出来なかった

『ちい・・・』

暗闇の中 頬を伝う物があった・・・

。

## アコウクロ 第四章

京介はいつの間にか寝てしまっていた

服を着たまま、滞在先のホテルに居た

『シャワーでも浴びるか・・・』

風呂場にある鏡をふと見た、目が真っ赤になっていた

『何処までが夢なのか・・・フラッシュバックなのか』

鏡をボーっと見ていると、自分の後ろに人の影が見えた

振り返るとウエディングドレスの千佳が立っていた

手を伸ばし触れようとすると・・・

すり抜けるようにして消えた・・・

『・・・』

その途端、激しい頭痛に襲われた

その場でうずくまる様に身動きが出来なくなった・・・

そのまま、数分間黙っている部屋の方から携帯の鳴る音が聞こえた・・・

それで、意識が徐々に戻り始めた・・・

シャワーを上がり、携帯を見ると着信は「佐々木 ひとみ」からの  
ものであった

電話を掛ける前に薬を飲んだ・・・

『プルルル・・・』

『もしもし・・・』

『ワシや・・・電話貰ってたな・・・』

『大丈夫？』

『おお・・・大丈夫やで』

『今はどこ？』

『新大阪やもう直ぐ出るところや』

『すぐ、移動しなかったのね・・・どうしても行くの・・・？』

『行かな・・・終わらせなければならぬや・・・全てを・・・』

『うん・・・必ず・・・連絡してね』

『・・・気が向いたらな・・・』

ひとみは小さくため息を付いた

『仕方ないわね・・・それでもいいから約束ね・・・』

『ああ・・・』

京介は電話が終わると直ぐに駅に向かった



『今日中に九州に・・・』

何か焦る様な気持ちにかられていた

いつ何処で フラッシュバックに襲われるか分からない状況から

無意識にそう感じさせていたのかもしれない・・・

走り出す新幹線の景色を眺めていた

『ちいも この景色を見たのだろうか・・・』

過去をいつまでも振り返っても仕方がない・・・

戻れる訳は無いのだから・・・

先を見るしかない・・・

これも運命なのかもしれない・・・

流れる景色が眺めながらそんな事を考えた

『考えすぎても仕方ないか・・・』

数時間後、新幹線は九州に着いた

福岡。

京介は疲れていたせいもあり駅付近のホテルに直ぐに入った。

部屋に入ると死んだように眠りについた・・・

翌日、直ぐにチェックアウトした

何か手掛かりになる様なものがないかと街を見て歩いた

流石に美央に再度連絡をして住所を聞く訳にはいかない・・・そう感じていた

『あの夕陽の場所を探せば・・・何かが分かるかも知れない・・・』

夕方を待つ事にした

『ここは・・・ちいの生まれ故郷なのかもしれない・・・』

そう思うと、少し許されたような気持ちになった

暫く歩くと突然、雨が降り出した

雨宿りの為に近くの公園へ走り込んだ

雨の勢いは強く何か哀しげなものを感じた・

屋根の掛かる所のベンチに座りタバコに火を点けた

「ねえ・・・京ちゃん　ちいもタバコすいたい」

「ええよ」

「タバコ吸う　女の人嫌い？」

「ああ・・・嫌いや」

「じゃあ　吸わない（\*´、\*）」

「ウソやって　ええで（笑）」

「もう！！（笑）」

・  
・  
・

「そんな事もあったな。・・・」

昔の千佳との会話を思い出した

『ねえ？そこで何してるの？』

見知らぬ女が話しかけてきた

『・・・何でもない・・・』

『旅行？それとも出張？』

『どちらでもない』

その女は京介の隣に強引に座り自分もタバコ吸い始めた

『暇そうね・・・こんな所で男一人（笑）待ち合わせ？』

『探し物しに来たんや・・・時間もそんなに無い・・・』

『ふーん・・・。見つかりそう？』

『来たばかりで何も手がかりが無いねん・・・』

『じゃあ、手伝ってあげる！うちの店に今からおいでよ！』

『店？』

『そう飲み屋さん』

『・・・』

『ホラ、探すんでしょ？』

その女は強引に京介の手を引つ張り歩きだした

「地元の人間から何か情報が掴めるかもしれない・・・」

数分歩くと飲み屋街がへ着いた

『じいよ（\*、\*）』

『・・・』

無言で店に入った

店はBOXが数個あったがカウンターがメインのようだった

『今日はこれから何か用事があるの？』

『いや・・・特に・・・』

『それならゆっくりして行きなさいよ、どうせ行く所ないでしょ  
）』

笑)  
』

『・・・あるさ まだ 見つけられないだけだ・・・』

『ふん・・・』

女は興味なさ下げに返答しながらビールを出してきた

『取り合えずこれ飲んで待ってて(笑)』

ある程度、開店準備が終わると京介と話を始めた

・  
・  
・

『へえ〜 東京から・・・言葉は大阪弁だよね〜(笑)』

『大阪弁は全国共通やから(笑)』



『確かに（笑）　うちの娘も東京で働いてるんだよね』

『そうなんや・・・』

女は名刺を出してきた

『遅くなってごめん（笑）　ここ言つものです』

『ここは貴女の店なんやね』

『そう。ここは「わらいや」私の店よ笑顔の絶えない場所。寂しい時でも笑えるような場所。って・・・感じかな（笑）』

『素敵な場所やな・・・』

『だから！元気出さないよ（笑）　ねっ！』

『あぁ・・・』

『そついやこの辺で・・・夕陽は見えるかい？』

『夕陽なんてどこでも見れるわよ東京だって見れるでしょう？』

『東京に夕陽はゴミゴミしててな・・・』

『不思議ね・・・同じ太陽なのに・・・見る場所によって全然違うものにみえるんだから・・・』



## 第四章 2

『特別な夕陽・・・？』

『ああ・・・その場所を探してるんや・・・』

『難しそうね・・・』

『そうだな・・・』

他愛もない話をしている内に時間は23時を過ぎようとしていた

客足の方もじわじわと増えてきた

一人でこなすのは大変だろうと思いは帰る事にした

『・・・御愛想』

『何？もう帰るの？行くとこる無いんでしょ？もう少しゆっくりしてってよ、今娘も来るから』

『一人じゃ大変やもんな・・・』

カウンターに少し多めにお金を置いて席を立った。

『ママ、また寄らせて貰うわ会計は置いていたで』

『ごめんねー！必ずまた寄ってね！』

軽く会釈だけをして 店を出た。

『今日はこの辺にするか・・・』

繁華街に近い場所でホテルを探すことにした

ホテルを探しながら歩いていると、電話をしながら走ってくる女とすれ違った

京介は下を俯き・・・

女は先を見ていた・・・

「ん・・・？」

すれ違いざま、千佳が使っていた香水と同じ香りがした

『懐かしい香りやな・・・』

その後、京介はホテルを決めチェックインした。

『人懐っこいママやったな・・・ また寄ってみるか・・・』

アコウクロの写真を出した、写真の裏に書かれていた日付を眺めた

『この日・・・ここに行けば何か分かるかも知れんな・・・』

千佳の生れた場所

知らないものばかりだが少し千佳を知れたような気がしていた。

不思議と九州に入ってからフラッシュバックや頭痛が起こる気がしなかった・・・。

『アイツ・・・心配してるしてるかもな・・・』

ひとみに電話をいれた。

「プルルル・・・」

『もしもし』

『無事、九州に着いてたで』

『・・・そう・・・心配してた・・・ご飯とかちゃんと食べてるの？』

『適当にな・・・』

『何か・・・手掛かりとかは掴めた？』



『いや全然や写真と同じような風景の夕陽を探すよ』

『・・・見つかるといいね・・・』

『ああ・・・』

『電話・・・無いと思っていた・・・』

『気が向いたらずると言ったやろ』

『そうね（笑） ありがとう。』

『なあ、ひとみ、ちいは俺に同じ景色を見せてくれるだろうか・・・』

『その為に行ったんでしよう・・・諦めたの？ きっとちいさんが導いてくれるわ』

『そつだな・・・』

『体調とか幻覚とか大丈夫？』

『それが不思議と全く無いんや予兆すら無い』

『良い事じゃない』

『それはそうだが・・・ちいが自分の中から消えてしまっような気がしてな・・・』

『でも苦痛も伴うんでしょう・・・』

『ああ・・・だが自分への戒めとして受けていたい・・・どんな形でもちいと接したいんや・・・』

『・・・そっか・・・』

京介は電話をしながら夕陽の写真の裏を見た

『11の8月7日までには必ず見つけ出す・・・』

『ちいさんが 羨ましい・・・。京介ちゃん・・・死なないでね・・・』

『・・・。死ねないな・・・ここに行くまでは・・・』

『約束よ、絶対に死んじゃだめよ・・・』

『でもな・・・俺はちいを・・・』

『それでも死んだらダメよ・・・そんなのちいさん喜ばない・・・』

『・・・もう 居ないんだよ・・・ちいは・・・』

電話を切った

『ちい・・・俺はお前に何をしてやり、何を伝えたんかな・・・お前は俺と出会わなければ良かったのかも知れないな・・・』

ウエディングドレスの写真のちいは満面の笑みで京介を見つめていた・・

## 第四章 3

翌日から数日間、京介は色々な海辺の夕陽を見て歩いた

だが写真と同じような景色は見つからなかった

『手がかりが無さ過ぎるな・・・』

その日は体調が悪く薬を多めに常用していた・・・

フラッシュバックを抑える薬だが京介はお構いなしに飲んでいった。

ホテルに戻ると目眩がしてきた

『少し歩きすぎたかもな・・・』

ベットに横になった頭の奥からチリチリするような痛みを感じた

次第に痛みは激しくなり耐え切れないほど痛みになってきた

『あかん・・・薬を・・・』

意識が遠のいていった・・・

・  
・  
・  
・  
・  
浜辺に立つ京介・・・。

「ねえ、京ちゃん、何でこんな所まで来たの？」

「ちいを知るためさ」

「そう・・・何か分かった？」

「いや・・・まだだ・・・、ちい・・・教えてくれあの夕陽は・・・」

「・・・いいよ・・・教えてあげる」

穏やかな笑みでちいは答えた

「あの写真はね……」

ちいの口元は動いているのだが声が聞こえなかった

「ちい！なんて言っているんだ！聞こえない！聞こえないんだ！」

千佳の姿は次第に薄くなり消えていった……

意識がゆっくり戻り始めた……

ベットに寄りかかるように座った

『ちい……探せと言う事か……』

海辺での千佳はとても優しい顔をしていた

そしてとても寂しげだった・・・

『薬・・・は・・・辞めておくか・・・夕陽を見つける前に、こっちが  
くたばるかも知れんしな・・・』

タバコに火を点けた

窓辺に立ち繁華街を眺めた

スーツのポケットに手を入れると先日行った、例の飲み屋

「わらいや」の名刺が入っていた・・・

「・・・行ってみるか・・・気晴らしになるかもな・・・」



ホテルを出て繁華街へ店の前に着いた

・  
・  
・

ゆっくりドアを開けるとママの陽気な声が聞こえてきた

『いらっしゃいませー。あっ！待ってわよー！』

『・・・』

『この間、お釣り渡して無かったから』

『ええのに・・・』

『良くないわよ（笑）　あとさ、ごめんカウンターでいい？』

ママはそう言い、プロッと舌を出して愛らしい表情を見せた

そのママの表情に何か懐かしい物を感じた・

「なんだ……この感覚は……」

『まずはビールでいい？』

『ああ 頼む……』

『ところでさ あなた……お名前は？』

『俺か？俺の名は……』

『私、「マコ」、聞く前に言うべきよね（笑）』

『俺の名は「哀川 京介」や……』

『京介さんね、今うちの娘も来るからゆっくりして行ってね』

『 ああ 』

『 ねえ、そう言えば見つかった？ 』

『 いや・・・まだだ 』

京介は夕陽の写真を出した

『 もう・・・あまり日にちがないんや・・・ 』

『 そうなの？いつまでに？ 』

『 8月7日なんや・・・ 』

『 あまり無いわね・・・ 』

マコは写真を手に取り眺めて何かを考えているように見えた

『ねえ、こつ言つた陽なんて呼ばれているか知ってる?』

『アムウアム』

『そつ。アムウククろつて言つての?』

『それはここの方言なんか?』

『違つわ、沖繩?』

『おき・・・なわ・・・考えもつかんかった・・・そつか・・・』

「カラン・・・」

『おはようございます（＊・・・）』

娘が店に到着した。

京介は扉の方へ目を向けた・・・

言葉を失った・・・

目の前には「ちい」が居た・・・

o

## 第四章 4

「ちいなのか・・・」

「いや・・・フラッシュバックなのか・・・」

数秒間が長く感じ、色々な事が駆け巡った・・・

マコの娘は京介を初めて見るような顔をしてきよとんとしていた。

『いらっしやいませ)\*、\*初めまして！娘です(笑)』

「一体・・・どうなっているんだ・・・」

「ついに俺の神経はおかしくなってしまうたのか・・・」

目の前の事が信じられなかった

『どう？京介さん、私に似て美人でしょう)\*、\*』

マコは笑顔でそう言った。

『ああ……とても……素敵だ……』

自然と涙が溢れ出てきた

『ちよつとお！笑うところよ（笑）』

娘は京介の涙に気づいた

『ど……どうしたんですか？』

『いや……何でもない、知り合いに君があまりにも似てるもんでな……懐かしくて……』

『そうですか……なんか……ごめんなさい』

『謝ることはないよ（笑）』



その日の「わらいや」は数名の客が京介の他にも居たが比較的暇な方だった

他の客の接客をする娘をぼんやり眺めながら酒を飲んだ・・・

すると、視線を感じた娘が言った

『お客さん（笑）そんな見られたら、穴が空いちやいます（笑）』

『ああ・・・ごめんやで・・・』

『あらあら・・・（笑）うちの娘に惚れてしまったのぉ？』

『もう！辞めてよお母さん（笑）すみません・・・えっと・・・』

『京介さん・・・京ちゃんよ』

マコが娘に伝えた

『すみません、京ちゃんさん』

娘に名を呼ばれた瞬間、「ドクン」と脳が一瞬痛みが走った・・・

377

『いや・・・気にしないでくれ・・・』

激痛はどんとどんと激しくなっていた

「ヤバイ・・・フラッシュバックが来る・・・」

予兆を感じた。

京介は頭を抑える様にし下を俯いた

『どうしたんですか？大丈夫？』

『ああ・・・少し頭痛がするだけだ・・・薬がある大丈夫だ・・・』

薬を出して酒で飲もうとした

『あっ！ダメですよ、お薬はお水か白湯で飲まないと』

そう言い、娘は水を出そうとした

『あまりそう言つの気にしない方なんや・・・』

目の前がくらくらし始めてきた

『ダメですよ！！そう言つの大事です！！』

『だ・・・だいじ・・・？』

『そう（＊、＊）大事です 京ちゃんさん』

京介の意識は、娘の「大事」「京介ちゃん」で完全に堕ちた・・・

「大事・・・。」

「だいじい」

「京ちゃん」

「ちい」

「私、京ちゃんのお嫁さんになるの」

死んだはずの千佳・・・

ジャニスに何とか生き返らせてくれと言った自分・・・

「ジャニスからの連絡は無かった、千佳は冷凍保存してきているは

ずだ・・・」

「実は最初から、ちいは死んでいなかったのではないか・・・」

「俺はちいでは無く、別の人間を殺したのだろうか・・・」

意識が遠のいていく最中、そんな事が浮かんだ・・・

・  
・  
・

店内では急に倒れ込んだ京介に慌てていた

マコ、娘、店に居た客で、京介をBOX席に寝かせて暫く様子を見る事にした

その間、娘は京介のおでこに冷たいタオルを乗せ汗ばむ顔を何度か拭いた

そうこうしている内に京介の意識は戻った

・  
・  
・

『あっ！気がつきました？大丈夫？』

『・・・あ・・・ありがとう・・・』

娘の顔をゆっくりと見た

『君・・・名前は？』

『ちひろです（＊、＊）』

『ちひろ・・・さんか・・・色々が悪かった・・・』

起き上がりカウンターへ戻った

『ちょっと！京ちゃん、幾ら、ちひろが可愛いからと言って倒れる事ないでしょう（笑）大袈裟ね』

『全くだ（笑）』

マロは場の空気を和ますためにおどけた。

マロの気遣いを感じた



『ねえ、誰に似てるの?』

ちひろが言った

『とっても 大事な人に・・・』

『何処から来たんですか?京ちゃん?』

『俺は・・・東京からや・・・』

『えっ?東京?』

『ああ』

『似てるって・・・もしかして・・・うり二つ・・・じゃないですか』

『そうなんや・・・似すぎていてビックリしたんや・・・』

『それって・・・うちのお姉ちゃんじゃないかな・・・』

『お姉さん・・・?』

「ちいに姉妹なんて居たのか・・・?」

『私、双子なんだ(\*´、\*´)』

『双子?じゃあ お姉さんの名前は・・・』

『千佳だよ、綾瀬 千佳』

目の前が真っ暗になった・・・

・ ・ ・

何も言わず二人に写真を差し出した

「アコウクロ」

「ウエディングドレスのちい」

二人はとても嬉しそうに写真を眺めていた

運命の悪戯なのか・・・

ちいが導いたのか・・・

刹那の中痛みを感じた・・・

o

## 第四章 5

『わあ！ちいちゃんだあ！』

二人はウエディングドレスの写真を見て大はしゃぎだった

『で、ちいちゃんは？』

『ちは・・・今、仕事で海外の方に出張してるんや・・・』

真実を伏せた・・・

二人の喜ぶ顔を見ると、とても言えなかった・・・

『えー！海外？凄いいんじゃん！ちいちゃん、やれば出来る子だからね』（笑）』

マコは自慢げに言った

そのやり取りの中、ちひろは何処となく寂しげな京介を感じとった・

「……ちいちゃんが居ないのが寂しいだけかな……」

『あっ……この写真。』

ちひろは「アコウクロ」の写真を手にとった

『知っているのか……？』

『この写真はちいちゃんと約束した日の証明なの（\*、\*、\*）』

ちひろは写真の裏を見た。

『8月7日……。二人の約束の日（\*、\*、\*）』

『何を約束したんや？』

『それは……。二人にとって嬉しい事だよ（\*、\*、\*）その場所  
は沖繩の波の上ビーチだよ、今は橋の工事してて風景は違っけど  
ね（苦笑）』

『そうか・・・沖縄だったんだ・・・』

京介は居ても立っても居られなくなり、お金を無造作に置き店を飛び出した

『ちょっと！ちょっと！・・・また急に居なくなっちゃったわねあの人・・・（笑）ちいちゃんの事色々聞きたいのに』

マコは笑いながら言っていた

『あれ？この携帯は？』

『あら・・・京ちゃんのじゃない？』

ちひろは携帯を手に取った・・・

画面を見ると、千佳の顔が待ち受けに使われていた・・・

『うん（\*、\*）間違い無いね（笑）ホラ』

『あら（笑）重症ね（笑）』

『行先はきつと波の上ビーチね・・・私が届ける！いいでしよう？  
お母さん』

『はいはい。お任せします（\*、\*）』

京介はその晩に沖縄に向かう為に港へ向かった

幸い、最終の便に乗る事が出来た

『ちい、もう直ぐや・・・もう直ぐ着く・・・』

静かに聞こえる波の音・・・

この音をちいも聞いたのだろうか・・・

船は数時間航海をすると沖縄に着いた・・・

沖縄に着くと彷徨うように歩きだした

まるで・・・ちいに導かれるように感じていた・・・

・



翌日・・・。

ちひろは沖縄へ向かっていた、時刻は昼過ぎ・・・

夕陽を見るために京介は必ず波の上に来る

連絡が取れない京介と会う確実な方法とっていた

・ ・ ・  
ちひろは早めに海岸に着いた。

あちこち、京介の姿を探したが見つからなかった

「やっぱり・・夕方じゃなきゃ無理か・・」

近くの喫茶店で時間を潰した。

・ ・ ・  
辺りが紅く染まり始めた・・

「そろそろかな・・・（\*、\*）」

浜辺へ向かった

そこには夕陽を眺めている京介がいた

『京ちゃん・・・。』

『ちひろちゃん・・・どないしたん？』

『忘れものだよ（\*、\*）』

携帯を差した出した

『あっ・・・ありがとう・・・』

暫く、二人は夕陽を見つめた

『あんなあ・・・ほんまは・・・海外なんて行って無いねん・・・』

『だろつと思つた・・・本当は？』

『・・・』

言い出せなかった・・・

『あつ！そつだ！例の写真のちいちゃんとの約束の話聞きたいですか？』

『いいのか？』

『8月7日。何年先でも大好きな人が出来たら、それぞれがここに連れてくる事！って約束したの（笑）子供の頃よく遊んだ場所、私達の思い出が沢山詰まったこの場所に・・・』

『九州生まれではないんか？』

『うん。沖縄生れ、今は九州に住んでるけどね。だからこそ、ここは私達にとっては大事な場所だし、思い出と約束の場所なの』

『そうだったのか・・・ここで生まれたんや・・・』

『でも！未だに、ちいちゃんもちひろも約束果たせぬのまま（笑）  
京ちゃんが先に、ここに来るとはね〜（笑）しかも私と（\*、艸、）

』

『すまん・・・』

『・・・』

『あっ！そう言えば携帯、昨日何度も鳴ってましたよ（\*、、\*）

』

『携帯が？』

着信履歴を見ると電話の相手は・・・

「ジャーニス」

と表示されていた・・・。

o

## 第四章 6

着信はジャニスだった・・・。

『ジャニス・・・か・・・』

『ねえ、京ちゃん聞いていい？』

『なんや・・・？』

『今・・・ちいちゃんは？』

『ちいは・・・』



正直に伝えなければならぬ……

そう思えば思うほど言葉が詰まった

『今、言えないなら今は聞かない……だけど皆、心配してるの……だから言う気になったら教えてちょうだい……』

『もう少しだけ……時間をくれ……今日中に話す……』

『……』

ちひろは浜辺に座り「アコウクロ」を眺めた

『アコウク口って、不思議・・なんか寂しげに感じる時もある・・・  
子供のころはそんな事考えた事も無かった』

『・・・この夕陽には色んな意味を感じる・・・』

『例えば？』

『闇と光、絶望と希望、始まりと終わり、生死の狭間』

『毎日・・・どこかで誰かが生まれ、誰かが死んでいる・・・それは嬉しくて悲しい物語・・・』

『そうかもな・・・』

・  
・

「天国にあゝなたゝ  
（着信音）」

着信はジャニスだった

『ちひろちゃん、電話いいか？』

『うん（\*、\*）』

ちひろから少し離れた場所で電話に出た。

『ようやく繋がりましたね。心配してましたよ、京介さん』

『悪かったな・・・』

『今はどちらですか？』

『沖縄や・・・ここがちいの生れた場所なんや・・・』

『そうでしたか・・・』

『ジャニス、俺の目的はここで終了や・・・』

『・・・』

『例の薬だが、まだ残っている』

『どの位、残っていますか？』

『30錠以上はあるだろうな・・・』

『飲みすぎは危険です。気を付けてください』

『俺にはもう守るものも失うものもないんや、ここでお前とも』  
『よなら』  
『や・・・』

『ちょっと待って下さい!!』

『偶然だが、ちいの家族とも会えたもう思い残す事はない』

『では、尚更早まらないでください』

『何故だ？俺はちいの所に逝きたいんや・・・』

『分かりました・・・ですが・・・今一度、東京へお戻りください』

『ここで終わりたいんや・・・』

『ダメです。ジャニス一生のお願いです。一度帰って来て下さい！』

どんな時でも、京介に刃向かう事の無いジャニスが大きな声を出して言った・・・

『何故だ？何故そこまで・・・』

『京介さん・・・ ちいさんの最後を覚えていますか？』

『辞めろ・・・ ジャニスもう思い出させないでくれ・・・』

『いえ辞めません。今、一度思い出して下さい・・・』

京介は頭を抱え込み、苦痛に顔が歪みしやがみ込んだ

『何故だ……』

京介の脳裏には千佳の最後のシーンがフラッシュバックしてきた

『俺が……俺が……首をこの手で絞めたんや……それで……ち  
いは……』

『はい。確かにそう伺ってました。その後京介さんの指示で、ち  
いさんの体を冷凍保存しました』

『ああ……』

『……一度、ガラスケースが割れた事を覚えていますか？』



『俺が旅発つ前にな・・・』

『はい』

『それがどうした・・・』

『その後、ケースを調べるとそれは何か不自然でした。傀儡の呪縛なのか・・・それとも本人の思念なのか・・・未だ不明のままですが・・・』

『・・・』

『再度、冷却をかける為にケースを補修すると直ぐに他の所が割れ

る……。直ぐに連絡をすれば良かったのですが……。こちらで対処すべき事と思ひ報告はせずに対処をしていたのですが……』

『……』

『しかし、何度直しても同じ現象が続きました……。これは何かがある……。そう感じたのです』

『きつと、ちいの俺に対する怒りだろ……』

『いえ……。違います……』

『何だと言っんだ……』

『不思議に思い、ちいさんの手首を取ると今にも止まりそうでした  
が微かな鼓動が・・・』

『何！それは本当か！』

『ええ、急いで体温を少しずつ上げ薬を投与し、一度体に衝撃を与  
えたんです』

京介は電話をしながら振りかえった

そこには「絶望と希望の光」にも見える

「アロウクロ  
「

そして

千佳の双子の妹のちひろが優しい頬笑みで

京介を見つめていた・・・。

o

## 第四章 7 完結

ジャニスは言った

『ちいさんの脈は徐々に強まりました』

『ちは・・・戻ってきたんや・・・死んで無かったんや・・・』

『はい・・・私も正直信じられませんでしたけど・・・』

『いつだ？いつ、ちは戻ったんや？』

『昨日です。それで何度も電話を・・・』

『昨日か・・・ちいの家族と会った時か・・・導いてくれたのかも  
しれんな・・・』

『そうですね・・・』

『でっ、今は、今はどうなっているんだ？』

『昏睡状態ではありませんが命の危険は無いと思います』

『命が・・・ありがとうございます・・・ジャニス・・・』

約束の地で千佳の生存を知った事に運命を感じた・・・

『ただ・・・』

『ただ・・・なんや？』

『体の方の回復は時間の問題でしょうが・・・記憶や人格の分裂がある恐れがある・・・と私はそう考えます』

『どの人格が残っているか分からないという事か？』

『ええ、本体とは限りません・・・』

『ちいが無事でさえいてくれればそれでいい・・・』

『分かりました。では早めに東京へお戻りください。ちいさんは現在、日本女子医学病院で最善を尽くす治療をしています。』

『そうか・・・感謝する。ジャニス。2、3日待つてくれなるべく早めに帰る』

『分かりました。私の命を掛けてでもお守り致します』

電話を切った

電話が終わったのを見てちひろが京介の傍に行った

京介の顔は涙がぐちゃぐちゃになっていた。

『京ちゃん・・・どうしたの・・・』

京介はちひろに縋りつき大きな声を出して泣いた

『うわあああ・・・』



『きよ・・・京ちゃ・・・ん・・・』

ちひろは一瞬驚いたが肩を抱きよせた・・・

『何かあつたんだね・・・』

『ちいが・・・ちいが・・・助かったんや・・・死んだと思っ  
た・・・ちいが・・・』

無意識に言葉は感情となり出た

ちひろはとても驚いたが、うろたえる事もなく

『そう・・・良かったあ（＊、＊） 私達双子だから何かがあ  
ればきつと何かを感じる・・・胸騒ぎはあつたけど・・・大丈夫・・・  
・そう思っていたの。』

ちひろの言葉に救われた様な気がした・・・

『・・・ごめんな・・・黙っていて・・・』

そう言い、ちひろから離れた

『言いづらい事もあるよ）＊、＊、＊（、でも良い知らせだったから。良かったね京ちゃん』

『ああ・・・。信じられない・・・ここでちひろちゃんと会って、そしてちいが助かって・・・アコウクロ・・・ここは不思議な場所かもしれない・・・』

『うん）＊、＊（。始まりの場所だからね』

「始まりの場所・・・」

・  
・

・ ・ ・  
二人は、その晩のうちに、九州へ戻って「わらいや」へ向かった

『どうだった？京ちゃんアコウク口見つかった？』

マコはニコニコしながら聞いて来た

『見つかったよ、それとちいの事なんだけど・・・』

『うん。』

『待って、私が話すよ・・・京ちゃん』

『・・・』

『あのね、お母さん・・・ちいちゃん本当は入院してるみたい・・・それを伝えたくてここまで来てくれたのよ』

『そつなの？』

ちひろの気遣いを感じた

『言いだせなかったんや・・・すまん・・・』

『でも・・・偶然とはいえ、私達に出逢えて良かったよね（＊）  
、＊（』

『ちいちゃんの手よ。絶対そう！』

『俺もそう思うよ・・・本当に良かった・・・』

その晩は「わらいや」で飲み明かした

マコとちひろは「千佳」に渡して欲しいと言い手紙を書いた。

『マコさん。ちひろちゃん。二人の写真を貰えないか・・・ちいに

渡してやりたいんだ』

『何言ってるのよ（笑） 3人で撮りましょう（\*、\*）』

「カシャ」

「マコ」「ちひろ」「京介」3人の写真は笑顔だった

ポラロイドで写された写真を見ながらちひろが言った

『京ちゃんには、ちひろがちいちゃんに見えるんじゃない（笑）』

『よう似とる・・・双子と・・・』

『ねえ、京ちゃん。ちいちゃんの体が良くなったら今度は二人で来て』

マコはとても嬉しそうに言った

『そうします・・・』

一抹の不安はあったがきつと大丈夫、そう思えた

『私達も会いに行きたいけど東京となると1泊とかじゃね・・・京ちゃん娘をよろしくね』

『ああ・・・』

3人で撮った写真を鞆にしまった。

『あっ、そう言えば写真・・・』

そう言って千佳のウエディングドレスの写真を差し出した。

『これも忘れものだったね（笑）この写真凄く素敵（\*´、\*）』

千佳がミニのドレスで京介に甘えて頬にキスをしている写真だった。

『この時のちはとても大喜びで・・・とても可愛くかったよ。』

『いいなあ（\*´、\*）私も幸せになりたい！』

目の前にいる「ちひろ」と「千佳」・・・うりふたつ。

とても不思議な感覚だった

『大丈夫。幸せになれるよ。』

その晩はとても暖かい夜となった

「来た甲斐があった」

心からそう思った・・・。

。





## アコウクロ 第五章

翌日・・・

京介は早々に関東に戻る事にした

現在昏睡状態だとしても・・・

どんな人格で目覚めたとしても・・・

「ちいが生きている」

その事実が少しの希望を感じていた

『ちい、今帰るからな・・・』

福岡は駅に着いた

足早に改札へ向かおうとしていると

『京ちゃん・・・』

ちひろの聲がした

何処なく・・・いつか同じような風景で見たよな気がした・・・

旅発つ時に 見かけた「ちい」に似たように見えた女の事を思い出した

「あの時の女の人にはちひろだったのかもしれないな・・・」

そう感じたが聞きはしなかった・・・

『どづしたん？』

『見送りに来たよ！絶対、何も言わないで行くと思った（笑）』

『・・・ありがとな・・・』

『じね』

ちひろは小さな小瓶を渡してきた

『なんや？これ』

『アコウクロを見た所の砂』

『・・・ああ・・・ありがとう・・・ちいも喜ぶかもしれないな』

『どうかな（笑）あの子ヤキモチやきだから（笑）』

『・・・そう・・・なの・・・か・・・』

『そうよ（笑）　ねえまだ時間ある？』

『ああ、一時間くらいはあるかな』

二人は駅内でお茶をする事にした

『ちひろちゃん。ほんまにありがとうな・・・君に会わなければ何も分からないまま時間が過ぎていた・・・』

『ちいちゃんの思いが私達を出会わせたんだね、きつと』

『ちひろちゃん。実はちいは今、意識不明なんや・・・生死の狭間から生還はしたが意識が戻った時に記憶があるかどうか分からない・・・と医者から言われてる・・・』

『そうなんだ・・・きつと大丈夫だよ！（\*´、\*）自信もつて！私達の出会いにも意味がある事なんだからきつと大丈夫よ』

『ああ・・・そやな・・・大丈夫やんな・・・』

少しの沈黙があった・・・

・・・

『じゃあ そろそろ 行くわ』

『うん。』

京介は改札を通る前に振り向いた・・・

『ちひろちゃん・・・別に変な意味でもなねんけど・・・一つお願いがあるんや・・・』

『何・・・私に出来る事？』

『ああ・・・。1回だけでいいから抱き締めさせてくれないか・・・』

ちひろの顔は真っ赤になった

『……うん、いいよ……』

ちひろは両手を広げた

京介は感謝の意味で「ちひろ」に「ちい」を重ねた……

これからどんな結末が迎えようとも……

自分の心が折れないようにするためにも……

ちひろを抱きしめた……

『ありがとう……これで俺も頑張れるよ』

『うん、なんか気持ち分からないでもないから・・・それとこれ、私の番号、ちいちゃんの事で何かあったり・・・寂し時でも（笑）電話して』

『必ず連絡入れる』

改札を抜け京介の姿が見えなくなるまでちひろは手を振っていた

『きつと・・・きつと・・・大丈夫。』

新幹線が出るまで10分程時間があつた

京介は携帯を取り出した

「プルルル・・・」



『はい。』

『ひとみ、ワシや今から東京に戻る』

『そう……。見つかったんね……。もう……。関東を離れたら……』

『帰らなあかんねん』

『……』

『ちいは死んで無かったんや！意識は戻って無いが生きているんや』

『えっ……本当なの？』

『そう言う訳や時間ないから、また連絡するわ』

『必ず、必ずね』

『ああ』

ひとみは電話を切った後、京介の精神面を心配した

今までのフラッシュバックの影響による

幻聴や幻覚なのではないか……

「自分の弱い心が生み出した、もう一つの答えじゃないよね・・・」

「しっかりね・・・京介ちゃん・・・」

## 第五章 2

移動する新幹線の中、考えた

もし、目覚めた時、ちいの人格が「自我」であつたら・・・

本体の人格が完全に消え去っていたら・・・

俺は、ちいが甦るのならばそれでいい・・・

だが、ちいの家族たちにはどう説明する・・・

それも自分に残された、やらなければならない事・・・

そう心で捉えた。

ここ数日間の間の変化に精神も体も疲れきっていたせいか、いつの間にか寝てしまった。

「京ちゃん・・・京ちゃん」

「ちい・・・ちひろちゃんか？」

「ちいだよお！ちひろに会ったんだね」

「ああ・・・偶然だがな、お前が導いてくれたんか？」

「似てたでしょう？（笑）」

「姉妹がいたなんて知らなかった」

「何も伝えれないままだったもんね・・・」

「ちい、今東京へ向かっている」

「うん、知ってる」

「待っていてくれ」

「ねえ、覚えていて欲しい事があるの」

「なんや？」

「私が私である為に・・・私は頑張るから」

「どういう意味だ？」

「希望を捨てないで・・・どんな事があるとしても・・・」

「希望な・・・分かった約束する・・・」

『お客様！お客様！』

新幹線は東京に着いていた。

『ああ、ありがとう。長い事、寝てしまったようやな・・・』

ホームを出て人込みに紛れこんだ

「ピッピッピ」

「プルルル・・・」

『・・・ワシや・・・ジャニス』

『お着きになりましたか』

『病院に向かう前に話を聞きたい、そっちへいったん向かう』

『分かりました、お待ちしております』

HEAVENS CAFEへ向かった。

数分後、京介はVIPルームでジャニスと話をしていた。

『つまり・・・ちいさんは一時的なショック死のような状態であったのではないかと・・・』

『そんな事がありえるのか・・・』

『人間の体はいまだ医学や科学で解明されていない事が沢山あります。ただ、一時的とは言え血流が止まるという事はなんらかの障害は待逃れない・・・そう考えます。身体的なものか精神的なものかは分かりませんが・・・これから勝負です』

『そうだな・・・でも、ちいが生きていてくれさえすればそれでいいんだ』

『これは、あくまでも私の予測に過ぎませんが・・・ちいさんの中に植え付けた人格達のせめぎ合いが今も尚、続いている可能性がある』

『現在も尚・・・』

『ええ、そこで打ち勝ったものの人格が残る・・・もしくは』



『なんだ？』

『白です』

『白……植物人間か……』

『分かりません。今までの白の前例では植物人間はありません……』

『長くはもたない可能性があると言っ事か？』

『ええ、白の場合はです。ですが……例の女子医大で最善の治療を施しています。私が投薬したデータも渡してあります』

『ジャニス……そんな事したらお前まで……』

『私の事は気にしないでください、だてにこの世界で長年生きていた訳ではありません。大丈夫です。』

『・・・そうか・・・感謝する・・・ジャニス』

『・・・とても良い女の子でしたので・・・きっと白は避けられます・  
ですが人格の問題が・・・』

『向き合っよ・・・逃げずにな・・・約束したんやちいとな・・・』

『そうですね・・・きっと良い結果が訪れますよ』

『そうだな・・・病院の方に向かう』

『はい』

ジャニスは京介に千佳の入院している部屋のメモを渡した。

病室の部屋番号は「807」とあった

『807か・・・因果なものだな・・・』

病院に向かう前に千佳の住んでいた部屋に立ち寄った

着替えや必要なものを持っていこうと準備していた

ひとつ、ひとつ、千佳の物を手に取る度沢山の事が思い出された

子供みたいな 千佳

大人びた 千佳

一生懸命だった 千佳

必死だった 千佳

生きてかった

千佳

どれもこれもが愛しく切なく

その場を暫く動く事が出来なかった・・・

『希望・・・大事・・・だな・・・』

病院へ向かった

病院に着くと「807号室」は特別病室だった

「ジャニス・・・おおきに・・・」

「カチヤ・・」

病室の扉を開けた・・

。



## 第五章 3

病室に入ると呼吸器を付け

点滴をしている千佳がいた・・・

心電図の音が室内に鳴り響いていた

京介が茫然としていると主治医が現れた

『貴方は？』

『哀川です』

『ああ、ジャニスさんから伺っています』

『先生・・・。どんな状況なんですか？』

『現段階では何とも言いがた部分があります・・・。意識が戻って  
みないと分からないのが本音ですね・・・』

『そうですか……』

『大分、薬を投薬された様ですね……現在は薬の効果も切れ回復へ向かっているのは事実ですが……』

『私が悪いんです……』

『命あつての事ですから……最善を尽くします』

『よろしくお願いします』

医者は心電図を眺め点滴を交換し部屋を出て行った。

眠り続ける千佳の顔を眺めた

顔色も良く呼吸をしている事に安堵した

『ただいま……ちい、一人にしてごめんな……ちいの生れた



場所に行つて来たよ。お母さんと 妹さんにも会つてきた』

眠る、千佳の手を触りながら語りかけた

千佳の手は暖かく・・・「生きてる」

絶望の淵から生還したんだ・・・

本当に心から嬉しく感じていた

それからの毎日の千佳の病室を足を運んだ

目覚めない、千佳の着替えをさせたり

体を拭いたり、今、出来る事に尽くした

・  
・  
・

数日後・・・

携帯に着信があった

電話の相手は「ちひろ」であった。

「……」

直ぐに折り返した

『京ちゃん!どう、ちいちゃんは?』

『今はまだ……昏睡状態やな……』

『そう……でも……きつと、そろそろよ……』

『分かるのか?』

『夢を見たの』

『夢?』

『ちいちゃんが夕陽アムソックロ見ていたの……』

『そうか……双子の何か通づる部分なんかもな……』

『意識が戻ったら連絡してね』

『ああ 分かった』

それから数日間は千佳の様態は変わりはなかった

一ヶ月が経とうとしていた時、千佳に変化が起きた

京介は花の水を交換しに戻った

「カチャ」

そこにはベットから起き上がり窓の外を見ている、千佳がいた……

『ち……ちい。意識が戻ったんか？』

千佳は振り向いた

嬉しさと驚きのあまり直ぐに駆け寄った

千佳の表情はとても静寂だった

『私……大分……眠ってたみたい……』

『ああ、そっや……意識が戻って良かった……』

京介は思い出したかのようにナースコールを押した

『今、先生来るからな、無理せんと横になっ  
ていねばいい』

『あっ……はい。』

どこか他人行儀な感じな千佳……

人格……どの、千佳が残ったのだろう……

白では無さそうだ……そう感じた……。

『ちい……俺の事が分かるか？』

『ちい……私の事……？』

『自分の名前……覚えてないのか？』

『分からない……自分の名前……分からない……』

『君の名前は「綾瀬 千佳」って言った……暫く昏睡状態だったんだ。少しずつ思い出せばいいよ』

『……はい……』

千佳の顔は少し青ざめ脅えるような目つきだった。

『なあ、もう一度だけ聞いていいか？ 俺の事は……』

『しめんなさい……』

記憶が消えている・・・

いや目覚めたばかりだからだろうか・・・

沢山の事が脳裏を過ぎった・・・

o



## 第五章 4

看護婦が来た

千佳は現状を把握できていなく戸惑っている顔をしていた

『今から先生と看護婦さんから治療と説明があると思うよ、何も怖くない安心していい、それと俺がこれからは守っていつてあげるから。』

千佳は不安げな目で「コクリ」と頷いた。

担当医と看護婦は千佳の今の状態を調べていた

看護婦は病院でのこれからの生活に付いて話をした。

『あの・・・』

担当医は京介の所に来た

『意識はハッキリしてますね、恐らく体の方も差ほど問題は無いと思います・・・』

『先生……』

『言いにくいですが……多量の薬の接種があった時の後遺症か、それとも何か大きな精神的なショックがあったのかですが……記憶の方が……』

『ちいが、生きていてくれればそれで……』

『ずっとこうなのか、記憶が戻るのかは分かりませんがこちらでは最善を尽くします。』

『はい、よろしく願います……』

担当医は千佳の体の説明をし始めた。

千佳は不安げな顔で何度も京介を見ながら話を聞いた

「しめんなさい……分からないの……か……」

こちらを見る度、京介は千佳にほほ笑んだ

その反面、心の奥底に潜むかもしれない人格

何も知らなく、何も分れない千佳を愛しくも可哀そうにも見えた

『ちい。すぐ戻る、電話してくるからね』

『えっ……』

『大丈夫。すぐ戻るから待ってて』

『うん……。』

病院の屋上に行った

「プルルル……」

『はい』

『ちひろちゃん？』

『うん』

『ちい・・・ようやく目を覚ましたよ・・・』

『本当！！良かったあ・・・本当に良かったあ・・・』

電話越しに泣いているのが分かった

『言いづらいが・・・まだ目覚めたばかりと言つのもあるかもしれないが・・・記憶が・・・』

『えっ・・・どういふ事？』

『記憶喪失の可能性があると・・・医者から聞いている・・・』

『京ちゃんの事は・・・』

『分からなかったよ・・・』

『そんなあ・・・どうして・・・どうして・・・』

『ずっとこのままでは無いさっ・・・頑張るよ、時間をかけて・・・』

『

『そ．．．そうだよな。きっと大丈夫だよな．．．』

泣きじゃくりながら、ちひろは言った

『心配無い、また連絡するよマコさんにもよろしく言うておいてくれ．．．』

『うん．．．京ちゃん．．．頑張つてね』

『ああ、俺の責任や自分の命に代えてでも、ちいを守るよ．．．』

『私も近いうちにそつち行くから』

『自分が双子と知るのも必要かもしれないしな、ただ もう少し待ってくれ、今は時間が必要だ、彼女の時計は止まっていたんだ、俺がゆっくり取り戻すから．．．』

『頼んだわよ京ちゃん．．．』

『ああ．．．』

電話を切り病室へ戻った。

どんな形でもあれ・・・

ちいが目を覚ました事がとても嬉しく感じた

これから、千佳の身の回りの世話をしながら過ごす・・・

その中で見極めが必要になってくるだろうと感じた

千佳の中にいる、人格達の目覚めが無いとは言い切れない・・・

「自我」「サタン」の人格でちひろに合わせる訳にはいかない・・・

その時は白にするしかない・・・そう考えた・・・

「希望を捨てないで・・・」

千佳の言った言葉を何度も自分に言い聞かせた

「きつと 大丈夫だ・・・」

病室に戻ると千佳の顔が少し笑顔になった

『ちい、少し休みな俺はずっと傍にいるから』

『うん』

千佳は沢山の事と向き合わなければならぬ現実戸惑うだろう

「出来る事をする」そう誓った。

医者が聞いてきた

『千佳さんは自分の名前は覚えていたみたいですね・・・』

『・・・教えたんです・・・』

『そうでしたか・・・』

『心中察しますが・・・根気良く頑張りましょう。それが大事です』

『・・・はい』

担当医と看護婦は病室を出て行った。

その後、千佳はいつの間にか眠りに着いていた

「記憶は・・・戻らない方が良いのかも知れない・・・」

「新しい始まり・・・」

「ちいにはちいの時間・・・」

本気で、千佳の記憶が戻らない方が幸せなのかもしれない・・・

そう感じた。

辛い事・・・

悲しい事・・・

嬉しくて悲しい物語だった・・・



敢えて知る必要は無い・・・

深く大きな ため息をついた

ベットの横にあるテーブルにうつ伏せになり

じっとちいを眺めている間に京介も眠りについてしまった

・ ・ ・

深夜・・・二時過ぎ

千佳はふと目を覚ました

ベットの横でうつ伏せになり眠る京介をとて不思議そうに見ていた

私の事を知ってる

私の名前を知っている

私の名前を教えてください

身内なのだろうか・・・

ただ、今、分かっている事はこの人は

「優しくしてくれる」 そう思った

ベットを降りふらつく足で京介へ近寄りタオルケットを肩に掛けた

そして、窓を開けて空を眺めた

「星・・・綺麗・・・なんか懐かしい気持ち・・・」

「もっと・・・近くで・・・見たいな・・・」

そう呟いた・・・。

o

## 第五章 5

朝……。

「ん……いつの間にか寝てしまったんやな……」

京介の肩にはタオルケットが掛けられていた

ベットの方を向くと千佳は起きた京介を見ながらニコニコしていた。

『おはよう。ちい』

『おはようございます）＊、＊、＊（』

『体長はどつちや？』

『まあまあです）＊、＊、＊（』

タオルケットをたたみ立ち上がった

『花の水替えてくるな』

『はい）＊、＊、＊（』

花瓶の水を取り換えながらポーツと考えていた・

昏睡状態から目覚めた千佳の体の回復には暫くかかるだろう・・・

人格的な判断は今は出来ない・・・

今のところ 変化は感じられない

今までの記憶が無い・・・

「まだ 1、2日やもんな・・・」

何か焦りのようなものを感じていた

一日中、病室に居っぱなしと言うのも

何かこう不自然であろう・・・

ここ一ヶ月の間、様子を見ながら自分の滞在時間を考えないといけ  
ない

午前中、一度 顔を出し、昼頃に出て夕方にまた顔を出すような形  
が見舞に來ない日も必要かもしれないと考えた。

本来であれば、ずっと一緒に居たかったのだが

完全回復に向かうのに自分が千佳に障害である可能性があるかもし  
れない……

そう感じる所もあった。

人格の覚醒の引き金に成りえる……

無いとは言い切れない可能性だった。

京介の行動は一カ月間 予定通りに進んだ。

その間、千佳の回復は著しく体力は回復していった

病院内も自分で自由に動き回れるくらいになっていた。

千佳の方も京介が来るの居るのがいつもの風景となってきた

『あの人 そろそろ来るかな(\*、、(『

「コンコン」

『ちい、体調はどうや?』

『うん(\*、、\*(もう大丈夫です!』

『そうか、もう体の方は大丈夫そうやな。ほら、おみやげ』

京介は昔、千佳がよく飲んでいた「コーヒー豆乳」を差し出した。

『わあ(\*、、\*(これ美味しいんだよね!』

『・・・これの事を覚えているのか・・・?』

『えっ・・・。そう言えば・・・』

千佳は少し戸惑った

微かだが記憶が甦っているのかもしれない・・・

精神の方も断片的に回復しているのかもしれない・・・そう感じた。

『ちい……。少しずつ、ゆっくりだよ、良い事じゃないか思い出  
してきてるんやから……。』

『うん……。でも少し怖い……。』

『大丈夫だよ』

『うん、冷蔵庫から飲みものあるよ、売店で買っておいたの）＊、  
、＊（飲んで』

『そうか ありがとう』

室内に備え付けの冷蔵庫を開けた。

中には「ブラックコーヒー」が数本入っていた。



『・・・ありがとな・・・でも 何故「ブラック」なんだ？』

『・・・えっ・・・何の疑いもの無くそれを自分で手に取っていたの・・・  
違ったならごめんなさい・・・』 < > ( ) 『』

『いや これで良いんだよ・・・』

『良かった(\*´、´\*)』

千佳に取っては無意識だった・・・京介が「ブラックコーヒー」を好んでいる事を覚えていたようだった。

『少し怖いけど、あなたの事は思い出したいの・・・名前もなんか  
途中まで出かかるけど消えてしまうの・・・』

その表情はとても寂しそうだった。

## 第五章 6

「ねえ・・・聞いていい？」

「なんだ？」

「あなたは・・・誰かと暮らしてるの？」

「一人だよ・・・」

「そっか（＊、＊）また明日も来てくれる？」

千佳は安心したような顔をしていた

「ああ、必ず来るよ・・・おやすみ・・・」

「（＊、＊）はい。おやすみなさい」

病室を出るまで京介は心の底から込み上げる感情を抑えるのに必死だった・・・

「・・・」

千佳は京介が帰った後、冷蔵庫を開けた

『何で・・・分かったんだろう・・・』

ブラックコーヒーを手に持ちグラスに注いだ

「ブラックが好きか・・・」

グラス口を付け少し飲んでみた・・・

「うわっ 苦い。」

「こんなのが好きなんだ・・・」

頭の中にぼんやり声と人の影が浮かんだ

誰かと喫茶店に居る自分・・・

.....

『 苦いぞ（笑） 』

『 同じのが飲みたいの..... 』

.....

「 えっ？.....何今の..... 」

断片的な記憶が脳裏をかすめた.....

無理に思い出そうとすると激しい頭痛に襲われた

「 ダメ.....思い出せない.....どうして.....どうして..... 」

「どつして」「に繰り返される想いと嘆きが繰り返された・・・

それと同時に過去と向き合う事が少し恐くなっていた

翌日。

『おはよう ちい』

『おはよう（\*、\*）』

京介はコーヒー豆乳を買ってきていた、冷蔵庫にしまおうと冷蔵庫を開けた

『・・・ブラック 飲んだのか？』

『あつ・・・うん・・・昨日あれから・・・でも苦くて全部は飲めなかった・・・』

『だろうな（笑）』

『あつ・・・』

千佳は何をしゃべりかけようとした時に頭痛に襲われた

『ちい！ちい！どうした？どうした　しっかりしろ！！』

『・・・あっ・・・ごめんなさい・・・時々・・・頭が痛くなるの・・・』

『頭が・・・そうか・・・少し横になってくとい』

『・・・うん・・・』

人格の入れ替わりの際おこっていた頭痛・・・

千佳の中にいる人格が何かの拍子に、現在の千佳へ何かしらの警告として促しているのか・・・

だが、何故だ・・・切欠はなんだったんだ・・・

千佳の顔を見つめた

『どうしたの？』

『いや・・・心配でち・・・』

『あのね・・・時々こんな風になるの、まだ完治してないんだね（苦笑）』

千佳は自分の体の何か悪くてどうしてここに居るか知らない・・・

『ちい・・・』

『（＊、＊）なめに』

『外出はしばらくお預けだな、ちゃんと治ってからの方がいい』

『・・・うん・・・あのね、本当は少し恐くて・・・』

『そっか。なら無理はしない方がいい』

『それとね・・・』

『うん』

『何かを思い出したり、思い出そうとすると頭が痛くなるの・・・』

『そっか・・・さっきのもそっか』

『・・・多分・・・あなたの飲み物を何故知っていたんだろうって・・・』

千佳を抱きしめなくなった

「もう いい 何も思い出さなくていい」

『ちい・・・無理に思い出す事はないよ・・・』

『でも・・・このままじゃ、あなたの事すら思い出せないのよ・・・』



『俺の事は・・・大丈夫だ気にするな』

『でもお・・・』

『考え込まない方がいい・・・何も全部を知る必要は無い、今の方が大事なんだ』

『・・・』

『ちいは奇跡的に命が助かったんだ そのせいで記憶が無くなっていたとしても 命がある事に感謝をして、これからの事を考えた方がいい・・・』

『・・・せめてあなたの事だけでも・・・』

『きつと・・・そのうち思いだすさ・・・』

『（＊、＊）はい。そう信じます』

『・・・』

・

千佳は何かを考えているようだった

『どうした？』

『あのね、実は今の会話も何か懐かしい気持ちだったの・・・』

『懐かしい？』

『なんか怒られている言うか・・・教えてくれているって言うか・・・』

(笑)

自我からくる記憶であろう・・・そう感じた。

やはり最後のせめぎ合いで強く残ったのは自我の記憶なのだろうか。

敢えて話題を変えた

『ちい、君には家族が居るんだ』

『・・・かぞ・・・く・・・?』

『ああ、双子の妹がいるんだ』

『今、ここに入院しているのも知らせてある、少し遠くに住んで  
いるんだ。そのうち会いにも来るだろう』

『そうなの・・・』

『実はちいの妹さんに頼まれて俺は来ているだけなんだ、昔、お世  
話になったからな』

『そんなのウソだ・・・』

千佳は唇を噛みしめていた・・・

『嘘じゃないんだ・・・』

## 第五章 7

『家族・・・あなたと私の家族はどう言う関係なの・・・』

『・・・昔・・・偶然 知り合って それからの・・・』

『うそ！絶対 嘘・・・』

千佳は目に涙を浮かべていた・・・

京介もまた自分の本音を伝えたいのに伝えれないジレンマを感じていた。

『分かった・・・言うよ、ちいは双子って言っただろ？』

『・・・うん』

『ちいと間違えて声を掛けてな・・・それが始まりだ（笑）』

『えっ？・・・じゃあ私の事も昔から知ってる・・・っ事だよ・・・  
いつぐらいから知ってるの？』

『・・・ 3年位前からだよ』

『3年か・・・その時の私とあなたの関係は？』

『・・・友達だよ』

『ただの？』

『そうだ』

不満げな顔をした

『明日、家族の写真を持ってくるよ』

『あ・・・うん・・・』

『じゃあ・・・そろそろ 行くな』

『ねえ・・・』

『どうした？』

『あのね・・・お願いがあるの・・・』

『なんだ？』

『あのね・・・私、携帯が欲しい・・・ダメかな？あなたとも・・・すぐに連絡出来るように・・・』

京介は、ほほ笑んだ。

『分かった明日来る前に契約してくるよ(笑)』

『本当!(\*、\* )』

『ああ。(笑)』

携帯電話を欲しがる千佳が可愛らしく見えた

まるで子供のように感じた

色々考え、悩んだ末お願いしてきたのだろう・・・

『これで、いつでも連絡取れる(\*、\* )』

『来られちゃまずい時でもあるのか?』



『違う！あなたが来る時に病室にいたいから』

『・・・そつか（笑）』

『最近・・・よく屋上に行くから、その時にすれ違わない様に（\*、  
、\*）』

『探すからいいよ（笑）』

『少しの時間も無駄にしたくないの』

心なしか力強い口調に感じた。

『そつか・・・そつだな・・・明日な』

『うつん（\*、  
、\*）』

o

## 第五章 8

翌日

京介は千佳の希望通り携帯電話を購入した

俺達が連絡を取る以外にも今後、ちひろ、マコと連絡取ることになるだろう・・・

京介はそう思っていた

携帯電話を購入する時、昔、千佳が使っていた携帯を思い出し

千佳の好きな色や機種を選んだ。

「俺の番号だけでも登録しておくか・・・」

携帯に番号を入れたが名前をどう入力するか迷った。

千佳は自分の名前を思い出してない……

「あなた……にしておくか……」

病室へ着いた……。

「コンコン」

部屋に入ると千佳の姿が無かった

「屋上……とか言ってな……」

屋上へ向かった

屋上へ行くとパジャマ姿にカーディガンを羽織った、千佳がぼんやりベンチに座っていた。

静かに近くに行き

『お嬢さん、お隣いいですか？（笑）』

千佳はビックリした顔で振り向いたが京介とすぐに分かると

『どつぞ（\*、\*）』

笑顔になった

『ちい、約束のものだよ』

携帯電話を差し出した

『わあ　　ありがとう（\*、\*）』

『それで良かったか？』

『可愛い　　よく私の好み分かったね（\*、\*）』

千佳は京介と特別な関係であったことを信じたかった……

『……店員に一番人気のある商品が聞いたらそれだって言うから……それにしたんだ……』

『……なんだ……そっか……ありがとう凄く嬉しい（\*、\*）』

『携帯に俺の番号を入れておいた。あと今、妹さんの登録しておく』

『妹……記憶が……今は掛けられないよ……』

『記憶の件は少し話してある、突然掛けても理解はしてくれはるはずだ。だけど……掛けたいとき掛ければ良いと思うよ（笑）』

『うん……。名前は……』

『ちひろ。って言う名前だったよ。それで今、登録した。』

『ありがとう・・・それで・・・あなたは？』

『登録してあるよ』

『本当！？』

千佳の携帯でアドレスを見ると「あなた」で登録された番号があった

『・・・意地悪・・・』

『よく言われる（笑）』

『もう（笑） 変なところに徹底するのね、まっいっか（\*）  
、\*（ ） じゃあ 初電話するね！』

京介の携帯が鳴った

「天国にあーなた 一番近い島・・・」

『着った？（笑）』

『ああ（笑） 今度は俺がかけるな、ちいの携帯にも一曲だが着  
うたをDLしておいた（笑）』

『えっ？そっなの？』

千佳の電話を鳴らした

「逢いたくて、逢いたくて、逢いたくて、あなたにすぐに・・・」

千佳は携帯を取る事なく着ったを聞いていた



『この歌・・・切ないね・・・でも、なんか懐かしい気持ちになる・・・』

千佳がとても気に入って昔、着信に使っていた曲だった

『気に入らなかつたら変えていいからな（笑）』

『なんか胸が苦しくなる曲だね・・・』

千佳は目に涙を薄っすら浮かべた

『余計な事したな・・・ごめん変えな』

『うづん・・・この曲で・・・違う、この曲がいい・・・ありがとう・・・』

千佳はベンチに座る、京介に寄り添うようにくっつき頭をの肩に乗せた

京介はその事に触れる事無く 空を見上げた

空は夕焼けで東京の空も少しオレンジがかっていた

『なあ・・・ちい、アコウクロって知っているか・・・』

『アコウ・・・クロ・・・』

o

## 第五章 9

『アコウクロ……って……?』

『この写真……見てらん?』

『これが アコウクロ?』

『ああ……俺もこの間……初めて見てきた……とても綺麗だったよ』

『その時の写真にしては……少し古っばいね……これ』

『その写真はその時の写真じゃないんだ、ある人が昔撮った写真や……』

『思い出の……写真……なんだね……』

『きつとな……』

千佳は何か意味があるんだ・・・そう感じたが聞く事は無かった。

『あと・・・これ、ちいの家族の写真・・・』

『あっ・・・ありがとう・・・あれ・・・あなたが写ってる（笑）』

『ちいの家族の写真をくれと言ったら、一緒に撮ろうと言われてな・・・それで（笑）』

『何か複雑、私が写ってるみたい（笑） 本当に双子なんだね』

千佳は自分の過去に向き合う事に切なげな表情を見せていた

『ごめんな、ゆっくり思い出せばいい。と言っておきながら写真を  
見せて・・・』

『ううん・・・。いいの、家族も心配してくれているって事だもんね。  
・・・』

『ああ・・・心配していたよ、でも今のちいの現状を話してあるか

ら何も心配する必要はないよ 焦らずにな・・・』

『・・・うん』

『さあ 部屋に戻ろう』

二人は病室に戻った

室内の時計を見るともうすぐ夕食の時間になるところだった

『そろそろ夕食時やな、俺はそろそろ帰るな』

『待つて、一緒に食べていって、一人のご飯はとても寂しいの・・・  
特に今日は・・・』

『そつか、分かった・・・もし・・・あれなら部屋の方一人部屋じゃなくしてもらおうか?』

『・・・部屋はこのままがいい・・・ たまに・・・泊ってくれない？』

千佳の声はとても小さかった

『ちい、さえ良ければな（笑）俺は帰っても一人だし』

『じゃあ、今日！泊って！』

『今日か（笑）良いよ、ただ毎日は無理やで』

京介は子供の我儘みたいだと感じた・・・

だが、どこか妙に嬉しい気持ちだった

『うん、あのね急に寂しくなる時があるの・・・それは・・・何でか分からなくて・・・その・・・だから・・・そう言う時だけでいいから・・・』

『それが今日なんやな？』

『……うん』

『ちいがそれで満足するなう。』

『ありがとう』\*、\*、\*（\*）でも……何でそんなに私の事を考えてくれるの？』

『……昔、沢山世話になったのもあるしな……恩返しや』笑（）』

『そう……じゃあ……もう少しワガママになっても大丈夫？』笑（）』

『そうだな、もう少しなら』笑（）』

『\*、\*、\*（\*）』



『じゃあ、俺は自分の飯買ってくるよ』

『うん。．．．必ず戻って来てね』

『ハハハ、どうしたん？戻るよ（笑）』

『何か．．．いつもどこか不安で．．．』

『馬鹿だな（笑） 直ぐ来るから』

京介はコンビニに行って弁当を買ってきた

『ほら コーヒー豆乳。』

『ありがとう（\*、\*）』

二人は食事を始めた

食事を終わると京介は鞆から薬を出して飲んでいた

『それ何の薬？』

『これか？頭痛薬や定期的に飲まないと激しい頭痛に襲われるんだ』

『この病院で診て貰ってるの？』

『いや別の所だ』

『大丈夫なの？』

『心配ない、もう直ぐ必要無くなるから』

『治るところなんだね（＊、＊）』

『そうだな・・・明日、この薬を出してくれている所に行って来て  
もう大丈夫か聞いてくるよ』

『お願いそうして、何か不安だから・・・』

『俺の事より自分の事だぞ！ちい（笑）』

『はぁーい』

千佳は舌をペロツと出しながら笑って見せた

その晩、千佳の病室に京介は泊ることにした

薄明かりの中、京介の事を見る千佳・・・

『ちい・・・眠るまで起きているから安心して休みな』

『うん・・・ありがとう・・・おやすみ・・・』

千佳は京介の握る手を見ながらいつの間にも眠りに着いた・・・

o

第五章 10

翌朝……。

眠っている千佳を起こさずに花の水をかえにいった

千佳は寝起きにとっても不安そうな顔をする事を思い出していた……

「起きてから出かけないとだな……」

病室に戻り声をかけた

『ちい、おはようそろそろ起きや』

『うーん……』

『もう夕方やで』

『……えっ！えー！！』

『嘘だよ（笑）』

『もー！！びっくりした！（笑）』

『ははは、俺 そろそろ出かけるから黙って出かけるよりいいだろ  
う？(笑)』

『あつ・・・そっか、ありがとう何処に行くの？お仕事？』

『今日は昨日言っていた、例の頭痛薬を貰いに行くんだよ』

『あつ そうだったね(＊、＊) 行ってらっしゃい すぐに  
行くの・・・？』

『もう少し居るよ(笑)』

『良かった(＊、＊)』

『(笑)』

『冷蔵庫にコーヒー入っているよ(＊、＊)』

『ありがとな』

千佳の気遣いを感じながら・・・千佳が朝食を済ませるのを待った

食事を終えた

『じゃあ 行ってくるな(\*´、\*´)』

『うん終わったら電話してね!』

『どうしてだ(笑)?』

『えっ・・・ダメ?・・・』

『嘘やって(笑) 必ずするよ』

京介は笑顔で病室を出た

・  
・  
・  
・  
・

「HEAVENS Cafe」に向かう最中ジャニスに電話を入れた

『ジャニス・・・ワシや』



『お疲れ様です・・・』

『今日はc a f eの方か?』

『いえ、NEOSホテルの方に居ます』

『そうか・・・ではそちらに向かう』

『はい』

・  
・  
・

「NEOSホテルか・・・ここでは色々な事があったな・・・」

〈NEOSホテル回想〉 (傀儡 哀編参照)

京介の乗るエレベーターはジャンスの待つ最上階のラウンジへ着いた

「ガーツ」

エレベーターの扉の向こうにジャニスが待っていた

『京介さんお待ちしました』

ジャニスは直ぐにラウンジのVIPルームの方へ案内した

席着くなりジャニスは聞いてきた

『どうですか？例の彼女の様子は？』

『順調や・・・』

『そうですか。良かったです・・・人格や記憶の方は・・・』

『人格の分裂は感じられない・・・恐らく本来のちいの姿なのだろう・・・』

『そうですか・・・体を守るために人格達の消滅があつた・・・と言つ事なのかもしれませんね・・・』

『そうかもしれない・・・』

『記憶の方はどうなんでしょうか？』

『記憶は消えているようだ・・・』

『京介さんの事も思い出していないのですか？』

『ああ・・・』

『そうですか・・・ですが・・・その方は良いかも知れませんね・・・辛いでしょうが・・・時間をかければ少しづつ・・・』

『・・・俺はちいの退院の目処が決まったら姿を消す・・・』

『・・・京介さんの決めた事ですから私からは何も言えませんが・・・』

・選択肢は一つでは無い・・・私はそう思います・・・」

「・・・そやな・・・」

「・・・今日は何か用事でもあったのではないですか？」

「ジャニスは話題を変えた・・・」

「ああ、そうやった、例の薬だが、たまに頭痛があるんだその時に飲んでるんだが・・・体への影響は問題ないか？」

「現在・・・フラッシュバックや幻覚はあるのですか？」

「いや、ちいの意識が戻ってからは無いんだ・・・」

「そうですか・・・」

「このまま飲み続けていても大丈夫か・・・？それとも飲み過ぎる

と今度は俺が・・・白・・・か・・・  
☞

o

第五章 11

ジャニスには京介の顔を見た。

『どちらでもいいですよ（微笑）』

『どう言う事だ？』

『それは・・・ただの精神安定剤だったんですよ』

『何？フラシユバツクを止める薬じゃないのか？』

『京介さんの心の中での問題のように感じたので・・・思っようつた  
と・・・』

『そうやったんか・・・頭痛に効いたのは？』

『偶然か・・・思い込みかと・・・（笑）』

『そうか（笑）』

ジャンニスの少ない言葉から優しさを感じた・・・

京介はその場から千佳へ電話をした

「逢いたくて 逢いたくて 逢いたくてあなたに・・・（ちい着）  
」

『あつ あの人からだ。ハイ（\*、\*）待ってたよ！』

『ちい、最初はモシモシやで（笑）』

『分かってるよ！でどうだったの？』

『薬はもういらならしいよ』

『わあ（\*、\*）良かったあ』

『まだ先生と一緒にやから、またあとで掛けなおすな』



『はい（\*、\*）』

電話を切った

『ちいさん・・・ですか？』

『ああ・・・』

『本当に体が無事なだけでも良かったですね・・・』

『ほんまやな・・・』

『ジャニス・・残りの薬なんやけどな持つといていいか？何かと・  
安心な部分もあるでな・・・』

『ええ構いませんが飲みすぎないでくださいね・・』

『分かった、飲まんと思うけどな・・（笑）』

ジャニスは軽く微笑んだ

一通り、話が済むとウエイトレスがコーヒーを運んできた

『お久しぶりです（\*、\*）』

聞き覚えのある声に京介は振り向いた

『……ゆな……』

『ここで働いてもらう事にしたんです』

ジャニスはさりげなく言った

『そうか……色々ありがとうかな……ジャニス』

『何をおしゃいますか・・・仰せのままにですよ（笑）』

京介は元気そうな「ゆな」の姿を見て嬉しくなった

そしてジャニスの心遣いに感謝した・・・。

第五章 12

『もしもし・・・ちい。』

『うん』

『今からそっちに行くからな』

『うん』\*、\*、\*、\*

病院へ向かった。

・  
・  
・

「ガチャ」

『お帰りなさい』\*、\*、\*、\*（笑）』

『ただいま（笑）』

和やかな空気を感じた

『あのね、外出許可が出ました！でも一人じゃダメだって（笑）』

『そうか・・・良かったな・・・天気の良い日にするか』

『その日は日帰り？』

『外出だろ？』

『あつ・・・外泊でもいいみたいよ（＊、＊、＊）』

『そうか・・・遅くなりそうだったらそうしようか』

『うん（＊、＊、＊）』

千佳は考えていた・・・

泊りでもいい一緒の時間が多ければ多いほど

何か思い出せるかもしれない・

『どこか行きたい場所はあるか?』

『喫茶店(\*、\* )』

『茶店?どこでもいいのか?』

『そう聞かれても・私 分かんないから・あつ!でも アンテナ  
イークな感じの所がいいな(\*、\* )』

『分かった、外出はいつ位にする?』

『来週なら検査とかもないみたいだし、来週じゃだめ?』

『じゃあ来週な、今週出かける時の服を何着か持ってくるよ』

『えっ・・・どうして・・・あなたが私の着替えを・・・買ってくるの?』

『あ・・・いやそうじゃないんだ、勿論何か欲しい服があれば買って

くるよ・・・』

『・・・だから何で？』

『妹さんから預かってきたんだ・・・』

『・・・なんだ・・・そっか・・・』

『そう言う事だ・・・』

千佳は心に引つ掛かりみたいなものを感じた・・・

『まっ・・・いや（笑）楽しみだなあ（\*、\*）』

『そっだよな・・・毎日病院じゃ息もつまるよな』

『うん・・・なんか・・・籠の鳥みたいで・・・』



『籠の鳥？』

『うん、ある程度の安堵とある程度の不満・・・そんな感じかな  
笑（』

『・・・そうかも知れないな・・・』

『でもね・・・それも少し懐かしいような気もするの・・・（笑（』

『・・・』

『・・・もう・・・何か言つてよ（笑（』

『今のちいの方がいいよ・・・昔は少し人の事を考えすぎていてと  
ころがあったから・・・』

『なんか・・・複雑だよ・・・』

千佳は寂しそうな顔をした・・・

『・・・じゅめん・・・』

その後、外出する時の行くところなどを話した

・  
・  
・

千佳が寝るまで病室に居てその後帰った

京介は千佳と暮らしていた部屋へ居た

千佳の服を何着か並べてみた・・・

ショートパンツやジーンズなどが千佳はとても似合っていた・・・

服以外でも化粧品や香水なども並べた

「これでいいかな・・・」

それぞれを別々の箱や袋に詰め大きめの鞆に詰め込んだ

一通り準備が終わると部屋をゆっくりと眺めた・・・

部屋には千佳のカクテルドレスが飾られていた

「一応・・・しまっておくか・・・」

洋服ダンスの中にカクテルドレスをしまい込んだ・・・

「もし・・・ちいがここに来たいといったら・・・」

そう考えての事だった・・・

京介の中には二つの葛藤があった・・・

「思い出して欲しかった気持ち」

「何も知らない方がいい・・・」

窓を開けて タバコを吸った・・・

幾つもの千佳との思い出が甦ってきた・・・

壁に貼ってある自分（京介）の写真を一つずつ剥がした・・・

「・・・」

「楽しみだな・・・ちい・・・」

「例え・・・どんな形になろうとも・・・例え離れ離れになろうとも・  
・俺はお前を愛している・・・例え一緒に居れなくとも・・・」



## 第五章 13

着替え類を持ち病室へ行った

千佳は外出の事を話しながら喜んで服を取り出していた

『私、こう言う服を着ていたんだ〜（\*、\*）』

『みたいやな・・・（笑）』

服の他に香水やら化粧品を取り出して

『へえ〜（笑）』

笑みを浮かべながら一つ一つを確かめる様にしていた

『これはっ..』

小さな紙袋を手に使っていた

『・・・』

『あっ・・・』

千佳は真っ赤な顔をしながら聞いて来た

『これも・・・あなたが・・・？』

『そんな訳ないだろ（笑）妹さんから預かったままだよ（笑）』

『そっか（笑）そうだよね・・・下着だもんね（笑）あー恥ずかしい  
（。、）』

『（笑） 見たろうか？』

『（< >）だめえ』

千佳は恥ずかしそうにそそくさと終い込んだ





だが、その事は触れずに接していた

「ドッキッ」として言葉に詰まる事も多々あったが今のまま方が千佳の為である……

いつの日から暗示のようにそう思うようになっていた

『なあ……ちい……今一番思いた……いや知りたい事はあるか？』

『……あるよ(\*、\*、\*』

『なんだ？』

『あなたの事、あなたは私にとても親切にして大事にしてくれる……それなのに私はあなたの事を思い出せない……そんな自分かとても……嫌なんだ……』

『ちい……大丈夫だ……思い出しても思い出ささなくても俺は変

わらない  
『

『・・・本当は私達・・・恋人だったんじゃないの・・・？』

一瞬、時間と音が止まった様に感じた

『かもな（笑）』

『誤魔化さないで！』

千佳の目には溢れんばかりの涙がたまっていた

『すまん・・・』

京介は千佳を静かにそっと抱きしめた・・・

『・・・なんか・・・懐かしい気持ち・・・』

小さな声で呟いた

『うん？』

京介は聞こえないふりをした・・・

『なんでもなーい・・・』

千佳はギュッと力を入れてしがみ付くように抱きついた

昔ならここで「大事」と言うんだろうな・・・そう感じた

昔を懐かしむ様に千佳を包み込むように優しく抱きしめた

第五章 14

外出許可 前日……。

京介は約束通り外出の前の日病室に泊ることにした

千佳が病院をお願いしたのだろう……

病室にはいつもは無いベッドが新たに増えていた。

『このベッドは？』

『いつも泊ってくれる時は椅子で寝るじゃない、それじゃ……可愛  
そうな気がして付添い様にベッドを入れて貰ったの遅くなってごめ  
ん（笑）』

『そうか（笑）気にせんでもいいのに……でもありがとつな（\*）  
、  
』

気遣いが嬉しく感じた

千佳の行きたいところには体に無理が無い限りは全部見せてやりた  
い・・・

京介はそう考えていた

『ねえ、私、前、叫んだとか言ってたじゃない？』

『ああ』

『それは・・・昼？それとも夜？』

「希望ヶ丘公園」の事を聞いてきた

『夜と言っか夕方くらいやったな（笑）』

『そこにも行きたい！』

『 帰りの時間を見て行くか 』

『 ＊、 ＊（ウン。 ねえ今日は日帰り？泊まり？』

『 帰りの時間を見てだな・・・なるべく日帰りの方向でと考えている 』

『 えー・・・どこかに泊ろうよ（／／／／（ 』

千佳の大胆な発言に驚いた

千佳は京介の反応を見て顔を赤くしていた

『 ……それでも・・・いいか（笑） 』

『 ＊、 ＊（やったー 』



小さくガッツポーズをした

『明日、ここで朝食を済ませてから出掛けるんやろっ？』

『えー・・・』

『朝早すぎてもどっこも店は開いてないで』

『えー・・・』

『マクドとかファミレスなら・・・開いてるか・・・』

『そこがイイ！(\*´、\*´)』

『そうか(笑)分かったよ(\*´、\*´)』

『明日・・・楽しみだなあ』

『今日は早寝せなあかで』

『（＊、＊）うん！』

二人は夕食を済ませると明日の予定を話し早めに寝る事にした

・  
・  
・  
・  
・

千佳の寝息が聞こえて来た・・・

縋る様に甘えられる気持ち

素直に気持ちをぶつけてくる心

可愛らしくも意地らしくも感じる想い

沢山の想いの中、苦悩や葛藤で本当は苦しんでいるのに・・・

本当に生きてて良かった・・・

・  
・

・  
・  
・  
千佳の寝顔を見ている間にいつの間に眠りに着いた……

AM2時……

少し肌寒くて目を覚ました

「……ん……寒いな……」

千佳は窓を開けて空を見上げていた

『どうした？眠れないのか？』

『あつ……ごめん起こしちゃった？寒いよね』

『いや大丈夫だよ、どうしたんだ？』

『何か……分かんないけど……空が……星が……見たくなって……』

『そうか・・・明日はもっと星が近くに見える場所へ連れて行くな・  
』

『えっ？』

京介の声は千佳にちゃんと聞こえてなかった

『何て言ったの？』

『何でもない（笑）明日のお楽しみや、ほら早く寝ないと明日行かないぞ（笑）』

『もぉー！意地悪！（笑）』

千佳は京介のの布団に潜り込んできた

それは・・・さも当たり前のように・・・

『・・・』

『あっ・・・ごめんなさい・・・』

千佳は途中で我に返る様に自分のベットへ戻ろうとした

『戻らなくてもいいよ(笑)。ちい、おいで』

千佳の顔は凄く嬉しそうな顔をしていた

o

第五章 15

『ちい。おいで)\*、\*』

千佳は嬉しかった。

「何故かそう言ってくる」・・・そんな気がしていた

『もう(笑)子供扱いしてえー!!』

『ええから・・・おいで』

『もぉー!(笑)飛び込みたくなっちゃっじゃん』

『そうしたらいやんか(笑)』

『えっ・・・私・・・前はそういうことしてたの・・・』

『どうかな(笑) ははは』

『うーん・・・複雑だよ・・・でもね、本当に嬉しかった・・・ありがとう（\*、\*）』

京介は微笑んだ

『さあ、明日も早いんやし、もうおやすみ』

『うん。おやすみ（\*、\*）』

二人はそれぞれに休んだ

・  
・  
・  
・  
・

翌日

『おっはよー！起きて起きて！』



『んっ……お……おはよう……』

既に千佳は出かける準備を始めていた

『ほら早く起きて!』

『俺は服を着替えれば 大丈夫だ……』

『だめえ!顔洗って、髭を剃って!!大事なデートなんだから!』

千佳は急かすように京介の手を引っ張った

『うん……ところで、今何時や?』

『六時だよ(\*・・・)』

『早過ぎる……』

そう言いながらも7時には病院を出た

『うーん！気持ちいい。やっぱり地上は違うね（笑）』

『地上？』

『ほら、いつも屋上だったり病室だったり、空中みたいなもんじゃ  
ん（笑）』

『面白い事言うな（笑）』

『そうかな（笑）』

千佳はとにかくはしゃいでいた

『まずは……マックに行きたい！』

『……』

『知らないの?』

『マクドやる?...』

『マクドナルドって、「マック」呼ぶんじゃないの?』

『「マクド」やで、全国共通で「マクド」呼ぶんや大阪がそう決めてんねん』

『(\*、艸、)フッフ はーい』

マクドナルドに着くと直ぐに注文を始めた

『ねえ、何食べる?ブラックでいいんだよね?』

『飲み物だけでいいよ(笑)』

二人は通行人を眺めれる席へと座った

『ねえ、私は昔ここに来たことはなるの?』

『どうやるな・・・俺は初めて来たで』

『そっか(笑)マクドは初体験なんだね(＊、、(ウンウン』

千佳は自分なりに過去の自分が少しずつ分かるような気がして嬉しかった

その後、二人は外をブラブラ歩き始めた。

1時間程歩くと千佳は辛そうな顔をしてきた

『大丈夫か・・・?』

『うん』

『無理したらあかんで』

『・・・ファミレスに行ってみたい(＊、、(』

『ええで』

『そこは？』

『何？』

『私、行ったことあるのかな？』

『どうやるな・・・俺とは無いかもな（笑）』

『じゃあファミレス！』

『なんやそれ？』

『ははは 行ってみたいやん！』

『うわっ！出た、偽関西人！』

『ハハハ』

『もう少し歩くけど大丈夫か？』

『うん（＊、＊）』

二人はファミレスに向かった

。

第五章 16

外は徐々に人が増えてきていた。

その中を歩いていくうちに慣れない雰囲気には少し疲れてきているようだった。

『ゆっくり歩こう』

そう言い手を差し出した

『うん・・・ごめん)\*、\*(・・・』

ファミレスに着くと千佳は少し切なそうにしていた

『大丈夫か?』

『うん、少し興奮してたから(笑)大丈夫!』

『そっか・・・俺、WCに行ってくるわブラック頼んでおいてな』

『うん（\*、）』

京介はWCへ行った

千佳はブラックコーヒーを店員に頼んだ後テーブルには京介のセカンドバッグが目に入った

カバンはチャックが開いていて何か物が落ちそうになっていた

「何かが落ちそうだな・・・」

千佳は落ちそうな物をカバンの中に押し戻そうと手を伸ばした

『・・・写真・・・かなんかかな・・・』

「カツカツ・・・」



『頼んでおいてくれたか?』

『あっ・・・うん。何かカバンから落ちそうだよ』

『うん? ああ・・・そやな』

カバンの中身を押し込み椅子へ置いた

『あー・・・なんか・・・やな感じ・・・』

『なんでや?』

『見せれないもの?』

『見たいん?』

『嘘だよ・・・なんでも許さないで、私、我ままになっちゃっつじゃん  
(笑)』

『アコウクロの写真ね』

『・・・夕陽の』

『その』

『もう一回見せて』

アコウクロの写真を渡した

『日が沈み・・・昼から夜に変わる様は・・・何か・・・人生の様に感じる 陰と陽・・・生と死 終わりと始まり・・・沢山のことを連想してしまうんだ・・・』

『懐かしくもあり・・・憂いと切なさを感じるね・・・』

京介は微笑み千佳を見つめた

『ありがとう（\*、\*）』

写真を受け取った

カバンの中にはアコウクロ以外にも千佳のウエディングドレスの写真が入っていた

京介は気づかれないようにカバンの奥へしまい込んだ

『ちい、今日は行きたい所に連れていくからな』

『うん（\*、\*）』

『どこか行きたいところはあるか？』

『沢山あるあるよ（\*、\*）』

『少し休んだら向かおうな』

『うん、あのね、お洋服が見たいの（\*、\*）』

今までに見たことない千佳の表情だった・・・

それはとても新鮮でもあり

何か切ないものがあつた

過去の記憶

現在の千佳

それを100%知る者は誰一人いない

思い出や記憶が無い事が良いことなのか、そうじゃないのか・・・

分からなくなってきた・・・

ただ千佳のはしゃぐ顔を見ては心にこみ上げるような想いを感じた・

•  
•  
o

o

第五章 17

はしゃぐ千佳を見つめていた。。。

『何?』

『いや(笑) 何でもない、行くか?服が見たいんやる』

『(\*、艸、)うん』

百貨店へ向かった。

店内に入ると千佳は直ぐに女性服の階へ向かった

『こつちだよ(\*、、\*)』

笑顔で着いていく京介。。。

気に入った服を見つけるまで沢山ある店舗の中を見て歩いた

『どうなん？いいの見つかったか？』

『沢山ありすぎてまよっちゃう（笑）』

『そうか（笑）』

『あっ！あれ可愛い（\*、\*）』

千佳は店舗に入って行った

千佳の後を付いていった

千佳は数分間、色々見ていた

『ねえ、これとこれどっちが似合うかな？』

『どっちも似合うよ』



『そっじゃなくて!どっちか!』

両方の頬をぷーっと膨らませた

『すみませーん これ両方ください』

『もぉーう!(笑)』

こんな事が数回繰り返されながら買い物は続いた。

『沢山買ったかった(\*´、\*´)』

『良かったやん(笑)』

『なんかお腹空いてきた(笑)』

『そろそろ昼やもんな、このビルの景色の見えるレストランにでも行くか?』

『うん（＊、＊）』

『昼食べたら薬飲まなあんで』

『うん（＊、＊）分かった』

昼は景色の良いレストランで過ごした

食事が終わると・・・

『タバコいいか？』

『・・・いいよ（＊、＊）』

千佳に煙が行かないように椅子を少し放した

タバコをくわえ火を点け煙を吐く・・

この一連の行動を千佳はじっと眺めていた

『 どうしたん？ 』

『 へえ〜って思ってた（笑） 』

『 タバコか？病院の屋上でも吸ってる人いるだろ（笑）？喫煙所でも 』

『 いるよ（\*、\*） 』

『 吸いたいん？ 』

『 んー・吸わない（笑） 』

『 変な奴（笑） 』

『 いいのー！（\*、\*） 』

何かを思い出しそう・・・どこか懐かしげな気持ちそんな気がして  
なかった

その後、千佳は書店に行きたいといった

そこでファッション雑誌や小説を購入した

病室で暇持て余さないように治療で気負いたくないから・・・

千佳はそう言っていた

『・・・そうか・・・。今日はいつもの事は考えないで楽しもうぜ。  
なあ ちい。』

『・・・うん・・・。』

千佳は少し涙目に見えた

『ねえ、喫茶店。』

『・・・喫茶店？』

『ほら、アンティークな感じの喫茶店に行きたいって言ってたじゃん。』

『・・・そうだな・・・行くか。少し離れた場所にあるからな・・・タクシーでいいか？』

『歩きでも大丈夫だよ（＊、＊）』

『いや・・・タクシーで行こうや・・・。』

『うん』

タクシーで行かないと、途中ブライダルサロンの前を通ることにな

る．．

そうならば、「めぐみ」も気づくかも知れないし．．

千佳の記憶との絶対的な接点となりえると感じていた．．

ブライダルサロンを避けるために徒歩は避けたのだった．．

『ねえ。今から行く喫茶店は私、行ったことあるのかな？』

嘘ばかり付く自分に何が本当でどれが正しいのか分からなくなっていた

だが、千佳の人生を狂わしたのは自分．．。

全てを語るのが本当で優しさでは無い．．そう考え．．

『無ごとく思ひよ・・・』

思い出の場所を伏せた・・・

。





第五章 18

二人は Paranoia Cafe に向かった。

「カリーン」

『いらっしやいませ・・・きよ・・・』

京介はマスターを見て、手を払うようにし口を閉ざした・

『・・・かしこまりました・・・』

マスター多くを語らなかつた・

『えっ?..どうしたの?..』

『何でもないで(笑) おのおっちゃん。しょうもない昭和のギャグばかり言いよんねん、だから もうええわ。って感じにな(笑)』

『昭和のギャグ？（笑）聞きたい（\*、\*）』

『・・・ほんま寒いねん・・・やめとけ・・・（笑）』

『そっか（笑）でも・・・何か言いかけてたような気がするけど・・・』

『そっか？気のせいや（笑） どうせつまらんギャグやろ』

『・・・わかったあ』

千佳は少し不満げだった

京介が席を選ぼうとすると千佳は窓際の席を選んで座った・・・

そしてじっくりと店内を見回した・・・

「なんか・・・見た事あるような・・・ないような・・・」

心の中でそう思った

『どっしたん？』

『何でもないもーん』 < > 『』

『・・・何にする？』

『・・・ブラック・・・』

京介の記憶が一瞬蘇った・・・

それと同時に少し頭痛を感じた・・・

目の前の景色が歪んで見えた・・・

『どっしたの?』

『いや何でもない・・・』

『ちは・・・カフェオレにする。』

『そうか それがいいな(笑)』

『残すと悪いしね(苦笑)』

『そやな 頼んでくるわ』

京介はマスターの元へ行つた

『ブラックとカフェオレ』

『かしこまりました。 お久しぶりですね・・・京介さん』

『ああ・・・俺の名前は伏せといてくれ・・・』

マスターは何か事情があるのだろう・・・

あの一緒の女性も見たことがある・・・そう感じた・・・

『かしこまりました。お客様』

京介はマスターの肩を軽くポンポンと叩き席へ戻った。

『直ぐ来るからな』

『うん（\*、\*）』

千佳はニコニコしながら言った

『なんかウキウキ気分なんだけど（＊、艸、）』

『何よりだ（笑）』

以前の記憶がそうさせているのか・・・

現状が純粹に楽しいのか・・・

『お待たせいたしました』

『カフェオレの方は・・・』

『（＊、）ノはい。』

「カチャ」

『ブラックで御座います』

「カチャ」

『マスター、もう少ししたら食事の方も頼む』

『ありがとうございます。お客様』

マスターは直ぐにカウンターへ戻った。

「昔、ここに京介さんが連れてきた事のある娘さんだな・・・」

二人の表情を見た

今までの京介とは少し違う・・・

女の子も何か楽しそうだけど悲しさを感じる・・・

「何かあるんだな・・・あの二人・・・」

そう感じた・・・

その後、食事の注文を頼み食事をしながら色々話をした。

『ねえ、ここのお店・・・懐かしい気持ちになるんだけど・・・』

『来た事あるのか?』

『違うでしょう・・・あなたが連れてきた事があるんじゃないの?』

『そうだったかな・・・俺は何度か来た事があるけどな・・・』

『そつやって隠すんだ・・・』



『……隠してなんていない……』

『じゃあ……なんで……』

『一度くらいはあったかもな……忘れていたかもしれん……』

『……嘘！いいよべつに……。少し意地悪したくなったの……』

京介は千佳が気持ちを伏せた事が分かった・

『そうか（笑）』

『ねえ、食べたなら例の場所！行きたい（\*、\*）』

『そやな（\*、\*）』

京介は敢えて千佳の気遣いに気がつかないふりをした。

二人は食後「Paranoia Cafe」を出た。



## 第五章 完結

二人は希望が丘に向かった

『ここなんだ・・・』

『そうだ、さあ行こう』

京介は無意識に千佳の手を取り展望台を目指した

千佳は一瞬ドキッとしたが言葉には出さず手を引かれ歩いた

「うれしい・・・」

ほんの数分歩くと一面の星の空が見えた・・・

『わあ・・・凄い・・・』

包み込まれるような・・・

吸いこまれるような気がした・・・

『どっちゃん・星・近いやろ?』

『・・・うん・・・』

小さな声で返事をした・・・

何故か涙が込み上げてくるのが分かった・・・

それを必死で隠そうとしている自分にも気が付いていた・・・

『・・・どっしたん・・・ちい・・・』

『分かんない・・・分かんないよう・・・』

『ちい・・・』

『どうして私はあなたの事を思い出せないの・・・』

ちいは号泣した

『ちい・・・別に思い出さなくても、こうして今一緒にいれるやないか・・・』

『違うもん・・・違うもん・・・』

『・・・』

千佳の肩を抱いた

『ちい・・・』

『はい・・・』

京介はもうこれ以上苦しめたくない・・・そう感じ始めた・・・

『俺の名前はな．．．』

『待つて．．言わないで．．お願い．．．』

涙声だった

『自分で．．自分で思い出したいの．．そうじゃないと．．意味無いよう．．．』

『．．．そうか．．．』

自分が千佳の傍に居る事で苦しめている．．．

ただ一緒に居ればいい．．それだけでいい．．．

身勝手な想いだったのかもしれない．．．

『ごめんな．．．なんか．．．余計苦しめてしまったな．．．』

『違うの．．．違うの．．．嬉しいの．．．でも．．．なんか．．．自分の中で何か切ない想いが込み上げて来て．．．』

『そうか．．．』

．．．  
．．．  
．．．  
．．．  
1時間後．．．。

『帰ろうか．．．』

『うん』

『遅くなってしまったな．．．今日はどいつする？病院にもどるか？』



『・・・何処か・・・泊ろつか・・・』\*、\*  
『』

千佳は恥ずかしそうに言った

『いゝよ』

二人は丘をおり始めた

『ねえ、あなたの部屋は近いの?』

『うちか?・・・ここから・・・20分くらいかな・・・』

『一人暮らし・・・だった・・・よね?』

『ああ・・・今はな』

『・・・今は・・・なんだ・・・』

『 そうだ（笑） 』

『 もー！ムカツク！！（笑） 』

千佳はジェラシーを感じたと同時に・・・

もしかして前に一緒に住んでいたのは自分かも知れない・・・

そう感じた

『 ねえ・・・あなたの部屋が見たい・・・ダメ？ 』

『 ……部屋か・・・散らかっているし・・・タバコ臭いしな・・・ 』

『 ねえ・・・ダメ？・・・ 』

千佳は縊るような目つきだった・・・

『分かった・・・けど少し片づけたいから待ってくれるか?』

『私がやってあげる!!』

『いや・・・それはいいよ・・・』(笑)

『えー』(笑)

色んな事が頭を過つたが・・・

ここで何も思い出さない以上・・・

部屋を見せても何も変わりはないかも知れない・・・

無理に断る様な気持ちにはなれなかった・・・

o

## アコウクロ 第六章

二人は部屋についた・

『へえ、ここなんだあ（\*、\*）』

千佳は京介と昔、自分が住んでいたアパートをそう言った・

『ああ・・・』

階段を上がり玄関の鍵をあけた

『5分・・・3分・・・待ってくれるか？』

『イヤ！（笑）2分なら待つ（笑）』

『マジか！？よし分かった』

京介は急いで部屋に入り窓を開けて換気しながら細かい物を片付けた・・・

2分後・

『はい！時間切れー！』

千佳はドアを開けた

『換気してるから窓は少し開けておきな（笑）』

『うん（\*、\*）』

千佳は部屋に入り室内を見回した

『ねえ、どこを片付けたの？綺麗じゃん』

『換気と・・・洗濯物とかな・・・(笑)』

『そっか(笑)』

千佳はやはり見覚えがあるような気がする・・・

何処か・・・懐かしい・・・そんな気がした

『コーヒー豆乳でも飲むか?(笑)』

『えっ?あるの?』

『病院に持っていく分として買っておいたんだ(笑)』

『なーんだ・・・ビックリしたよお(笑)』

『なんでやねん(笑)』

京介が冷蔵庫へ向かうと千佳も着いてきた

『どれどれ男の冷蔵庫かなあ〜（\*、\*）（笑）』

さも、彼女のような探りだった

「ガチャ」

冷蔵庫を開けた

『うわぁ・・・』

冷蔵庫の中はブラックコーヒーばかりだった

そこに申し訳なさそうにコーヒー豆乳がちょこんとあった

『飲み物ばっかだね（笑）』



『こんなもんやる（笑）男の一人暮らしなんて（笑）』

『料理とかしないの？』

『しないな』

『外食ばっか？』

『そっ（笑）』

『ふ〜ん（笑）』

千佳は少し安心した

o

## 第六章 2

二人は長い時間話をした。

千佳は沢山の質問をした。

京介の幼少期の事を聞いたり故郷の話や聞いたり

自分の家族の事、故郷の事・・・

『ちい、そろそろ寝ないと明日起きれないぞ』

『うん』

『シャワーでも浴びておいで、その間に寝床の準備しておくから』

『はい(\*、\*、\*)』

何気なく渡されたバスタオル

無意識にバスルームの場所を知っていた・・・

京介も千佳もあまりにも自然な動きにお互い気づかぬ程だった・・・

「ガチャ・・・」

バスルームへ入った

『あれ？このシャンプーは・・・』

病室に京介が持ってきてくれていたシャンプーリンス類の事を思い出した

「ちい、シャンプー類と・・・ボディークリームはここの引き出しにしまっておきな・・・」

「うん・・・ありがとう・・・」

千佳はシャンプーを手に取り

『同じの使ってるんだ（笑） アハハ』

京介はベットを千佳に使って貰おうと思っていた

「あつ・・・着替え・・・」

準備しておくか・・・どうしたら良いか迷った・・・

・  
・  
・

千佳がバスルームから出てきたようだった

『なあ、ちい。』

キッチンから声が聞こえた・・・

『なあに？』

『その・・・着替えとか・・・無いんちゃうか？』

『・・・持ってきてますよーだ（笑）』

『そうか（笑）』

京介は準備しておかなくて良かったと思った。

『良かったらこれ使えばいい』

そう言いバスローブを持ち手を扉から出した

『ありがとう（\*、\*）』

千佳は素直に受け取った

バスローブを着て室内に来た

「あなたも入ってきて、私TVでも見て待っているから」\*、

「そうか・分かった。」

京介はバスルームへ行った

千佳はさつき途中まで飲んでいたコーヒードリンクを飲みながら部屋を見渡した

「なんか 男の一人暮らしにしては・・・女の子っぽいなあ・・・

何か不自然さを感じていた

10分後、バスルームへから京介は出てきた

千佳は部屋を色々見ていたのだが、物音が聞こえたのでTVを見ているフリをした・・・

『ちい、ベットで寝な俺はこっちのソファで寝るから』

『えー！私がソファでいいよ』

『ダメだ、まだ入院中の身なんやちゃんとベットで寝てもらおう』

『えー・・・でもお・・・なんか悪いし・・・』

『えーから。なっ！』

『じゃあ・・・一緒に寝る？』

『・・・』

一瞬、時間が止まった様に感じた。

京介の何とも言えない様な表情に千佳は気づいた・・・

『なーんてね・・・（笑）お休みなさい（\*´、\*´）』



『ああ・・・お休み・・・(笑)』

・ ・ ・ ・ ・

数分後・・・

『ねえ・・・起きてる?』

『ああ、爆睡中や』

『起きてるじゃん(笑)』

『はよ寝なあかんで(笑)』

『うん・・・』

『どうした？眠れないのか？』

『ねえ・・・一緒に寝て・・・お願い・・・』

o

## 第六章 3

『ねえ……一緒に寝て……お願い……』

いつもと違う雰囲気では眠れないのか……

それとも……何か……思う事があるのか……

敢えて聞かずにベットの方へ行つた

『はよ、寝なあかんで……ちい』

『ベットに入ってくれないの？』

『子供やな（笑）』

『今日は特別な日……でしょ……ダメ？』

『分かった（\*´、\*）』

京介はベットに入った

『わあ……なんか安心する……』

千佳は京介の胸にうずくまる様にして眠りについた・・・

千佳を軽く抱きよせ天井を眺めた・・・

「久しぶりに・・・ここへ帰ってきたな・・・」

心でそう呟いた・・・

翌日・・・。

千佳は京介より早く起きていた

『もう・・・起きとったんか・・・ちい・・・』

『うん（＊、＊）』

『お腹空いたか？』

『うん（＊、＊）』

『そうか・・・コンビニに行って弁当こつてきたるわ、待っててな』

『ちいも行く（＊・・）』

『ほんだら・・・着替えようか・・・手伝おうか？（笑）』

千佳は真っ赤な顔になった

『自分で、できますよーだ！エッチ（／／／／）』

『冗談やがな（笑）』

『子供扱いしてー（笑）』

『（笑）』

二人でコンビニに向かった

「こんなん初めてやな・・・」

記憶を失う前にも二人でコンビニに行く事は無かった事を思い出した……

コンビニに着いた

『コンビニって色々売っているんだね（＊、＊）』

『初めてか？』

『うん・・・目を覚ましててからわ・・・』

弁当コーナーにいった

『そうか・・・好きなの選んでくれ』

『うん（＊、＊）』

たかが、コンビニ弁当だが千佳にとっては何もかもが新鮮であった

レジに行き会計を済ませそうとする時、京介は『タバコ』と店員に言った

店員は覚えているかのように、京介の吸うタバコの銘柄を聞かずに差し出した

『2個ですよね?』

『ありがとう』

『へえ〜ここよく来るんだ〜( \*、 \* )』

『近所やしな・・・』

『ふうん』

『ホラ 行くぞ』

二人は部屋に戻った

千佳はニコニコしながら言った

『なんかこう言うのが楽しい( \*、 \* )』

『そうか(笑)?』

『うん。なんか新鮮!』

『・・・かもな(笑)』



二人は弁当を食べ始めた

『意外と美味しいね』

『そうか？俺は飽きたよ』

『毎日はきついかもね（笑）』

『だな（笑）』

『食べたら病院に戻らないとだぞ。』

『えー・・・』

『先生に怒られるで、それにもう外出許してもらえんようになったら嫌やる？』

『うん・・・』

『ねえ！また泊まりたい（\*、\*）』

『・・・うん・・・今度な・・・』

『今度つて？』

『外泊許可が出て帰りが遅くなりそうな時な（笑）』

『うん（\*、\*）遅くなる様にしなくちゃ（笑）』

『確信犯やな（笑）』

『そつだ！ハハハ』

部屋を出て病院へ向かう事にした

『あゝあゝ 帰りたくないなあ・・・。（。）』

本当に帰りたくなさそうだった・・・

『もう少しの辛抱や・・・なっ、ちい。』

『うん・・・ねえ！先生に聞いて！』

『・・・何をだ？』

『いつ退院出来そうか？もう大分治ってきてるんでしょっ？』

『ああ・・・そうやな・・・聞いてみるわ』

『うん（\*、\*）』

無邪気に笑う、千佳の笑顔がとても愛しくも痛くもあつた・・・

記憶が戻る戻らないよりも、早く今の生活から抜け出したい・・・

その気持ちが痛いほど伝わってきた

『必ず聞いとくわ・・・』

『約束ね（\*、\*）』

o

## 第六章 4

二人は病院に戻った

病室に入ると千佳は買い物をしてきた物を出し

あれやこれや言いながら楽しんでいるようだった

数分後、外出から帰った千佳の元に主治医が病室に来た

「コンコン」

京介はドアを開けた

『お帰りになったと聞いたので・・・』

『先生・・・すみませんでした・・・外泊の件・・・』

『いや・・・構いませんよ・・・ですが・・・何か変わった事は？』

『特に・・・』

『順調と言つ事ですね。』

『先生・・・完治は？』

『そうですね・・・もう少し様子を見て・・・何も変わった事が無ければ退院ですね。』

主治医はニツコリ笑って見せた

『そう・・・うですか　ありがとうございます』

千佳は京介と主治医のやり取りを少し聞きながら買ってきた本のページを捲った・・・

『今日はゆっくりと休んだ方がいい』

主治医がそう言つと千佳は聞いた

『先生、今後も外出は・・・』

『ルールさえ守ってもらえれば（笑）』

千佳はシマッタという顔しながら笑顔で「はい」と答えた

主治医は千佳の状態を確認すると病室を去った

『ねえ 先生何だつて？（\*´、\*´）』

『様子見て何も無ければ 退院やつて』

『本当？やつたあ（\*´、\*´）』

『家族の方にも連絡せんとな．．』

『まだ．．思い出してないから．．不安．．』

『でも．．退院するんやつたら来て貰わなあかんやろ．．心配して  
ねんで』

『・・・うん・・・そうだよね・・・ねえ!』

『うん?』

『あなたも居てくれるんだよね?』

『ん?・・・ああ・・・当たり前じゃないか・・・』(＊、＊)  
『

軽く微笑んだ

千佳は少し不安な顔をした

『大丈夫やって(＊、＊)』

『・・・うん・・・』



翌日・・・病院の屋上・・・

千佳はベンチに座り、京介は少し離れた所で喫煙していた

千佳はジッと京介を見ていた・・・

「天国にあゝなた」

京介の携帯が鳴った

「あれ？電話かな？」

千佳は電話をしている京介をぼんやり眺めていた・・・

o

## 第六章 5

電話の相手は「ちひろ」だった

「もしもし・・・ちひろちゃん・・・ちいの退院が決まりそうだよ」

「本当？直ぐなの？」

「様子を見て何事も無ければ・・・」

「じゃあ・・・そっちに行かないとだね。」

「そうしてもらいたいんやけど・・・まだ・・・記憶が・・・」

「何も思い出さないままなの・・・？」

「ああ・・・家族の事は少しずつ話して聞かせてたから、本人も受け入れているみたいだけどな・・・」

「双子にはびっくりしてたんじゃない（笑）？」

「まあな・・・」

「退院の日がハッキリ次第連絡する」

「うん」

「その時、ちいと色々話をしてくれ・・・」

「色々って?」

「今後の事とか・・・」

「うん・・・京ちゃんは?どつするの?」

「俺か?・・・そうだな・・・」

「何かあるの?」

「いや・・・考えておくよ、それとひとつ頼みがあんねん」

「なに?」

「ちいと電話で話すときに俺の事にはあまり触れんでほしいねん・  
名前とか聞かれても・・・言わんでくれ・・・」

「何で? そんなのダメだよ!隠さなきゃならない理由でもあるの  
?」

「ちいの新しい人生の為にも・・・俺は・・・」

「どっししてよ!」

「名前だけでも教えてあげて・・・じゃないとちいが・・・ちいちや  
んが可哀そうよ・・・」

「・・・あかん・・・」

「どっしして!」

「ちいが全て自分で思い出さない限りは・・・知らない方がいいん  
や・・・」

「……どうして……」

京介は千佳の方を振り向いた

千佳は京介が自分の方を見ているのも気が付き大きく手を振ってきた

手を振り返した……

「なあ……ちひろちゃん……前もって声だけでも聞いておいたら  
どうや？」

「えっ……でも……そうだよ……突然じゃ……どう接していいか  
分からないもんね……」

「ああ……」

「でも……何でちいちゃんは記憶が無くなったの？」

「……」

「何か……あったの？」

「俺のせいやねん……」

「……京ちゃん……」

「だから……だからやねん……分かってくれ」

「……でも……今もちいちゃんの事考えて色々やってくれているじゃん」

「償いや……」

「償い……なんて……言わないで……」

受話器を耳から放し千佳の方へ向かって歩いて行った

無邪気に笑う千佳の姿・・・

『電話 終わったの（＊、＊） ねえ、見て夕陽が綺麗だよ』

『・・・んっ・・・ああ・・・そうやな・・・ちい・・・妹さんや・・・』

『えっ・・・』

携帯を千佳に差し出した・・・



o

## 第六章 6

『ちい 電話や・・・』

千佳は携帯を受け取った・・・

「もし・・・もし・・・」

「あつ・・・お姉ちゃん？ 私、ちひろ！分かる？」

「・・・あつ・・・あの・・・双子の・・・」

「そう！」

「ごめん・・・まだ何も思い出してなくて・・・」

「うん・・・聞いてた。でもね私達は双子でしょ！きっと何か通じる部分があると思うし、これから何か思いたすよ！」

「うん・・・うん・・・」

ちひろの言葉に何か強い想いの様なものを感じた・・・

京介はち千佳とちひろの会話の邪魔にならないように再び喫煙所へ行った

「あ・・・あの・・・写真・・・見ました」

「写真？」

「うん。家族の写真・・・」

「ああ 3人で写ってるやつかな？」

「うん」

「びつくりした？」

「うん。自分がいるみたいで・・・」

「双子だからね（笑）」

「うん・・・。」

最初は少し緊張していたが少しずつ気持ちや和らいできた・

「ちいちゃんが入院した事を知らせに来てくれた時にさあ・撮った写真なんだよ」

「うん・・・ねえ・」

千佳は京介の方を微かに見た

「あの人の名前・・・教えて・」

「本当に・・覚えてないの・」

「・・・うん・」

「お願い・・教えて・」

「ダメよ・・ちいちゃん・・彼の為にも・直ぐじゃなくても思い出すまで頑張ろう・」

「いくら考えても どんなに思い出そうとしても思い出せないの・・・  
うっうっ・・・」

千佳は泣き出してしまった・・・

ちひろは何度も教えてあげたい・・・心の葛藤に揺れた・・・

「・・・ちいちゃん・・・私も・・・知らないんだ・・・」

「えっ・・・そうなんだ・・・」

「大丈夫。双子の力がきつと・・・思い出させてくれるよ！ねっ」

「うん・・・」

「じゃあ・・・彼と代わってくれろ？」

「・・・うん・・・」

千佳は真っ赤な目をしながら携帯を持っていった・・・

『どぎっしたん・・・』

千佳は携帯を渡すのに抱きつき泣きだした・・・

少し戸惑ったが千佳の髪を撫でた・・・

「もしもし・・・どないしたん・・・ちい・・・泣いてるで・・・」

「・・・思い出せないのが・・・相当・・・辛いみたいだよ・・・京ちゃん・・・」

「・・・そっか・・・。また 連絡するよ・・・ごめんな」

「うん・・・ちいちゃんをよろしくね」

「ああ・・・。」

電話を切った

『ちい・・・』

『ごめんね・・・ごめんね・・・』

『泣くな・・・なっ、ちい・・・』

『うん・・・』

『部屋に戻ろう・・・』

二人は病室に戻った・・・

o



## 第六章 7

ちひろとの会話で何かを思ったのだろう・・

口数が少なかった・・

『ちい。戸惑いはあるのは分かるで・・でも身内が居ると言うのは幸せな事や沢山話をして分かりあえばいい』

『うん・・でも・・今の私にはあなた以外の人と会ったりするのはまだ恐いの・・』

640

『そうか・・でも、今日電話で話した感じはどうだった？』

『ち・・ひろ？』

『ああ姉妹ゆうても双子や普通の姉妹より深いものがあると思うで・・』

『そうなのかな・・・』

『そうみたいやで・・・彼女はそう言っていたで・・・』

『・・・うん・・・これからたまに電話して仲良く出来るようにしてみ  
るね』

『そやな・・・それが一番や』

それから、千佳は家族の話を色々聞いてきた

京介は自分の知りえる話を全部伝えた・・・

それから千佳とちひろは時折連絡を取っているようだった

数日経ち、千佳は京介にちひろとの会話の内容を話してくるよう  
になった

『なんかね・・・ちひろと話をして昔の事を聞くと自分の事なのに全然分からなくてとっても不思議って言うか・・・変な感じ・・・（笑）』

『そうか（笑）でも色々分かってきて良かったやんか』

『う・・・うん・・・』

・ 千佳はちひろと電話で話すようになってからとても明るくなった・・・

やはり双子ならではの疎通する部分もあるのだろうか・・・

そう感じてやまなかった

・  
・  
・  
・

数日間の診察の結果も良く退院の日取りが決まりそうだった。

『ちい。順調みたいやな』

『なんか早く退院したかったけど・・・なんか少し恐いな（笑）』

『そうか・・・そうかもしれないけどいつまでもここに居る訳にもいかないさ』

『そつだよね（笑）』

『正確な退院の日取りがいつになりそうか聞いてくるよ』

『うん（\*、\*）ちいも行く』

『そうか』

二人で病室を出ようとした時、千佳の電話が鳴った

「逢いたくて 逢いたくて あなたに すぐに (ちい着)」

『あつ、ちひろだ(笑)』

『俺が聞いておくから電話してな(笑)』

『うん。ごめんね(\*´、\*´)』

京介は医務室へ向かった

「コンコン」

「どろどろ」

『先生。どろも・・・千佳の退院について・・・』

『ええ どろどろ お座り下さい』

『先生、千佳の退院はいつ頃に……？』

『体の方はもう問題ありませんね……。ただ記憶がまだですが、これに関しては今の治療よりも退院し日々の生活をしている方が思いだしたりする可能性は高いと思うんですよ』

『そうですか……。そうですね……。では彼女の身内に連絡し来てもらいますね、その時同じ様に説明してくれませんか……』

『はい。それは構いませんが……。あなたは？』

『私は彼女の身内ではありません……。身元を引き受ける訳にはいかないんです……』

『……。そうですね……。皆さん……。色々ありますからね……。でも出来るだけ一緒に居てあげて下さい。それがきつと千佳さんへの一番の治療なると思いますので……』

『・・・はい』

医務室を出た・・・。

。





## 第六章 8

医師とのやり取りの中、千佳の退院の日は4日後に決定された……

京介は病室に戻る前にちひろに電話をした

「プルルル……」

『はい』

『ちひろちゃん……俺や』

『京ちゃん?』

『ああ……退院の日……決まったで』

『いつなの?』

『4日後だ……来週の火曜日……来れるかい?』

『火曜か・・・私だけになるかも知れないけどいいかな？後からお母さんに来てもらう感じで・・・』

『ああ構わないと思うよ、ちいも突然母親と会うよりその方が心の準備も出来るやる・・・』

『そうかな（笑）だといけど・・・』

『・・・駅に迎えに行くよ。その時ちいの部屋の住所も教えるから』

『うん』

『その日は時間は空けているんでしょっ？』

『・・・少し仕事があるんや・・・でも必ず空けるよ』

『ねえ！その日退院祝いしようよ（\*・・・）』

『退院祝いか・・・同じ顔をした女性二人に囲まれてか（笑）？』

『豪勢じゃない!!(笑)』

『ほんまやな(笑)・・・分かったよ』

ちひろは待ちに待った、千佳の退院を心から喜んでいるようだった

『ちいには俺から伝えとくわ』

『うん!じゃあお願いね!』

病室・・・。

『ただいま』

『ねえ！退院はいつだった？』

千佳は早く聞きたくて仕方が無かった・・・

『来週の火曜日だって』

『えー・・・まだ4日もあるじゃん・・・』

『万全を期してと言うことだろう』

『うん・・・早く退院したいな』

『あと・・・ちひろちゃん、迎えに来てくれるらしいで』

『本当？双子なんだよねえ〜（笑）なんか不思議（笑）』

『見たらビックリするくらい似てるで（笑）』

『緊張だけど・・・楽しみだなあ（\*´、\*´）』

『ねえ！そう言えば・・・私、退院したら何処に行くの？行くところあるの？』

『大丈夫だ、ちひろちゃんにも場所は伝えておくよ』

『ねえ、あなたは私の部屋を知っているの？』

『ああ・・・知っているよ』

『そうなんだー（笑）ねえ、入った事あるの？』

『無いな・・・でも一度掃除をしに行かないとだな・・・』

『えー！！なんか変な感じ・・・色々見ないでね（笑）』

『見るか！アホ（笑）』

『そんな事より・・・退院前に体調を崩せば元も公もないからジツカリな』

『うん（\*、\*）』

『なあ・・・ちい・・・』

『何？』

『ほんま・・・良かったな・・・』

『うん・・・でもね・・・長い間眠り続けた間に・・・何か大事な事を忘れてしまった気がして・・・』

『・・・』

『あなたの事も・・・』

『大丈夫・・・すぐ取り戻すさ・・・』

『協力してね（＊、＊）』

『ああ・・・約束する・・・』

。





## 第六章 9

それから3日間はあつと言つ間に訪れた

『いよいよ明日だね退院）\*、\*、\*（』

『早かつたな』

『えー。長かつたよ！！』

『・・・ちいに取ってはそうだったかもな（笑）  
これからやな・・・  
全てが・・・』

656

『うん・・・少し怖い気がするけど・・・頑張る）\*、\*、\*（』

京介は腕時計を見た

『そろそろ、ちひろちゃんが駅に着くころやな。迎えに行ってくるな』

『うん（\*、\*）お願い。連絡してね』

『ああ』

駅に向かった。

早めに着いた・・

千佳が死んだと思い九州へ向かった時の事を思い出した・・

駅内の喫茶店へ入った

セカンドバックの中の写真を出し眺めた・・

「今は本人が目の前に居るけど・・この時とは違うな・・」

そして千佳から貰った「最後の手紙」を読み返した・・

「どんな形にせよ・・・ちいが戻ってきてくれた事に感謝や・・・」

・  
・  
・

「天国にあなたが一番近い島（強着）」

「もしもし、京ちゃん？ちひろ！今着いた」

「東口の喫茶店や」

「えっ？うーん・・・分かった」

キョロキョロしながらちひろは喫茶店に入ってきた

京介は片手を上げ席を知らせた

『京ちゃん久しぶり（＊、＊）ごめんねちいちゃんの面倒任せっきりで』

『いや気にする事無いよ』

『本当にありがとうね（＊、＊）』

『取り合えず コーヒーでいいか？』

『うん』

注文を入れた。

『取り合えず一服したら荷物を置きに行こう。ホテルにするか？それともちいの部屋にするか？』

『ちいちゃんの部屋があるなら掃除も兼ねて部屋にするよ（＊、＊）』

『ある程度は片付けておいたが細かいところ頼む』

『うん（\*、\*）』

数日前、京介は予め千佳の部屋に置いてある自分の私物は運び出していた

二人はカフェを出て千佳の部屋へ向かった。

『じいちゃん』

『へえ〜結構綺麗にしてたんだね』

『京ちゃんもここに一緒に暮らしてたの？』

『俺は他に借りていたんだ・・・たまに来ていた感じだよ』

『へえ〜不経済ね（笑）』

ちひろは何も疑う事も無く話を聞いた

『俺・・・タバコ買ってくるわ・・・』

『じゃあ着替えてるね。病院行くでしょ？』

『ああ。じゃあ、ちいに電話もしておくよ』

『うん、近いの？病院』

『ああ、タクで15分くらいや』

『楽しみだなあ（＊、＊）』

京介はタバコを買いに出て千佳に連絡を入れた

「逢いたくて 逢いたくて・・・ (ちい着)」

「はい(\*、\*）」

「ちい、あと20分位でそっちに着くからね」

「あー・・・緊張する(笑)」

「(笑)またな」

「うん(\*、\*）」

部屋に戻るとちひろはもう出れる状態だった

『「この住所教えてくれる？ 帰り迷うと困るから(笑)」』

『分かった』

京介はササッとつメモに書いて渡した

『明日、ちいちゃんが退院してきたらここで一緒にお祝いしようね』  
『\*、\*、\*』

『・・・ああ・・・仕事が終われば次第駆けつけるよ・・・』



o

第六章 10

『・・・ああ 仕事が終わりに次第駆けつけるよ・・・』

『仕事休めないの？』

『人手が足りないんや・・・今日も無理言って休みを取ったからな（笑）』

『あつ・・・私のせいか・・・ごめんね（笑）』

『冗談やって（笑） 明日はよろしく頼むな ちひろちゃん』

『はい（\*・・・）』

ありもしない現実を並べた・・・

戻らない記憶をいいことに・・・嘘で事実を曲げる自分がはらだしくも感じた・・・

だが・・・全てを話すのが良いとは言い切れない・・・

人間、知らないですむ事なら知らないで過ごした方が幸せな事もある・・・

そう感じて病まなかった・・・

二人は病院へ向かった

「コンコン・・・」

『ど・・・そうぞ・・・』

室内からオドオドした声が聞こえた

「ガチャ・・・」

『ちいちゃん!!』

ちひろの登場に目を真丸くしてちいは驚ろいた

『うわぁ！本当にそっくりだぁー！うわぁー！』

『そつでしょう（笑）可愛いでしょう（\*、\*）』

『うん（\*、\*）』

『美人姉妹だからねー（笑）』

『アハハハ』

千佳はとてもはしゃいでいるようだった・・・

今までに見た事の無い千佳の姿をぼんやりと眺めた

『ちいちゃん、あのね明日退院したらちいちゃんの部屋で退院祝い  
をしようって思ってるんだけど・・・どうかな（\*、\*）』

『本当！？わあい 嬉しい』

京介はニコニコしながら会話を聞いていた

『ねえ、あなたも来るでしょう？』

千佳は京介に訪ねた

『・・・遅れていくと思う』

『えー・・・なんで？』

『ちいちゃん、彼はお仕事なんだって』

『仕事してたの？（笑）』

『当たり前やないか（笑）』

『ですよね』（笑） じゃあ 終わったら連絡してね』

『あぁ』

『その間、ちひろと二人で準備しておくね（\*、\*）』

数時間、病室の中はとてにぎやかだった

沢山の話がお互いあるのだろう・・・

聞きたい事

今までの事

これからの事

家族の事

故郷の事

ちひろの知りえる千佳の事

時間が幾らあっても足りない・・・そんな感じにも見えた・・・

京介に取っては長くも短くも感じる時間であった・・・

『あつ、もうこんな時間、私そろそろ帰って明日に備えますね』

時間は消灯の21時を迎えようとしていた

『楽しい時間はあつと言う間だね』

『じゃあ明日ね！ちいちゃん。えーと・・・あなたも（笑）』

『うん（\*、\*）待ってるね』

『ああ・・・送って行くのか？』

『住所分かるし大丈夫だよ』

『送ってもらいなよ！ちひろ（\*、\*）』

『でも・・・悪いし(笑)』

『もう(笑)遠慮しないで!!ねえ!送ってあげて)\*、、\*(笑)』

『ああ、分かった』

『あとお・・・』

『なんだ?』

『早く帰ってきてね・・・(// // //)』

ちひろは恥ずかしそうに言う千佳をクスクス笑った

『はいはい(笑)』

『もおゝ また子供扱いして!..!』



千佳は頬を膨らませた

京介には千佳が両頬を膨らます顔が好きだった

それは過去の千佳の姿では見た事の無い顔だからだった

今の千佳として好きになった部分だった

『じゃあ 行ってくるな』

『うん）＊、＊）お願いね！帰り電話ね！』

『分かったよ（笑）』

二人は病室を出た。

o



第六章 11

『ごめんね面倒掛けて』

『いや、いいんだ・明日頼むね・俺は明日は朝一から仕事なんだ・・・』

『そんな時にごめんね。あと今までありがとうねちいちゃんの事』

『気にするなよ(笑)もう・身内みたいなもんじゃないか・・』

『うん(・・・)そう言ってくれると嬉しいし、救われるよ(笑)』

『(・・・)』

微笑み返した

千佳の部屋に着いた・・・。

『じゃあ明日』

『うん（\*、\*）明日ね』

ちひろと別れ千佳に電話を入れたが千佳は電話に出なかった・・・

「何かあったのか・・・」

急いで病院に戻ると千佳は眠りについていて・・・

ちひろとの再会で興奮したせいもあるだろう・・・

眠る横顔を見ながら髪を撫でた・

千佳は小さな子供様な顔をしていた・

京介はカバンから写真を出した

ウエディング姿で甘えている千佳・

眠る千佳の唇にそっと口づけをした・

涙が溢れそうになるのをこらえ手を握った

「このまま時間が止まって欲しい・・・」

「これが映画ならば　ここでエンディングを迎えて欲しい・・・」

昔、希望が丘で千佳が言った言葉を思い出した・・・

「あの時のちいの気持ちは・・・

どれほど・・・切なかつたのだろうか・・・」

「自分の身体の限界を感じながらも・・・その時の幸せを優先した  
ちい・・・

ちいと同じような立場であつたら同じ事が出来たのであろうか・・・

「

本当は・・・

みつともない位に泣き叫び・・・

生きたいと叫びたかつたのだろうか・・・

今、こうして千佳と居られる事に感謝した・・・

自分を思い出す事・・・

今までの記憶が無い事・・・

これも・・・きっと必要な事だったのだろう・・・

「帰ってきてくれて・・・ありがとうな・・・ちい・・・」

京介は眠る時間すら惜しむように

千佳の顔をじっと眺めていた・・・



o

## 第六章 完結

AM 6 : 30

病院の朝はまだ静かだった

京介は一睡もせずに千佳を見つめていた・・・

千佳はまだ眠ったまま・・・

病室のカレンダーを見るとそこには退院の日に大きくハートが書かれていた

「普通の女の子・・・なんだな・・・ちい・・・良かったね・・・おめでと  
う・・・」

呟いた・・・

AM 7 : 30

千佳は目を覚ました

『んー！おはよう）＊、＊（＊』

まだ眠そうな顔をしていた

京介は千佳の好きなコーヒー豆乳を差し出した

『ほら・・・お待ちかねの退院の日やな』

『うん）＊、＊（ありがとう』

『俺はもう少ししたら仕事があるから行くけどいいかな？』

『うん、じゃあちひろに電話しなくちゃ！』

『俺が今するな』

『うん お願い』

「プルルル・・・」

『はい』

『起きとった？』

『起きてたよ〜』

『俺は間もなく出かけないといけないから・・・』

『うん！直ぐ向かうね！』

『ああ 頼む。』

『ちい。ちひろちゃんすぐ向かってさ』

『はい！午前中に最後の診療をしてそれから退院だつて』

『そうか、良かったな。午後にはここには居ないんやな・・・』

『よつやくだよ〜）＊、＊（＊』

『だな・・・(笑)』

千佳はベットを降りて退院の準備としてまとめた荷物を確認し始めた

『・・・俺 トイレ行ってくるわ』

『うん(\*、\* )』

何気なく空気は流れていた・・・

荷物の確認をしている時千佳はテーブルに腰をぶつけた

「バタン」

テーブルの上にあった京介のセカンドバッグが床に落ちた・・・

中身が多少出てきていた

「あ・・・やっちゃった(笑)」

慌ててバツクの中に中身を戻そうとした

その時、数枚の写真らしき物が見えた・・

「・・・あのファミレスで見せてもらった夕陽の写真かな？」

写真を手に取った

写真は偶然にも裏側向きで落ちていた

手に取ると写真の表側には手紙のようなものが一緒にあった

「手・・・紙？」

とても気になった・・

だが・・・何となく・・・恐い・・・

自分の知らない事がそこにありそうな気がしてならなかった・・・

千佳はとっさに写真と手紙を自分のカバンにしまい込んだ

そして慌てるようにセカンドバックを元の位置へと置いた・

「……………どうして……………なんで……………私……………こんな事……………」

「ガチャ」

「ちい、ちひろちゃん来た見たいやで」

「あ……………うん……………」

「おっはヨー！」

「おはよう……………」

不安が過ぎつてならなかった・

「ねえ……………今日の夜は来るんだよね……………？」

京介に聞いた

『・・・遅れるかもしれないけど・・・連絡する・・・』

『約束だよ!』

『ああ（\*、\*）』

『ねえ、ちいちゃん荷物はまとめたの?』

『うん、あのね午前中に診療があるから、それ終わったら退院手続きなんだ』

『そっか（\*、\*）ようやくだねー』

『うん（\*、\*）』

二人の楽しそうなやり取りを見ながら京介は病室を去った・・・



それから千佳は午前中の診療を受け無事退院の手続きが行われた

長きに渡る入院生活が終わった・

・  
・  
・  
・  
・

二人は荷物を持ち病院を出た

『もう・・ここには戻ってくる事が無いといいな・・・』

千佳は振り返り病院を眺めた・

『・・大丈夫。大丈夫よ ちいちゃん』

『うん・・でもね・・なんか・・ううん・・何かここに忘れている様な気がするの・・何か・・大事な事を・・』

『・・きつと・・それも思い出せるよ』

『うん』

『ねえ、ちひろはいつまで居れるの?』

『しばらくは居れるよ!何かと不安でしょ?』

『うん)\*、\*(ありがとう』

『今日は退院パーティーよ!荷物置いたら二人で買い出しに行こう  
ね!』

『わあ楽しそう!』

『急いっか!』

『うん)\*、\*(』

二人は部屋へ向かった・・・。

o

アコウクロ 第七章

ちいとちひろは部屋へ向かっていた

『ここだよ』

ちひろが部屋を指差した

『あれ・・・？』

『どうかしたの？』

『あそこ・・・私の部屋なの？』

『そう聞いたけど・・・』

『あの人の部屋じゃなかったんだ・・・』

『来た事あるの？』

『うん・・・一回・・・外出許可が出た時に・・・』

『そっか』

胸騒ぎがした・・・

『ねえ、ちひろ・・・あの人・・・本当にここが私の部屋って?』

『うん、そう言ってたし私・・・昨日泊まったし・・・』

『私には・・・あの人の部屋だって・・・』

「・・・二人の部屋だったんだ・・・」

千佳は呟いた・・・

『きつと・・・サプライズなんだよ!』

『そうかな・・・』

『そうだよ!こっちもビックリするくらいの御馳走を二人で作ってやるつよ!』

ちひろは満面の笑みでそう言った

千佳は何か心に引っかかりと不安が残っていた・・・

二人は荷物を置き買い物に出かけた・

『ねえ・・・ちひろ・・・』

『なに？』

『あの人・・・来るよね・・・』

『当たり前じゃん（笑）来るよ！』

ちひろは何の疑いも無かった

千佳に取ってこうして料理の材料を買うのもある意味初体験で何か  
もが新鮮だった

沢山の事をこれから知っていく

思い出していく・・・

こうして妹が協力してくれる・・・あの人・・・

とても大切な人・・・

大切な時間・・・

過去に何があったかは知らない方が良い事もある・・・

そう言った彼・・・

何故・・・私達の間を話さなかったのか・・・

それにも何か理由があるのか・・・

ただのサプライズなのか・・・

これから始まる明日に不安や哀しみは欲しくない・・・

彼が来たら・・・ちゃんと話を聞こう・・・

きくと話してくれる・・・

そう信じた・・・

『ねえ！すき焼きにしようよ！』

『鍋か・・・いいね』

『彼は・・・すき焼き好きなの？』

『うーん・・・分かんない・・・だけど・・・そうだったような気がする』

『思い出したの？』

『ううん・・・そうじゃないけど・・・何となく・・・何となくだよ・・・』

『そう言うの大事だね（＊、＊）』

『だい・・・じ・・・うん。そうだね（＊、＊）大事だね』



買い物を終え部屋へ戻った

部屋に着くと二人は料理を始めた

ある程度の準備が進むとちひろが言った

『ちいちゃん荷物片づけちゃいなよ！私が後はやっておくから』

『いいの？』

『うん。久々に帰ってきたんだからゆっくりして）\*、\*、\*（』

『じゃあ甘えようかな）\*、\*、\*（』

千佳は荷物の整理を始める事にした

「あの人がある前に綺麗に片付けて・・・化粧もして・・・」

「今までの感謝とこれからの時間を大事にしたい・・・」

片付けを終えるとシャワーを浴びる事にした

『ねえ、ちひろ・・・あの人が来る前にシャワーしてたいんだけど・・・  
いいかな（笑）』

『いいんじゃない（笑）びっくりするくらい綺麗になって驚かせて  
やればいいよ！』

『うん（\*´、\*） 同じ顔が二人だとどっちが私が迷うかもし  
れないしね（笑）』

『ハハツ（笑）』

京介・・・。

「もう・・・準備してるのかな・・・」

。

## 第七章 2

京介は千佳達の待つ部屋には向かわず希望ヶ丘に向かった・

色々思いだし・考えた・

・  
・  
・  
・  
・

そして出した答えが

「ちいの前から姿を消す・」だった

部屋にも向かわず・

携帯の電源も切った・

「新しい人生を・素晴らしい生き方をして欲しい・・ちい・」

・  
・

・ ・ ・

料理の準備も終わり、千佳とちひろは話をしていた・

千佳はちひろが現れるまでの、あの人（京介）とのやり取りや会話など

沢山の事を伝えていた・

『そうなんだあゝ ふーん』

『うん・私がどの位、あそこで眠ってたのかは分からないけど・  
凄く長い時間・眠っていたような気がするんだ・』

『・・・そう・・・』

『ねえ、あの人と会った時の話を詳しく聞かせて・・・』

『うん・・・いいよ・・・でも・・・本人から聞いたら？』

『そうだけど・・・あの方は・・・嘘を付くから・・・』

『嘘？』

『…うん…』

『どんな？』

『相手を気遣う嘘…』

『…そうだよね…そういう人だよね…』

『知りたいの…あの人の為にも私の為にも…』

『分かってる事しか教えれないよ…』

ちひろの口調に何か感じた…

『もしかして・・・口止めされてる事があるの？』

『えっ・・・うん・・・』

『・・・なま・・・え？』

『うん・・・ただ・・・私の聞いている名前だって本当かどうかわ・・・』

『・・・分かった・・・名前は自分で聞く・・・それ以外の事を・・・お願い・・・お願い、ちひろ・・・』

『・・・うん・・・分かった　ちいちゃん・・・』

『ありが・・・とう・・・ちひろ・・・』

千佳は下をうつむきながら言った・・

膝に涙の跡が残っていた・・・

ちひろは京介と千佳の母、「真子」「マコ」との出会いから

千佳の目覚めの知らせまでの事を話した・・・

マコの店での会話・・京介の雰囲気・・・

『彼はいつも写真を持って歩いていたみたいだよ』

『写真？』

『うん・・大事そうに・・してた・・』

『夕陽の？』



『うん・・・アコウクロね・・・でもそれだけじゃなかったよ・・・』

『えっ・・・』

『知らないの？』

『えっ・・・』

急に不安な気持ちに襲われた・・・

「あっ・・・そういえば・・・」

千佳は慌てるように自分のカバンを取り出した

千佳の手元には京介のカバンから抜き取った写真と手紙があった・・・

・

・ ・ ・ ・

「希望ヶ丘・・・」

空を眺めていると 流れ星が見えた・・・

「ちいが幸福に暮せますように・・・」

子供の頃を思い出した・・・

「昔、よく流れ星に願ったな・・・（笑）」

ベンチに座り一面に広がる星空を見上げ・・・

タバコに火をつけた・・・

o

## 第七章 3

星空を眺めた・・・

「・・・」

色んな事を考えていると・・・ちいが恋しくなってきた・・・

「俺も・・・まだまだだな・・・」

カバンを開けた

「?・・・写真が・・・無いな・・・手紙もや・・・」

昨日病室で見たときに・・・終い忘れたのか・・・

「もしや・・・ちいが・・・」

そんなはずは無い・・・最後に会話をした時には退院することで嬉しそうにしていた

もし・・・知っていたとしたら・・・何か言ってきたら・・・

それが無かったって事は・・・写真を見てはいない・・・

そう思った・・・

・ ・ ・ ・ ・

「千佳の部屋」

千佳は手の中にある写真と手紙を見つめていた・・・

『ちいちゃん・・・どうしたの?』

千佳は何も言わずに唇を噛みしめた・・・

裏側向きの写真を自分へ向けた・・・

「あっ・・・」

そこにはウエディングドレスを着た自分の姿・・・

・ ドレスを着ながら甘え抱きついてキスをしている自分が写っていた。

「なんでえ・・・どっしりえ・・・」

涙が溢れだし止まらない・・・

手がわなわなと震えた・・・



「うっ……うっ……うっ……わあああー」

何故……何故……こんなに大事な人を思い出せないの……

どうしようもない気持ちでいっぱいになった……

『もしかして・・・』

千佳は立ち上がり洋服タンスを開けた

そこには写真で着ていたウエディングドレスとカクテルドレスが入っていた・・・

千佳は下をうつむいた・・・

「あの時も……ここにあっただね……」

「ここは貴方の部屋じゃなくて……二人の部屋だったんだね……」

「ごめんなさい……思い出せなくて……ごめんなさい……」

『ちいちゃん……』

『あの人……辛かったんだろうな……』

『うん・・・』

「もしかして・・・あの人・・・来ないつもりじゃ・・・」

そんな思いが脳裏をかすめた・・・

『ちひろ・・・ちひろ・・・あの人・・・あの人・・・』

『どじしたの？どじしたの　ちいちゃん！』

千佳は口に手をあて声にならない声をよじやく出して泣いた・・・

716

『あの人に・・・』

ちひろもちいの気持ちが分かった・・・

『待つてすぐに連絡してみるから!』

o

## 第七章 4

ちひろは京介の携帯に電話をした

「電波の届かない・・・」

何度掛けなおしても電話は繋がらなかった

『駄目だ繋がらない・・・』

その間、千佳は写真をじっと見つめた

『この写真・・・私だよね・・・ちひろじゃないよね・・・』

『なんで？そんな事言うの？ちいちゃん、ちひろな訳じゃん』

『じゃあ、どうしてあの人は・・・何も言わないのよ・・・何でここに』



『居ないのよ!』

千佳は泣きながら言った

『ちいちゃん……きつと……来るよ……』

『……』

千佳は写真と一緒にあった手紙を開けた……

……

希望ヶ丘公園……。

「もう・・・ここに来る事は無いな・・・」

病院に向かい歩き始めた

・  
・  
・  
・  
・

「千佳の部屋」

「京介さん本当にありがとうございます。千佳は幸せです。頑張って皆に自慢出来るようなお嫁さんになります。」

どうかこれからもよろしく御願います。そして・・・私の事はいつか「ちい」って呼んで下さい。

ほら、その方が仲良い感じがするでしょう(笑) 私は京ちゃんって呼びたいの・・・いつの日かそう呼び合おうね・・・」

最愛ある 哀川 京介様へ

綾瀬 千佳

『京ちゃん・・・』

手紙を読み終えて名前を呼んだ・・・

千佳は部屋を飛び出した

『待つて!どこ行くのちいちゃん!!--』

ちひろはすぐにちいを追いかけた



・  
「行かなくちゃ・・・」

千佳はある場所を目指していた

・  
・  
・

京介は長かった時間を思い返し

それに自分で終止符を打つ事に間違いはない・・・そう考えていた

だが、もう少し、もう少しだけでも今のままでいさせて欲しい・・・

そう思いゆっくり歩いていた

・  
・  
・

「ちひろ」

千佳が読んだ手紙を手にしていた

「京ちゃんのお嫁さんになる・・・」

思い出しのかもしれない・・・

千佳は手紙を読み何かを感じたからこそ・・・

その反面、とても不安な気持ちになってきた・・・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

「大事！（＊、＊）京ちゃん。大好きい！」

沢山の想い

幸せを願った時間

追いつめられた時間

どうしようもなかった現実・・・

目覚め後の二人・・・。

互いの時間が動き始めた・・・

o



## 第七章 完結

京介は病院に着いた

救急外来から入り千佳の入院していた部屋へと向かった

・  
・  
・

病室の前に着いた

「当たり前か・・・」

病室の名札は既に外されていた

手紙と写真は、ここに無ければ、ナースセンターか事務局に言えばあるだろう・・・

その前にもう一度、ちいとの思い出を・・・過ごした時間を・・・

そう思い病室へ入った

始まりの場所であり・・・

終わりの場所だった・・・

「ガチャ」

室内は真っ暗で何も見えなかった

京介は手探りで壁を触った

「何も見えへんわ・・・」

指元にスイッチを見つけた

「あつた・・・」

電気をつけよとした・・・

『つけないで・・・』

暗闇の中声が聞こえた・・・

「最後の最後にフラッシュバックか・・・」

俺も女々しい男だ・・・

そう感じた・・・

『京ちゃん・・・京介ちゃん・・・ごめん・・・ごめんね・・・』

『・・・』

月明かりの中・・・

目の前にウエディングドレスを着た千佳が立っていた

『ただいま・・・京ちゃん・・・全部思い出した・・・』

目の前い居る千佳はフラッシュバックではなく

本物の千佳がいた・・・

信じられない気持ちの反面・・・

すんなりと受け入れられている自分がいた・・・

『うっっ・・・うっっ・・・ち・・・ちい・・・おか・・・えり・・・』

京介はそのまま泣き崩れた・・・

千佳は京介に寄り添い力強く抱きしめた

『今まで本当にありがとう・・・京ちゃん・・・』

二人は月明かりに照らされ静かに祝福された

二人は何度別れても

何度でも出逢う

二人の始まりは用意されたものでもなく

運命なんだ・・・

アコウクロ・・・

物事の始まりと終わり・・・

生命の誕生と終わり・・・

一つの境界線のようにも感じ

全てが本当で・・・

全てが僕たちだった



二人は再び出逢った

「ちい・・・逢いたかった・・・」

「私も・・・京ちゃん。本当に遅くなってごめんなさい・・・」

京介はみっともないくらいに泣きわめき、千佳へしがみついた

千佳は今まで自分から離れないでいてくれた事に感謝し・・・

あの強いはずの京介が子供のように泣く姿を愛しく想い

優しく包み込んだ

『大丈夫。大丈夫よ 京ちゃん』

『うわあああー』

・ ・ ・ ・ ・

ちひろは病院へ向かっていた

すぐにナースセンターへ行った

『すみません！「ちい」・・・が「綾瀬 千佳」がこちらに来てませんか？』

『千佳さんなら、忘れ物があつたとかで病室だと思えますよ』

『ありがとうございます！』

ちひろは急いで病室へ向かった

千佳は病室で一人かもしれない……

「自殺……」

不吉な事が頭をよぎっていた

「ガチャ」

『ちいちゃん！』

目の前にはウエディングドレスで京介を抱きしめる千佳の姿があった

『ああ・・・ああ・・・二人・・・やっと逢えたんだね・・・』

『ただいま・・・ちひろ』

『これからだね・・・』

『うん。』

o

## アコウクロ episode

皆様「アコウクロ」完結までお付き合いいただきありがとうございますがとう御座いました。

「NEOSらしくない」ハッピーエンド的な終わり方でしたね（笑）

この終わりは方は当初の予定とは違いました。

更新をしてなかった期間に色々と考えて今の展開に辿りついた感じでした。

この時期は沢山考える事が多かった時期で、

私自身病みながらの物語の構成をしていた事を思い出されます。

「フラッシュバックや記憶喪失」

「薬の副作用」

「プラン進行の断念」

「失くしてから気づく人間の愚かさ」

「想いの大事さ」

「奇跡」

「希望」

「やり直し」

「真実の愛」

「綺麗事より泥臭い想い」

そんな事などを沢山考えていました

実際、終わってみると果たしてこのテーマに添っているのか？

どうでしょう（笑）

多分、大丈夫かなと思っています。

「傀儡」での千佳の最後からのスタート。

正直、始まりをどうするか悩んだ事を思い出されます（笑）



話が進むにつれ、京介の思考、行動、言葉などが、引っかかり逸話の話が増えて行きました（笑）

例えば、京都でのシーンや大阪でのシーン

千佳の故郷での出会い

登場人物が少ない分、簡単なようで難しかったですね

自我と本体のせめぎあいが高かったですかね・・

NEOS（原作）では「綾瀬 千佳」の名は

「長女」でした（笑）

これは読者のHNを起用した物語作りでした

私の書くアホな小説のファンの方を出演させる！と公約し書き始めたのが「傀儡」

最後には「ちい」と呼んでいるところは共通点として残しました

今回のラストでちいの記憶が最後の最後に戻るところ

泣き崩れる京介

千佳がセリフで言っていた

「もし、これが映画ならここで終って欲しい・・・」

その様な気持ちを工面した終わりになっています。

物語の登場人物のセリフで、また考えているのも（、強、）です  
すが・・・

何故か、そうしてあげたい。と思いました（笑）

また、途中、物語の進行に合わせた「詩」のUPはともこのアコ  
ウクロに良い雰囲気を出したのではないか。（FC2では公開しま  
せんでした、Faceさんの本棚を見てね）

Faceさんに感謝しております。

このアコウクロは 今後も続きます。

京介と千佳の物語は終わりましたが・・・実は少しリンクする話を  
用意しています。

また、Faceさんの書いていた「ホワイトスノー」（小説）もこ  
ちらで検討中（相談）です。

小説とは難しいようで簡単と思いますが・・・

読み手の感性と書き手の感性が同じく、共感できるように書くのは  
意外と難しいなと感じました（笑）

私は、他者の小説（販売されているもの）は読みません。

小説は作者の感性

他の読み物は作者の持論

と思うからです。

いつ間にか、似たり似せたりとなってしまう、そこに自己満足があ  
りたいと・・・

私はそう言うのはあまり好きじゃないのです（笑）

この物語も何かと似ているのかもかもしれませんが・・

私は本を読まないのも何と似ているかは知りません（笑）

言葉と言うものは伝えたり、理解したり、させたり、共感したり、とそういうものであると感じます。

長く書けばよい物でもなく

詳しく書き過ぎてもダメな時もある

改行が無くてもダメ、あってもダメ（NET）

PCで更新し携帯で見ると際の文字数や改行を考えやっているので  
が・・

なんか・・NEOSの）、強。（）シリーズみたくなくなってしまいましたね（笑）

では次回は「その後・・・」を続編として更新いたしますね。

アコウクロ 『その後・・・』

数カ月後・・・。

「パパパーン パパパーン」

ウエディングマーチが鳴り響く教会。

そこには沢山の人が集まっていた

カクテルドレスを身にまとった、千佳が居た

千佳は思っていた・・・

「あの時の写真のように・・・」

「記憶を思い出した今、辛い事も嬉しい事もあったけど、今、私が

私で居れる事が大事」

「大好きだった、京ちゃんと今こつとして同じ時間を過ごしている」

「私、お嫁さんになるんだ・・・」

沢山の歓声

沢山の人

沢山の涙

ちいにとっては、全てが宝物のように思えた

・  
・

・ ・ ・

披露宴でのお色直しは何度も行われた

華やかな色どりのドレスに身を包んだ千佳はまるで天使のようだった

そして最後のお色直し・・・

扉が開いた・・・

タキシード姿の京介

オリジナルウエディングドレスを着た千佳

観客の間をゆっくり振り抜け、上座まで行き・・・



そのドレスは変貌を遂げた

千佳が、くるつと回ると、ウエディングドレスはミニスカートのドレスに変わった

式場の人々はため息にも似た声をあげた

この演出は、ブライダルサロンの「めぐ」がプロデュースしていた

事情を知る、めぐは人事には思えず自分事のように嬉しく感じていた

打ち合わせの時、めぐは千佳の第一印象から、

今回のドレスの選択、ドレスのデザインをしていた

「京介さん。イメージは天使です」

「天使？」

「ちいさんのイメージ」

「そうか（笑）」

「式の演出任せてもらえませんか？」

「ありがとうございます。めぐさん。ちいも喜ぶよ」

「頑張ります！」

こうして、結婚式は行われていた

結婚式は皆に祝福された

新たなる二人の出発点

もう二度と離れない

二人はそう誓った

『ねえ、京ちゃん。ちい・・・東京を離れたい』

『俺もそう思っていたんや』

『で、場所なんだけど・・・』

『九州か沖縄辺りにでもするか？（笑）』

『実は、そうしたいって思ってたの（笑）』

『例のアコウクロの写真の約束の日。今年は果たせそうやな』

『うん）＊、＊（お母さんもちひろも喜んでくれるかな？』

『大喜びさ』

結婚式に来ていた、真子（母）ちひろも、この報告に大喜びした

『本当に良かったね。ちいちゃん』

『幸せになります）＊、＊（』

式は、名残惜しそうに終わったが、皆、なかなかその場を離れなかった・・・

・ ・ ・ ・

数カ月後・・・。

星空と夕陽がよく見える小高い場所

そこに小さいながらも新居を構えた

『ありがとう・・・京ちゃん。ずっと待っていてくれて、今とてもそう感じるんだ・・・』

『当たり前やないか（笑）』

千佳を抱き寄せてキスをした

・ ・ ・

翌年・・・。

千佳は女の子を出産した

その翌年には男の子

「想い続ける事は決して恥ずかしい事ではない

時間も無駄ではない

信じればきつと叶う

生きているって・・・幸せだ・・・」

・  
・  
・

小さな家族は今日もアコウクロを眺めていた

『あー！パパとママ、今、チューしてたでしょう』

『パパとママはいつまでも恋人同士だからだから沢山チュウするのよ』  
『（\*、、\*）』

千佳は子供たちに自慢をした

「\*、\*ダイジ」

。i.F

アコウクロ



「あとがき」

「あとがき」までの完読ありがとうございます

実は・・・私は人の想いと言うものを大事にしております。

信じられないでしょうが・・・信じなくても良いです（笑）

私は他者には自分を理解して欲しくないタイプですので・・・

アコウクロが完結へ向けて書いていた想いや考えなどをよく振り返ります。

実際、「傀儡」「監禁」とは違い、思い入れは多きものがありました。

この物語を完成させるまでに数ヶ月間の空白がありました・・・、

社会と接点を閉じ、それなりに考えることも多かったのが現状でした。

当時は、自暴自棄的などころもありましたね（笑）

空白の時間、数冊のノートを持ち

関連BLOGの書き物をひたすら書きました

その世界に没頭しなければ自分が崩れる

言わば、現実逃避的な部分だったのではないか？今はそう感じることもあります。

ですが、この書き物により救われた部分も多かったのは事実ですね・

そして、現在公開された記事とは内容（ノートに描いた）が異なる物が多いと言う事です

とても、そのままの内容では公開できないものもありました（笑）

時間が沢山あった分、表現がえぐかったり、幼稚であったりと読み直して感じました

今、こうして居る時とは違う自分の影を見ているような気がしました

「心に熱い想いをもち続ける」

これを忘れずに頑張っていたのかは、分かりませんが・・・（笑）

今はそう思っています。

また、人により苦痛の度合いが違う。

「俺に比べれば・・・、私に比べれば・・・」、

などと何かと自分を特別視する風潮が人にはあると考えます。

自分が輪の中心でありたい人間、そうでない人間

そんなのはどうでもいいと言う人間、多種多様ですね

ある出来事から、1年が経ち、私は沢山の事を学び、沢山のものを失いました

正直、しんどい一年でありましたが、時間というものはお構い無に

訪れます

また、今まで、気づけなかったこと、逃げていたことを気づく時間でもありました。

まともに生きるといえるのは、本当に大変なことだな・・・と感じる毎日です（笑）

そんな中、書き続けた、「アコウクロ」

駄作なのは分かっていますが・・・私の宝物です・・・

強者 らしくないと思つか・・・どうかは・・・

私にとっては差ほど重要でもなく

描きたいように描いた

少しでも、千佳であったり、京介になったつもりで読んでもらえたらな～なんて思っていました

（\*、\*、\*）へへへ

柄にもない作品を恥ずかしげも無く書いたのも一つのチャレンジです

「モノクロ」もそうです

そして・・・次の作品として・・・

「永遠の奏」 という作品を用意しています

準備でき次第更新いたしますので良かったらお付き合い願います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3114v/>

---

「アコウクロ」

2011年8月10日09時35分発行